

清代五台山における寺院建築の構成とその変容

—中国仏教、チベット仏教と皇帝権力の関係に着目して—

2020年 3月

余 思奇

清代五台山における寺院建築の構成とその変容

—中国仏教、チベット仏教と皇帝権力の関係に着目して—

余 思奇

システム情報工学研究科

筑波大学

2020年 3月

目次

第一章 序論	1
第一節 研究背景	1
第二節 研究対象と目的	6
第三節 研究方法と史料	13
第四節 先行研究と用語	15
第五節 小結	27
第二章 清代の五台山とその寺院建築	35
第一節 五台山の構成	35
第二節 康熙年間（1662-1722）の寺院	39
第三節 乾隆年間（1736-1795）の寺院	44
第四節 嘉慶年間（1796~1820）の寺院	56
第五節 小結	58
第三章 菩薩頂の空間構成とその変容	63
第一節 菩薩頂の現状	63
第二節 順治年間の菩薩頂	67
第三節 康熙年間の菩薩頂	68
第四節 乾隆年間の菩薩頂	70
第五節 嘉慶年間の菩薩頂	72
第六節 小結	77
第四章 鎮海寺の空間構成とその変容	84
第一節 鎮海寺の現状	84
第二節 康熙年間の鎮海寺	87
第三節 乾隆年間の鎮海寺	88
第四節 嘉慶年間の鎮海寺	93
第五節 小結	98

第五章 塔院寺の空間構成とその変容	106
第一節 塔院寺の現状	106
第二節 明代の塔院寺	110
第三節 順治・康熙年間の塔院寺	113
第四節 乾隆年間の塔院寺	114
第五節 嘉慶年間の塔院寺	115
第六節 小結	119
第六章 結論	124
第一節 2 空間の受容	124
第二節 3 空間の特質	124
第三節 3 空間の相互関係	125
第四節 熱河との比較を通じてみた五台山の特徴	126
主な参考文献	134
付表1：清代皇帝系譜	140
付表2：チャンキャ・ホトクト系活仏系譜	141
付表3：成稿一覧	142
謝辞	143

図表目次

第一章

図 1-1-1 比叡山現状図	3
図 1-1-2 高野山現状図	4
図 1-1-3 中国仏教四大名山	5
図 1-1-4 中国内地におけるチベット仏教の三大中心地	6
図 1-2-1 高野山根本大塔	7
図 1-2-2 五台山大白塔と菩薩頂	7
図 1-2-3 清代末期の台懷	8
図 1-2-4 清代末期の大白塔	8
表 1-2-1 清代の西巡	11
図 1-3-1 野帳	15
図 1-4-1 永寧寺遺跡の平面図	16
図 1-4-2 妙応寺白塔が所在する院子の平面図	17
図 1-4-3 北京妙応寺の山門と白塔	17
図 1-4-4 敦煌莫高窟「五台山図」	18
図 1-4-5 「五台山図」に描かれた大寺院	20
図 1-4-6 「五台山図」に描かれた小寺院	20
図 1-4-7 南禅寺大仏殿	21
図 1-4-8 佛光寺東大殿	22
図 1-4-9 紫禁城太和殿	27
図 1-4-10 紫禁城中和殿	27

第二章

図 2-1-1 清代山西省政区図	35
図 2-1-2 清代五台縣図	36
図 2-1-3 五台山空間構成概念図	36
図 2-1-4 長城嶺遺跡	36
図 2-1-5 清代末期台懷寺院分布図	37
図 2-1-6 清代仁宗の西巡ルート	38

表 2-2-1	五台山の 100 寺院 (康熙 40 年・1701)	39
図 2-3-1	五台山 38 寺院の分布 (乾隆 11 年・1746)	44
表 2-3-1	五台山の 38 寺院 (乾隆 11 年・1746)	45
図 2-3-2	五台山 56 寺院の分布 (乾隆 50 年・1785)	50
表 2-3-2	五台山の 56 寺院 (乾隆 50 年・1785)	51
図 2-4-1	五台山 11 寺院の分布 (嘉慶 17 年・1812)	57
表 2-4-1	五台山の 11 寺院 (嘉慶 17 年・1812)	57

第三章

図 3-1-1	菩薩頂の位置	63
図 3-1-2	菩薩頂配置図	64
図 3-1-3	菩薩頂チベット式の塔	65
図 3-1-4	菩薩頂銅塔	66
図 3-1-5	大雄宝殿	66
図 3-1-6	大文殊殿	66
図 3-1-7	怖畏金剛殿	66
図 3-1-8	碑院の入り口	66
図 3-1-9	碑亭と石碑	67
図 3-2-1	菩薩頂伽藍変容模式図	68
図 3-5-1	菩薩頂地盤図 (嘉慶 15 年・1810)	73
図 3-5-2	菩薩頂図 (嘉慶 17 年・1812)	74
図 3-5-3	支摘窓	75
図 3-5-4	榻扇	75
図 3-5-5	炕罩	75
図 3-5-6	落地罩	75
表 3-5-1	菩薩頂の屋根形と建築の規模	76

第四章

図 4-1-1	鎮海寺の位置	84
図 4-1-2	鎮海寺配置図	85
図 4-1-3	大雄宝殿	86

図 4-1-4	垂花門	86	
図 4-1-5	チャンキヤ・ホトクト霊塔	86	
図 4-1-6	南西院の正面	87	
図 4-1-7	南西院の内部	87	
図 4-2-1	鎮海寺伽藍変容模式図	88	
図 4-3-1	「畫鎮海寺雪景」部分（張若靄、乾隆 11 年・1746）	89	
図 4-3-2	「畫鎮海寺雪景」部分（張若澄、乾隆 15 年・1750）	90	
図 4-4-1	鎮海寺地盤図（嘉慶 15 年・1810）	94	
図 4-4-2	鎮海寺図（嘉慶 17 年・1812）	95	
図 4-4-3	飛罩	97	
図 4-4-4	天然罩	97	
表 4-4-1	鎮海寺の屋根形と建築の規模	98	

第五章

図 5-1-1	塔院寺の位置	106	
図 5-1-2	塔院寺配置図	107	
図 5-1-3	大慈延壽宝殿	108	
図 5-1-4	大蔵経閣	108	
図 5-1-5	大白塔	108	
図 5-1-6	大白塔を右繞する人	108	
図 5-1-7	毛沢東路居旧址	109	
図 5-1-8	室内の毛沢東半身像を礼拝する僧侶	109	
図 5-2-1	塔院寺伽藍変容模式図	111	
図 5-5-1	塔院寺地盤図（嘉慶 15 年・1810）	116	
図 5-5-2	塔院寺図（嘉慶 17 年・1812）	117	
図 5-5-3	碧紗櫺	118	
表 5-5-1	塔院寺の屋根形と建築の規模	119	

第六章

図 6-4-1	熱河のマスタープラン	126	
図 6-4-2	普寧寺・普佑寺平面図	127	

図 6-4-3	安遠廟平面図	127
図 6-4-4	須彌福壽之廟平面図	127
図 6-4-5	普陀宗乘之廟平面図	127
図 6-4-6	普樂寺平面図	128
図 6-4-7	普陀宗乘之廟	128
表 6-4-1	熱河の 12 寺院	129

論文概要

キーワード：清代、五台山、中国仏教、チベット仏教、皇帝権力、菩薩頂、鎮海寺、塔院寺

清代の康熙・乾隆・嘉慶年間に遡り、五台山中心部の台懷に位置する菩薩頂・鎮海寺・塔院寺の三つの代表的な寺院を取り上げ、中国仏教・チベット仏教・皇帝権力に対応する三つの性格が異なる空間を着目し、伽藍の構成と寺院の変容を明らかにする。

第一章 序論

第一節 研究背景

(1) 宗教と宗教聖地

どんな人でも日常生活の中で、あちこちにある神道の神社、仏教の寺院、キリスト教の教会、イスラム教のモスクなどの宗教施設に偶然に出会ったことがあるだろう。これらの施設に人が集い、宗教活動が行われている様子を見たことのある人も少なくないと思われる。しかし、宗教とは如何なるものかと改めて問い直してみると、人が一言で答えられる簡単な問いでないことに気付かされる。

宗教については、『広辞苑』には「宗教は神または何らかの超越的絶対者、或いは卑俗なものから分離され禁忌された神聖なものに関する信仰・行事」とある^{注1)}。また、『日本大百科全書』には「世界には日常の経験によっては証明不可能な秩序が存在し、人間は神あるいは法則という象徴を媒介としてこれを理解し、その秩序を根拠として人間の生活の目標とそれを取り巻く状況の意味と価値が普遍的、永続的に説明できるという信念の体系をいう。この信念は、生き生きした実在感をもって体験として受け取られ、合理的には解決できない問題から生じる知的、情的な緊張を解消し、人間に生きがい、幸福を与える役割を果たすものとして期待されている。また、信念を同じくする人々が、教会、教団とよばれる共同体を形成する」と記述されている^{注2)}。言い換えれば、宗教は人間・自然の力を超えるものとして、人間の苦しい精神世界を慰めている。

現在日本では、神道、仏教、およびキリスト教が主な三つの宗教であり、文化庁により公開されたデータ（2017年12月31日現在）によると、神道の信者は8,616.6万、仏教の信者は8,533.3万人、キリストの信者は192.1万人がいることがわかる^{注3)}。三つの宗教の信者数を合わせると、日本の総人口を超える。そのうち、仏教の信者数は総人口約7割を占めることがわかる^{注4)}。21世紀の今に至っても、宗教はまだ生きており、人々の精神を慰藉していると言える。

当然、時代を遡ってみても、洋の東西を問わず、古代、中世、近世にわたって長く、宗教は強いパワーを持ち、人間の精神を強く支配していた。その結果のひとつとして、各地に複数の宗教聖地が形成された。

聖地については、『日本大百科全書』には「宗教的あるいは伝説的に日常の空間とは異なる神聖さを持ち、通常タブーとされる区域。その規模は、イスラム教徒にとってのメッカといった都市大の聖地から、1本の樹木といった小さな聖地までさまざまであるが、聖地はその成り立ちからおよそ自然的聖地、人工的に生み出された聖地、創造主や聖者に起源を発す

る聖地の三つに分類される」とある^{注5)}。宗教聖地は日常の空間とは異なる空間ではあるが、教典に記述されている、体感できない神々のすまいである「天国」「浄土」などに対して、「見る、聞く、触る」できる実在の場所である。キリスト教ではエルサレム、イスラム教ではメッカと主要な聖地が一箇所であるのに対して、アジア仏教文化圏には数多くの宗教聖地が存在した。

アジア仏教文化圏では、伝播経路の違いにより、古代インドに興った仏教は東南アジアに伝播した上部座仏教（南伝仏教）、東アジアに伝播した大乘仏教（北伝仏教）、中央アジアに伝播したチベット仏教の三つの系統に区別される。中国内では、顕教の性格が強い中国仏教（漢伝仏教）と密教の性格が強いチベット仏教（蔵伝仏教）の二大系統がある。シルクロードを経て中国伝来し、漢訳経典を根拠とする仏教を中国仏教と言い、チベット高原を中心に発展しチベット語訳経典を根拠とする仏教をチベット仏教という。戦前にはチベット仏教をラマ教（喇嘛教）、チベット仏教寺院をラマ寺（喇嘛寺）と呼称されていた。

日本では、顕教の性格が強い三論宗、法相宗、禅宗など、密教の性格が強い真言宗、天台宗などの宗派が存在し、これらの宗派に対応して高野山、比叡山などの仏教聖地が広く知られている。

(2) 日本の仏教聖地

奈良時代の平城京を中心に三論、法相、俱舎、律、成実、華嚴の六つの仏教宗派が次々に成立したことにともない、数多くの寺院の建立が相次いだ。そのうち、元興寺、大安寺、薬師寺、興福寺、東大寺、唐招提寺、西大寺の7寺院の名が高い。これらの寺院は整然とした伽藍配置を持つ。明確な南北中心軸が寺院を貫き、中心軸上に中門、金堂、講堂などの主な建築が配列され、金堂の前庭には複廊が巡らされている。寺内には僧房、食堂、仏塔などの施設も存在したことがわかる^{注6)}。

時代が降り、平安時代になると山岳仏教が盛んになり、比叡山と高野山は山岳仏教を代表する聖地となる。比叡山は京都と滋賀の境にある海拔 849 メートルの山であり、「三塔」と通称する東塔、西塔、横川の三つの地区で構成されていた。三塔は「十六谷」という教学教派上のグループに分かれ、それぞれに山坊、雑舎などの施設が建設された。「三塔十六谷」を合わせて一つの寺院を形成し、この寺院は延暦寺と呼称された天台宗の寺院であった（図 1-1-1）^{注7)}。一方、高野山は紀伊の山々に囲まれる海拔約 850 メートルにある高地に位置する盆地である。全山が金剛峰寺と呼ばれる真言宗の寺院であった。高野山には「両壇」という二つの中心があり、一つの中心は盆地の西部に位置する教学の中心である壇上伽藍、もう

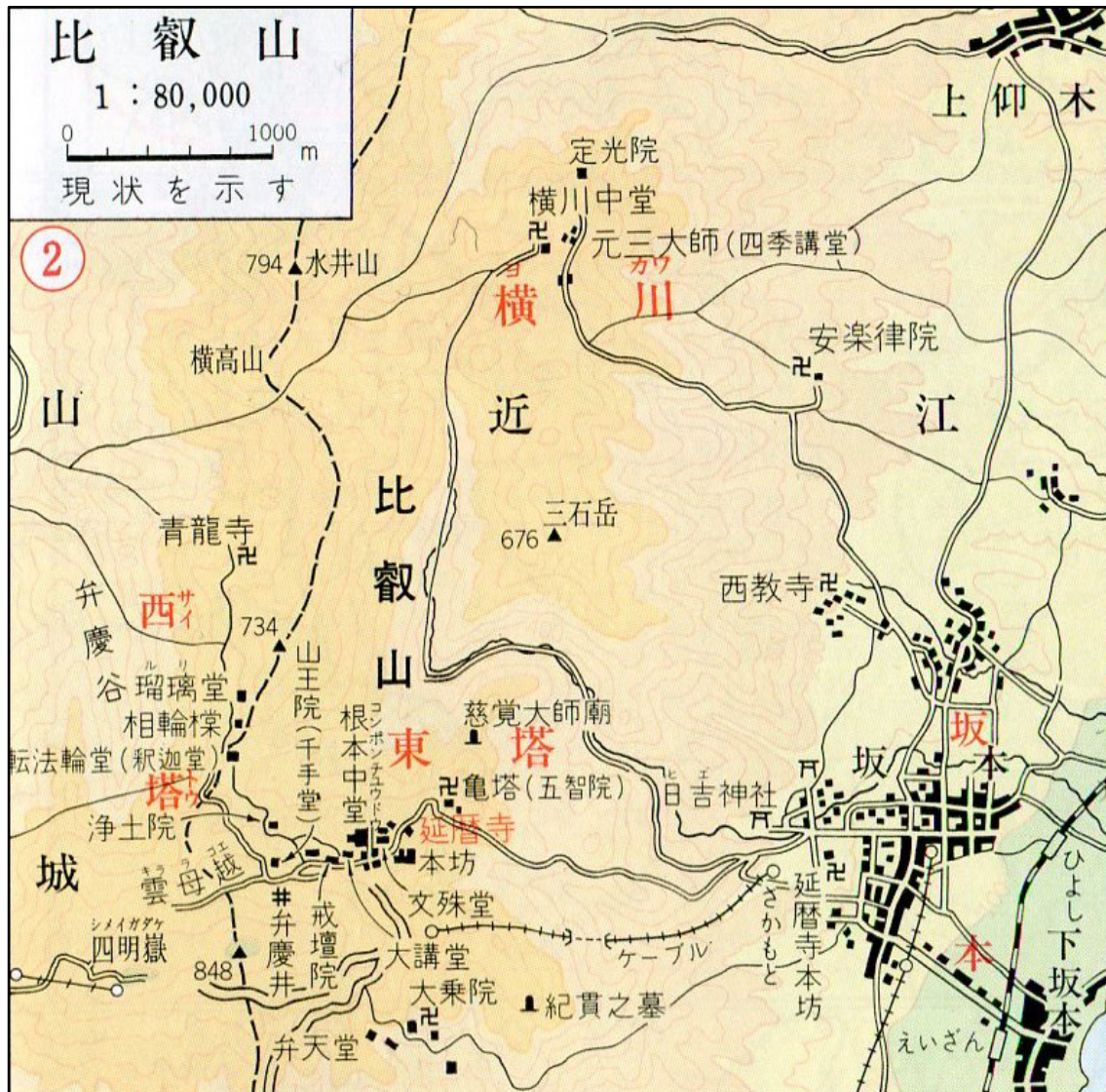


図 1-1-1 比叡山現状図

一つは盆地の東部にある信仰の中心である空海（弘法大師）の霊廟の奥院である。近世にはいると、二つを中心に夥しい子院が現れた。これらの子院は 10 カ所の近隣社会のようなグループに分かれ、「高野十谷」と呼ばれた（図 1-1-2）^{注 8)}。平安時代の二大山岳仏教聖地である比叡山延暦寺と高野山金剛峰寺はそれぞれ一つの宗派が独占する宗教都市にその後なった。

鎌倉時代に入ると、禅宗が中国から伝来した。南宋の江南地区で実行されていた「五山十刹」という官寺・寺格制度を模倣し、鎌倉幕府は鎌倉と京都にある禅宗寺院を五山・十刹・諸山の 3 段階の体系に編成した。そのうち、鎌倉に所在した「五山」が建長寺、円覚寺、寿福寺、浄智寺、浄妙寺である。これらの寺院は中国から伝わった禅宗様を用いて創建され、三門、仏殿、庫院、法堂および方丈が寺院の中心を構成した。また、伽藍の中心部を離れた

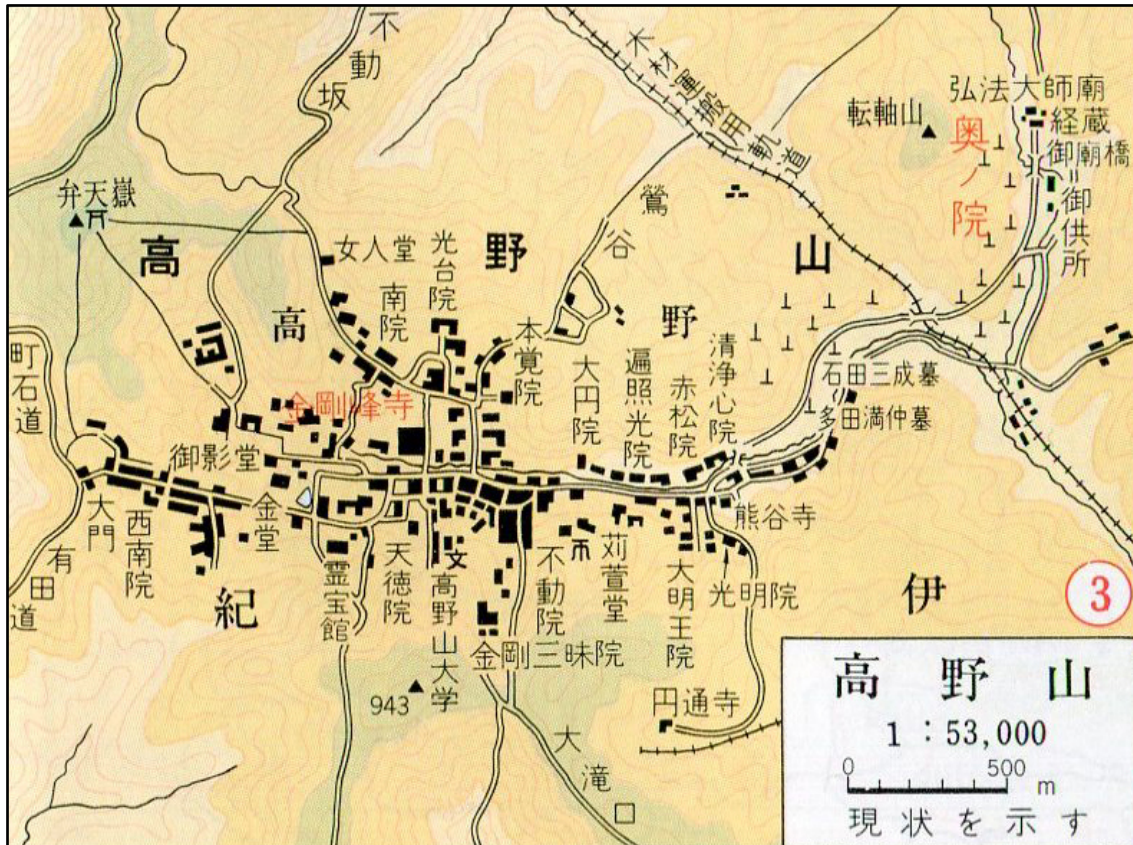


図 1-1-2 高野山現状図

境内の周縁には子院が僧侶のすまいとして計画され、さらに子院の周りに種々の階層の人のすまいを建てたことがわかる。鎌倉の禅宗寺院は宗教施設としての建築群を超え、伽藍を中心とした広大な都市的な空間に発展したという^{注9)}。

(3) 中国の仏教聖地

中国外地(清代には「中国藩部」と称した)のチベット自治区、青海省、モンゴル自治区などの地区では、多くの少数民族がチベット仏教を信仰するので、チベット仏教が盛んである。そのため、トゥルナン寺(大昭寺)が所在するラサ(チベット自治区拉薩市)、タシルンポ寺(扎什倫布寺)が所在するシガツェ(チベット自治区日喀則市)、クンブム・チャンパーリン寺(塔爾寺)が所在する西寧(青海省の省都)などのチベット仏教の聖地が成立した。

一方、漢民族が集中する中国内地(清・民国時代には「内地十八省」「中国本部」と称した)には五台山、峨眉山、普陀山、九華山の四つの聖地があり、文殊菩薩、普賢菩薩、観音菩薩、地藏菩薩それぞれの霊場として広く知られている。四つの山を合わせて「中国仏教四大名山」という。比叡山・高野山と同じく、仏教四大名山は中国内地にある山岳仏教を代表する聖地である。五台山は山西省の東北、峨眉山は四川省の西南、九華山は安徽省の東南にある。普陀



図 1-1-3 中国仏教四大名山

山は一つの島であり、浙江省東北の東シナ海に位置する（図 1-2-3）。

唐代には『華嚴経』に基づく華嚴思想が盛んだったため、五台山は文殊菩薩の霊場に指定され、皇帝から庶民まで広く信仰を集めた。当時の峨眉山と合わせて「金色世界の五台、銀色世界の峨眉」などとも言われた。明清時代に入ると、普陀山と九華山が相次いで開発され、菩薩の霊場となった。この頃には「金五台、銀峨眉、銅普陀、鉄九華」とも称され、四つの聖地中国仏教四大名山が形成された。中でも五台山は中国仏教聖地の首席の地位を持っていたと考えられる^{注10)}。

高野山・比叡山が最初から仏教聖地として開かれたのとは異なり、四つの山では、当初在来宗教である道教によって仙山視され、宗教的活動が行なわれていたと思われる。従って、これらの山では道教と外来宗教である仏教とが併存した時期もある。仏教が中国に定着して以降は、様々な仏教宗派が四山に色々な寺院を建立し、各自の独特な理論と修行が行われるようになった^{注11)}。

四山に特徴的なのは比叡山・高野山で実行されていた女人禁制という制度がなかったことである。つまり、聖俗男女に開放され、単一の宗派の主張を超え、複数宗派の寺院が共存



図 1-1-4 中国内地におけるチベット仏教の三大中心地

するのが中国山岳仏教聖地の特徴である。

中でも、五台山は中国仏教の聖地としてだけではなく、中国内地にあるチベット仏教の聖地としても名が高い。清代に皇帝はチベット仏教を利用し、モンゴル・チベット民族を懐柔する政策を打ち出した。このため、チベット仏教は中国仏教が盛んになった中国内地にも積極的に導入された。中国内地にも夥しい数のチベット仏教寺院が建立されたのである。さらに、五台山に北京、熱河（現河北省承德市）を加え、中国内地にはチベット仏教の三大中心が形成された（図 1-2-4）^{注12)}。中国仏教とチベット仏教、異なる系統の仏教が共存したことが五台山の大きな特徴である。

第二節 研究対象と目的

(1) なぜ清代の五台山

現在和歌山県の高野山に行くと、壇上伽藍にある正方形の初層の上に円形の上層を重ねる根本大塔がみられる（図 1-2-1）。圧倒的な巨大さと多宝塔の特徴的な様式を持つ根本大塔は真言密教を象徴し、高野山の特徴的な景観として注目を集めている。

同じく、山西省の五台山に行くとき、五台山台懷に分布する寺々の中に巨大な白色の仏塔がみられる（図 1-2-2）。この仏塔は塔院寺という寺院の中に位置し、チベット仏教の伝統的な様式を持ち、五台山の特徴的な景観として注目を集める。チベット式の仏塔の後ろにある小さな山の頂上には菩薩頂という寺院があり、寺院建築の屋根には黄色瑠璃瓦が葺かれている。古代中国では黄色瑠璃瓦は皇帝の身分に応じる建築にしか使用されないものであり、菩薩頂は特徴的な景観を有していると言える。

山々で囲まれた盆地に中国仏教の寺院、およびチベット仏教と皇帝権力に対応する景観が併存するのは五台山の特徴のひとつである。そして、このような景観は清代に遡ることが写真、文献などによって確認できる（図 1-2-3）（図 1-2-4）。



図 1-2-1 高野山根本大塔
(2019年2月、筆者撮影)



図 1-2-2 五台山大白塔と菩薩頂



图 1-2-3 清代末期の台懷 (1907 年、Ernst Boerschmann 撮影)



图 1-2-4 清代末期の大白塔 (1907 年、Ernst Boerschmann 撮影)

(2) チベット仏教の伝来と皇帝権力の導入

チベット仏教はモンゴル族が中国を支配した元代に、モンゴル族を介して中国内地に伝来し、のちに五台山に定着した。このことで、中国仏教聖地である五台山は中国仏教とチベット仏教が併存する聖地が変わった。漢民族王朝の明代に入っても、元代のチベット仏教を保護する宗教政策が受け継がれ、チベット仏教の発展を促した。明代が滅亡した後、中国最後の王朝である清代を迎える。

清代は従来中国東北で暮っていた満州族によって建国され、1644 から 1912 年までの 276 年間にわたってチベット、新疆、モンゴル、満州、台湾などの地域を含めた広大な領土を支配していた。最初の首都は盛京（現遼寧省瀋陽市）であり、のちに明代の北京を受け継ぎ、都が置かれた。支配層の皇室は満州族の愛新覺羅氏（アイシンギョロシ）の一族であった。

政治、経済、軍事、外交などの面から、清代前期の康熙・乾隆年間には王朝の繁栄期とされる。康熙・乾隆年間に聖祖（第4代皇帝、愛新覺羅玄燁）・高宗（第6代皇帝、愛新覺羅弘曆）は頻繁に五台山への巡幸を行った。乾隆末年から王朝は衰退し、嘉慶年間仁宗（第7代皇帝、愛新覺羅顥琰）は1回五台山への巡幸を行ったが、これが最後となり、この後五台山を巡幸した皇帝はいなかった。嘉慶末年の1820年から20年を経て、第一次アヘン戦争は勃発した。戦争の敗北を節目として、中国は近代を迎えた。

つまり、康熙・乾隆・嘉慶各年間の3人の皇帝は五台山チベット仏教の発展と寺院の建設を促進し、皇帝が巡幸したことによって、当時の五台山に関する史料が多く残されることになった。

清代の皇帝が富饒な江南地区へ巡幸することを南巡、離宮が所在する熱河へ巡幸することを北巡、発祥地の盛京を巡幸することを東巡というのに対し、北京を出発して西の五台山への巡幸は西巡という^{注13}。

聖祖は康熙22年（1683）2月、同22年9月、同37年（1698）2月、同41年（1702）2月、同49年（1710）2月の計5回、五台山への西巡を行い、多くの寺院を訪問した（表3-2-1）。西巡が頻繁に行われた原因について、王敬雅は以下の4点を指摘している^{注14}。①親族への孝行：1回目の西巡は太皇太后（聖祖の祖母）の意思に従って行った。2回目の巡幸では聖祖は太皇太后をつれて五台山へ行き、自ら天下に孝道を表した。②政治：清・ジュンガル戦争（清朝とモンゴルのジュンガル（準噶爾部）の間で行われた戦争）、およびジュンガル・ハルハ戦争（モンゴルのジュンガルとハルハ（喀爾喀部）の間に勃発した戦争）から、聖祖はチベットとモンゴルとの間に潜在的なつながりであるチベット仏教の力を実感した。モンゴル・チベットと中央政府の関係を強化するために、従来の仏教聖地の五台山に目をつけ、五台山を中国内地の

チベット仏教の中心地として整備しようとした。3回目の巡幸を行って以降、五台山にあるチベット仏教寺院はさらに発展している。③寺院の観察：モンゴル・チベットの高僧の勢力を牽制するために、4回目の巡幸の際には、台懷にある寺院を観察し、チャンキヤ・ホトクト勢力を五台山に導入する準備をした。④父子関係の融和：5回目の巡幸を行う前に、聖祖によって皇太子が廃された。諸皇子とのますます激化した不和を融和する意図で、一端都を離れる巡幸が行われた。

乾隆年間に入ると、乾隆11年(1746)9月、同15年(1750)2月、同26年(1761)2月、同46年(1781)3月、同51年(1786)3月、同57年(1792)3月の計6回にわたり、高宗は西巡を行い、多くの寺院を訪問したほか、新築された大宮、行宮で滞在したことがわかる(表3-2-1)。高宗が五台山へ頻りに巡幸した原因について、趙雲田は以下の4点を指摘している^{註15)}。①チベット仏教を利用、モンゴルとチベットを懐柔：清代の五台山には数多くのチベット仏教寺院が存在した。高宗は五台山の中心寺院の性格を有したチベット仏教寺院である菩薩頂に滞在し、自らチベット仏教への敬意を表することで、モンゴルとチベットを懐柔しようとした。②聖祖の行為の模倣：祖父である聖祖が5回五台山を訪問した前例を模倣した。③地方の情勢を調査：直隸省と山西省の地元の民俗、治安などの状況を自ら把握した。④親孝行：6回の西巡のうち、3回は皇太后(高宗の母親)をつれて五台山を訪問した。乾隆26年には皇太后70歳の誕生日を祝福するために、前年の8月に翌年五台山顛通寺を参詣する予定を伝え、各衙門に準備をきちんと整えるよう命じたという。

なお、嘉慶年間に入ると、嘉慶16年(1811)3月に仁宗は西巡を行った。その期間に仁宗は11寺院を訪問し、3行宮に滞在し、2尖宮で休憩したことがわかる(表3-2-1)。嘉慶16年に行われた西巡の目的について、林士鉉は以下の3点を主張している^{註16)}。①政治：チベット仏教文化圏では、最も重要な聖地はラサである。康熙・乾隆年間を経て、皇帝権力によって五台山は「中華衛藏」(中国内地のチベット)のような地位を有するに至った。同時に、五台山は皇帝とチャンキヤ・ホトクトなどのチベット仏教の高僧とが交際する重要な場所に発展した。五台山の宗教地位と高僧の権威を利用し、チベット仏教を信仰するモンゴルの貴族を懐柔し、中国外地である広大なモンゴル地域を安定させた。②文化：仁宗は天下の士人(知識人)、特に山西省出身の士人が西巡に反映された王朝の盛世を賛頌することを奨励した。③伝統：仁宗は保守的な皇帝で、先祖に倣って西巡を行った。

なお、嘉慶16年以降は、西巡は行われておらず、五台山の各施設の修繕報告も少なくなっていたという。

以上、いずれの場合においても、西巡が行われた主な原因は広大な国家を安定させる政治

の方策であった。そして、頻繁な西巡を介して皇帝権力は五台山に影響を与え続け、その結果五台山は盛期を迎え、多くの建築が整備された。

表 1-2-1 清代の西巡

皇帝	回数	西巡の時間	西暦	訪問先	滞在場所	休憩場所
聖祖	1	康熙 22 年 2 月	1683	南台、東台、北台、中台、西台	菩薩頂	-
	2	康熙 22 年 9 月	1683	菩薩頂	菩薩頂	-
	3	康熙 37 年 2 月	1698	普濟寺、清涼石、南台、古南台、妙徳院、玉花池 ^{注2)} など ^{注3)}	菩薩頂、白雲寺	-
	4	康熙 41 年 2 月	1702	羅睺寺、中台、西台、清涼石、南台、妙徳庵、碧山寺、広宗寺、湧泉寺など	台麓寺、菩薩頂	-
	5	康熙 49 年 2 月	1710	-	射虎川地方、羅睺寺、白雲寺	-
高宗	1	乾隆 11 年 9 月	1746	台麓寺、古佛寺、白雲寺、殊像寺、菩薩頂、塔院寺、碧山寺、羅漢坪、北台、羅睺寺、顯通寺、壽寧寺、玉花池、中台演教寺、白桃菴	射虎川、菩薩頂大宮	-
	2	乾隆 15 年 2 月	1750	台麓寺、鎮海寺、殊像寺、清涼寺、白雲寺、大螺頂 ^{注4)} 、菩薩頂、塔院寺、羅睺寺	射虎川大宮、菩薩頂大宮	-
	3	乾隆 26 年 2 月	1761	台麓寺、白雲寺、殊像寺、菩薩頂、清涼寺、塔院寺、羅睺寺、顯通寺、大螺頂、壽寧寺、萬壽寺、棲賢寺、鎮海寺、明月池、千佛洞、湧泉寺	台麓寺行宮、菩薩頂行宮	-
	4	乾隆 46 年 3 月	1781	湧泉寺、台麓寺、殊像寺、菩薩頂、塔院寺、顯通寺、羅睺寺、普樂院、金剛窟、鎮海寺、明月池、白雲寺	台麓寺行宮、白雲寺行宮、菩薩頂行宮	-
	5	乾隆 51 年 3 月	1786	菩薩頂、普樂院 ^{注5)}	台麓寺行宮、白雲寺行宮、菩薩頂行宮	-

	6	乾隆 57 年 3 月	1792	湧泉寺、台麓寺、白雲寺、殊像寺、菩薩頂、塔院寺、顯通寺、羅睺寺、壽寧寺、玉花池、萬壽寺、大螺頂、鎮海寺、明月池	台麓寺行宮、白雲寺行宮、菩薩頂行宮	-
仁宗	1	嘉慶 16 年 3 月	1811	鎮海寺、殊像寺、菩薩頂、大螺頂、金剛窟、普樂院、羅睺寺、顯通寺、塔院寺、壽寧寺、玉花池	台麓寺行宮、白雲寺行宮、菩薩頂行宮	湧泉寺尖營、漢河村尖營

注 1) 「-」 はなし、または史料がない。

注 2) 『清代起居注・康熙朝』、臺北所蔵、第 11 冊には「羽化池」とあるが、中国語の「羽化」と「玉花」の発音が同じあることから混乱したと考えられるので、「玉花池」とする。

注 3) 『清代起居注・康熙朝』、臺北所蔵、第 11 冊には「等」とある。

注 4) 『乾隆帝起居注』、第 9 冊に「大羅頂」とあるが、「大螺頂」とする。

注 5) 『乾隆帝起居注』『大清高宗純（乾隆）皇帝實録』には記述がない。「三世章嘉呼圖克圖圓寂前後史料選譯」によると、乾隆 51 年高宗は菩薩頂、普樂院を訪問したことがわかる。他の寺院も訪問した可能性が高いが、未詳。

(3) 研究の目的

前述のように、清代の五台山はチベット仏教と皇帝権力から影響を受け、従来の中国仏教寺院にチベット仏教と皇帝権力の空間が現れた。このため、中国仏教寺院はいかなる経緯でチベット仏教・皇帝権力の空間を受容したのか、伽藍配置を構成する中国仏教・チベット仏教・皇帝権力の三つの空間はいかなる関係があったのか、について解明することが本研究の目的である。

これらの課題を解明するために、五台山にある多くの寺院を概観した上で、主として菩薩頂、鎮海寺、塔院寺の 3 寺院を取り上げる。後述のように、3 寺院を構成する建物の多くは明清時代の遺構である。鎮海寺、塔院寺の 2 寺院の中では中国仏教、チベット仏教と皇帝権力の三つの空間が併存して伽藍を構成している。鎮海寺にあるチベット式の霊塔はチベット仏教活仏のお墓であるが、塔院寺に建設されたチベット式の大白塔は經典、宝物などを格納するものであるという。両寺の 2 基の仏塔はそれぞれ周りの建物と二つの塔院を構成する。一方、菩薩頂では、山門の前に現存するチベット式の塔を除外すれば、寺内には中国仏教・皇帝権力の二つの空間しか存在しない。

本研究では、建築の外観、構造、意匠などの面から、五台山の寺院を構成する構造物を検

討するわけではない。漢民族・チベット族などの伝統的建築や、中国仏教・チベット仏教の異なる系統の信仰などの、別個の存在と扱われてきたものを一体的に捉え、聖的な宗教だけでなく、俗的な皇帝権力の影響を含めて考察し、院子を単位としてその伽藍の構成とその変容を明らかにしようとする視点を持っている。

第三節 研究方法と史料

(1) 研究の方法

本研究では、中国国内および世界各地で刊行または収蔵されている碑文、詩文、山志、档案、伝記などの文献史料や、絵図、絵画などの図像史料、現代の実測された配置図および筆者の現地調査に基づく配置図を用いて分析する。

(2) 文献史料

碑文については、2016年に山西人民出版社によって刊行された『五臺山碑文』を主に利用する。同書には五台山に残る歴代の碑文を合わせて393篇が収録されている。碑文の内容により、聖旨碑、警戒碑、塔銘碑、功德碑、記名碑、述事碑、紀遊碑、詩賦碑などの種類が存在する。

高宗は89年の生涯の中で、おおよそ43,600篇余の詩文を書いた。特に、即位後に書いた詩文が『御制詩初集』『御制詩二集』『御制詩三集』『御制詩四集』『御制詩五集』に編集され、さらに『四庫全書』(乾隆57年・1792)の中に収録された。本研究では、1983年に台湾商務印書館から刊行された『文淵閣四庫全書』(紫禁城文淵閣本、国立故宫博物院(台北)に所蔵)に収録された詩文を使用することとする。夥しい数の詩文の文学性は高くないと評価されるが、清代歴史の研究では重要な史料として広く引用されている。

五台山は清涼山とも呼称されるので、五台山の山志は清涼山の名を冠する。伝存する山志の中で、『清涼山新志』は清代康熙40年(1701)菩薩頂の住持の老藏丹巴によってまとめられたもので、「化宇」「原聖」「靈蹟」「伽藍」「崇建」などの10巻で構成されている。

一方、乾隆年間には二つの山志、『清涼山小志』と『欽定清涼山志』が伝存する。『清涼山小志』は乾隆11年(1746)の西巡に同行した和碩和親王の愛新覺羅弘晝(高宗の弟)によって記され、全書38寺院の創建年代、所在、伽藍配置、および僧侶の人数、性質(中国仏教僧かチベット仏教僧か)などの情報が記述されている。清代の他の山志と比べると、乾隆年間の五台山寺院で生活していた僧侶の人数と性質をやや詳しく記述しており、『清涼山小志』の価値は高いと言える。また、『欽定清涼山志』は乾隆50年(1785)軍機大臣(最高政治機関の軍機

処で働く官僚)が高宗の意思を受けて編纂した。「聖製」「天章」「巡典」「佛蹟」「名勝」「寺院」「歴代崇建」などの22巻で構成されている。

中国第一歴史档案馆は明清時代の中央政府および皇室の档案(永久保存文書)が所蔵されている機関である。公開された档案の中で、五台山に関係のある史料が「乾嘉年間五台山寺廟行宮修繕工程史料」「三世章嘉呼圖克圖圓寂前後史料選譯」として編纂され刊行された。「乾嘉年間五台山寺廟行宮修繕工程史料」には乾隆・嘉慶年間(1736~1820)に五台山で行われた建築の修繕工程が記述される。「三世章嘉呼圖克圖圓寂前後史料選譯」には、乾隆51年チベット仏教活仏のチャンキヤ・ホトクト3世(第3世章嘉呼圖克圖、名前はロルペー・ドルジェ/若必多吉)が五台山で病で逝去した前後が記述されている。

また、清代の国師(皇帝から贈られる称号)であるチャンキヤ・ホトクト3世の伝記として、『章嘉国師若必多吉傳』が残っている。同書はチャンキヤ・ホトクト3世の弟子である土觀・洛桑卻吉瑪(土觀活仏系の第3世)によってチベット語で著され、1988年に陳慶英、馬連龍によって中国語に訳され刊行された。

(3) 図像史料

本研究では、「五台山行宮座落地盤圖」、および『西巡盛典』に収録される古絵図を主な図像史料として用いる。「五台山行宮座落地盤圖」は嘉慶15年(1810)^{注17)}に作成されたもので、中国国家図書館に所蔵されている。塔院寺、殊像寺、普樂院、大螺頂、壽寧寺、鎮海寺、玉花池、菩薩頂の8寺院、台麓寺行宮、白雲寺行宮、台懷鎮行宮の3行宮、湧泉寺尖宮、漢河村尖宮の2尖宮、合わせて13カ所の施設の地盤圖(平面図)がそれぞれ描かれている。この図に関する学術論文・著書はほとんどなく、概要を紹介するものがある程度であり、制作年代、制作背景についても言及されていない。「五台山行宮座落地盤図」は学界に忘れられているように見えるが、重要な史料であると考え^{注17)}。

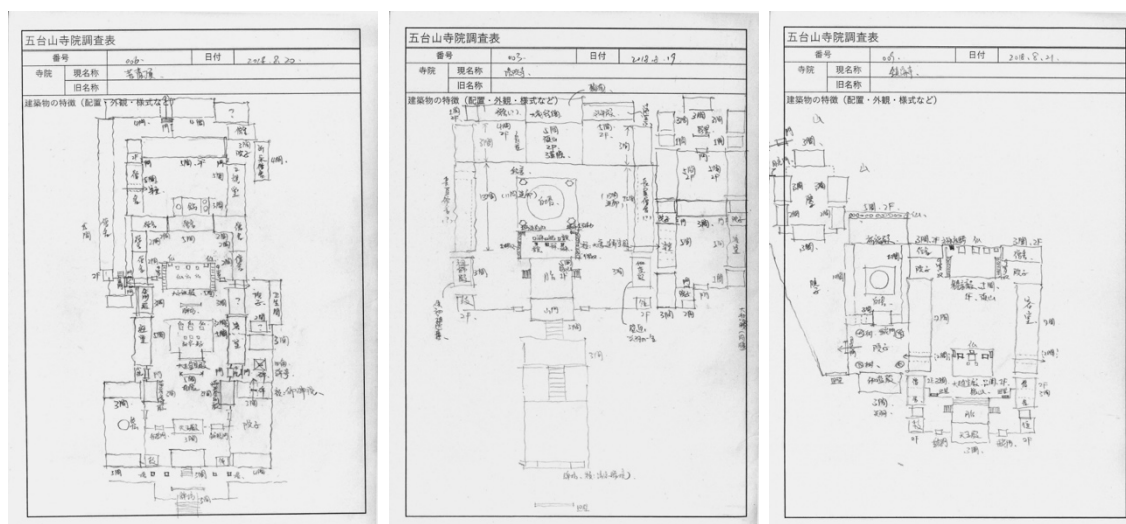
『西巡盛典』は嘉慶17年(1812)4月には董誥、曹振鏞などの大臣らによって編纂された。「宸章」「恩綸」「閱武」「褒賞」「程途」「歌頌」などの24巻で構成されている。この著作の巻15には、鎮海寺、殊像寺、菩薩頂、大螺頂、金剛窟、普樂院、羅睺寺、顯通寺、塔院寺、壽寧寺、玉花池の11寺院、台麓寺行宮、白雲寺行宮、台懷鎮行宮の3行宮、湧泉寺尖宮、漢河村尖宮の2尖宮、合わせて16カ所の施設を立体的に描写した版画が収録されている。同書には16カ所の施設の所在、沿革や、皇帝から各寺院の僧侶への恩賞などの記述があるので、重要な文献史料として知られている。この文献史料を用いた五台山の仏教史、政治史、文化史などを検討する学術論文・著書は多いが、版画を活用した寺院建築の研究成果はほと

んどない。

一方、乾隆年間には「畫鎮海寺雪景」(張若靄、乾隆11年・1746)と「畫鎮海寺雪景」(張若澄、乾隆15年・1750)の2枚の絵画が残されている。「畫鎮海寺雪景」(張若靄)は、乾隆11年の巡幸の際に雪が降ったため、高宗が同行した張若靄(伯爵)に命じ、経由した鎮海寺の雪景を描かせたものである(図4-3-1)注15)。また「畫鎮海寺雪景」(張若澄)は乾隆15年2月の巡幸の際に、同じく高宗が同行した張若澄(張若靄の弟)に命じ、鎮海寺の雪景を描かせたものである。両図は台北にある国立故宮博物館に所蔵されている。同じく、芸術史、文化史などでは、この史料を用いて五台山を検討する学術論文があるが、寺院建築研究には未だ活かされていない。

(4) 現代の実測と野帳

五台山を世界遺産に登録するために、2005年と2010年の間に清華大学建築学院は五台山にある塔院寺、顯通寺、羅睺寺、菩薩頂、龍泉寺の5寺院を実測調査し、その図面が『中国古建築測繪十年 2000-2010』に収録されている。一方、筆者は五台山での実地調査を行い、光明寺、殊像寺、塔院寺、羅睺寺、顯通寺、菩薩頂、壽寧寺、三泉寺、鎮海寺、大螺頂の10寺院の伽藍配置、建築の構造・様式や、および室内にある仏像の数量と配置などを記録した(図1-3-1)。この記録(野帳)も第一次資料として使用する。



I 菩薩頂野帳

II 塔院寺野帳

III 鎮海寺野帳

図1-3-1 野帳(2018年8月、筆者作成)

第四節 先行研究と用語

(1) 中国の寺院建築

仏教が中国に伝来したのは西暦1世紀とされ、漢民族の王朝の後漢時代(25~220)にあたる。後漢から明清時代まで中国歴代の寺院建築の特徴をまとめると、以下の6点となる^{注18)}。

①最初寺院の白馬寺。中国最初の仏教寺院は後漢永平10年(67)の洛陽白馬寺であるが、白馬寺は外国使節を接待した「鴻臚寺」という官署から改築されたという。白馬寺の伽藍配置は官署のような合院式であったと考えられるが、寺内の仏塔の存在は不明である。②南北朝時代(439~589)の寺院。合院式の伽藍配置である。寺院の中央または中心軸には仏塔が建立され、仏塔は中心的な景観として強調された。代表的な例は北魏(386~534)都の洛陽に建立された永寧寺である。永寧寺は皇室によって建立された大規模な寺院であった。寺門、仏塔、仏殿などの主な建物は南北の中心軸上に配置され、高さ100m以上の九重の大塔は伽藍の中央に建設され、寺院の南東隅には角楼があった(図1-4-1)。仏塔が伽藍の中央に配置されたのは古代インドの寺院をモデルに、漢代以降中国建築の伝統を継承して発展したものであるという。ちなみに、自分の邸宅を捨て、寺院に改築する「捨宅為寺」の風潮は当時の貴

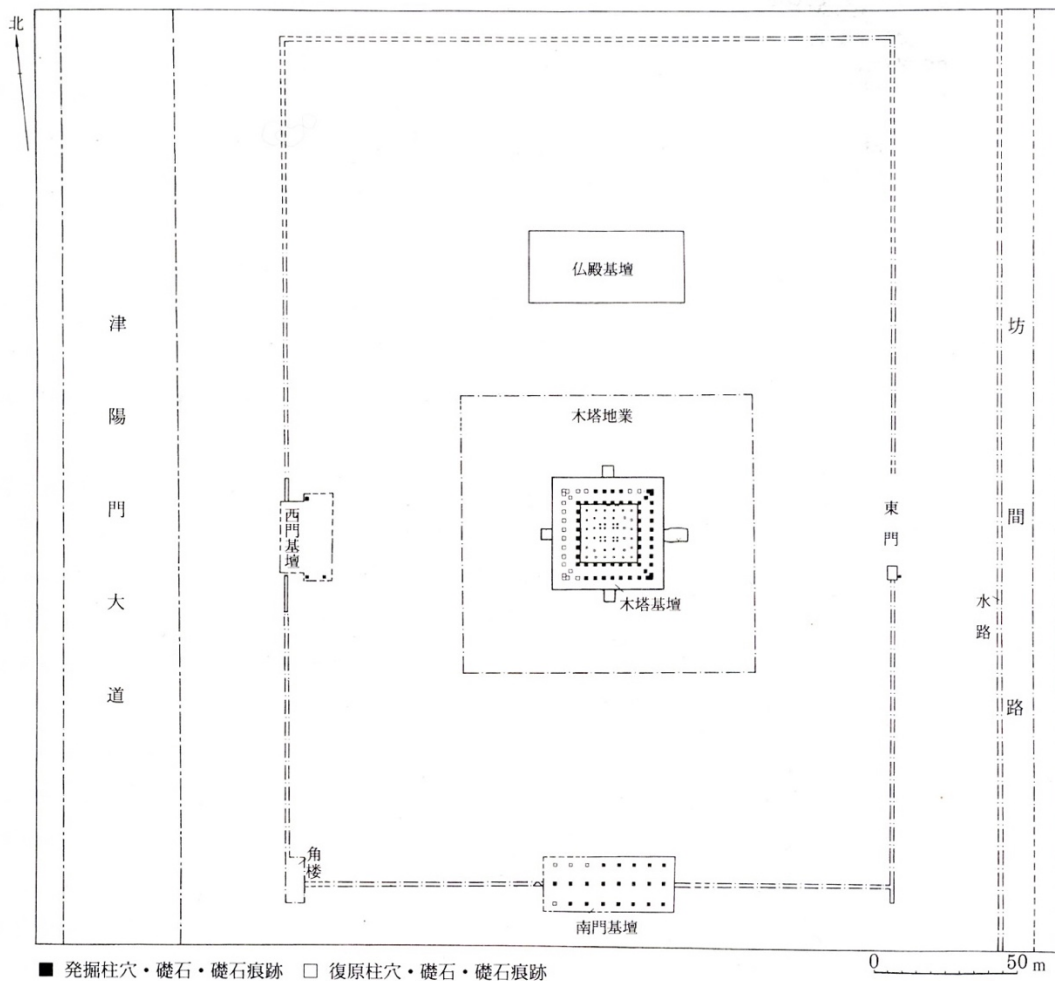


図1-4-1 永寧寺遺跡の平面図

族・官僚の中で流行したので、上流層の民家の配置、様式、意匠などが寺院に入り込んだともいう。③隋唐時代(581~907)の寺院。門、回廊、殿堂などの建物を有し、複数の院子が寺院全体を構成する合院式の伽藍配置である。隋唐時代に規模が大きな寺院では数十の院子を有し、千人以上の僧侶が暮らしていた。仏塔の代わりに、寺院の中央には2~3階の楼閣が往々にして建設された。楼閣は中心的な景観として原来仏塔の立つべき場を奪い取ったように見える。このような伽藍配置を持つ寺院は敦煌莫高窟の壁画にも多く見られる。一方、この時期の寺院には鐘楼が現れ、仏典を収める経楼と左右対称に建設されたことも敦煌莫高窟の壁画で確認できる。また、唐代末期には密宗(日本に伝来した後、真言宗と名付ける)が盛んであったので、寺院には『佛頂尊勝陀羅尼經』が刻まれた石幢が多く立てられた。④宋代(960~1279)の寺院。主な建物が中心軸上に配置され、複数の院子が南北向きの中心軸と東西向きの横軸に従って並ぶ配置ルールは変わらない。大きな仏像を収めるために、楼閣は中心的な景観として寺院の中央または中心軸に配置された。⑤元代(1271~1368)の寺院。中国仏教寺院の伽藍配置には大きな変化がないが、チベット仏教の伝来に伴い、チベット仏教寺院が多く建設された。元代大都(現北京)に建立された万安寺(現妙応寺)は代表的な例である。戦争でなくなった遼代(916~1125)永安寺にある舍利塔の遺跡の上にチベット仏教伝統の様式を持つ白塔が至元8年(1271)に皇帝によって建立され、至元25年(1288)にこの白塔を中心に万安寺が建立された。チベット式の白塔が先に建設され、のちに寺院が建立されたことは特徴的である。元代万安寺の伽藍配置は明らかではないが、現存する遺構によると、白塔は中国の伝統的な伽藍の中心軸上に配置されている(図1-4-2)(図1-4-3)。⑥明清時代(1368~1912)の寺院。明代に入ると、新たに寺内に鼓楼が現れ、鐘楼と一緒に山門の両脇に配置された。一方、明代の寺院に比べると、清代寺院の規模は縮小し、僧侶の数も減

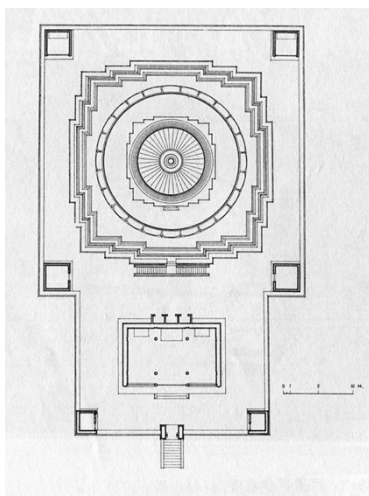


図1-4-2 妙応寺白塔が所在する院子の平面図



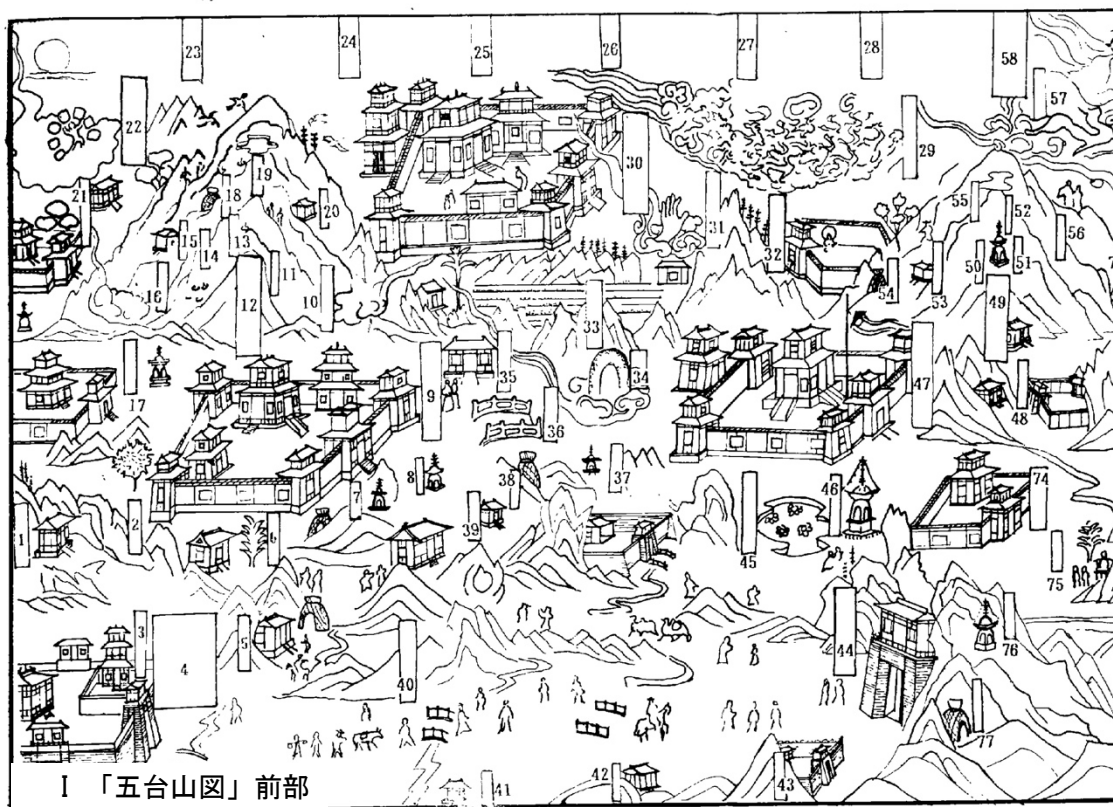
図1-4-3 北京妙応寺の山門と白塔
(2017年10月、筆者撮影)

少した。宋代の「五山十刹」、明代の「大刹・中刹・小刹」のような厳格な寺院等級制度はなくなった。また、伽藍配置や、建築の構造、様式、装飾などでは明・清二つの時代の寺院は大きな変革がなく、伽藍配置の発展は停滞したと評価される。停滞した中国仏教寺院に対して、明清時代の中国内地にはチベット仏教寺院が多く現れた。

(2) 五台山の寺院建築

唐代と清代は五台山仏教の二つの盛期であり、皇帝権力の支えによって寺院はよく発展したという^{注19)}。まず、唐代五台山については、甘肅省敦煌莫高窟第 61 窟の西壁に描かれている「五台山図」(13.45×3.42M) が明清時代以前の五台山全貌を立体的に表現した、唯一の彩色の壁画として注目される(図 1-4-4)^{注20)}。

この壁画については、宿白は以下の主な 4 点を指摘している^{注21)}。①「五台山図」粉本の年代:粉本は壁画を描いた際に参考にする手本である。壁画の作成年代と壁画に表現される内容の年代は異なり、粉本の年代が壁画の内容の年代と一致する。「五台山図」粉本の年代は、「会昌廃仏」(840~846 年) という唐代の武宗(第 18 代皇帝、李瀼)の時に行われた廃仏事件の前、日本僧の円仁が入唐した頃(838 年博多を出航、840 年五台山に到達)であったという。すなわち、「五台山図」は唐代末期の五台山を表現した壁画である。②城垣(城壁):「五台山



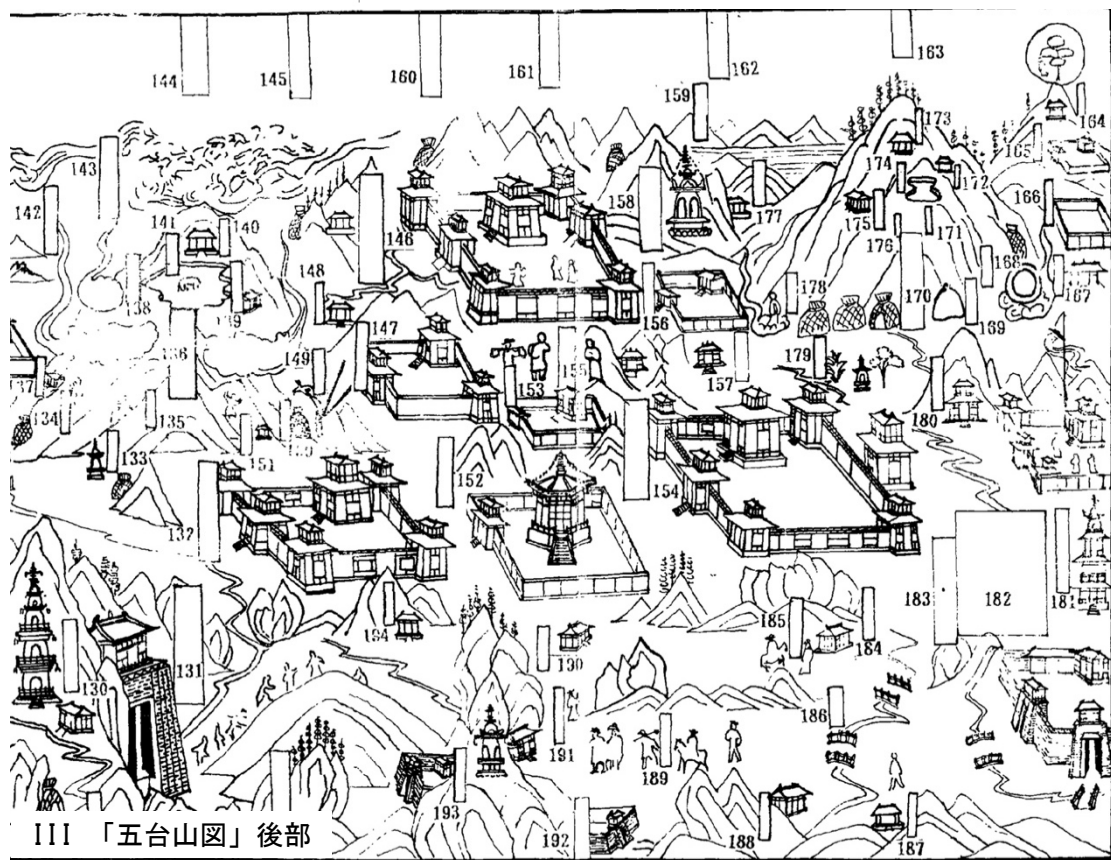
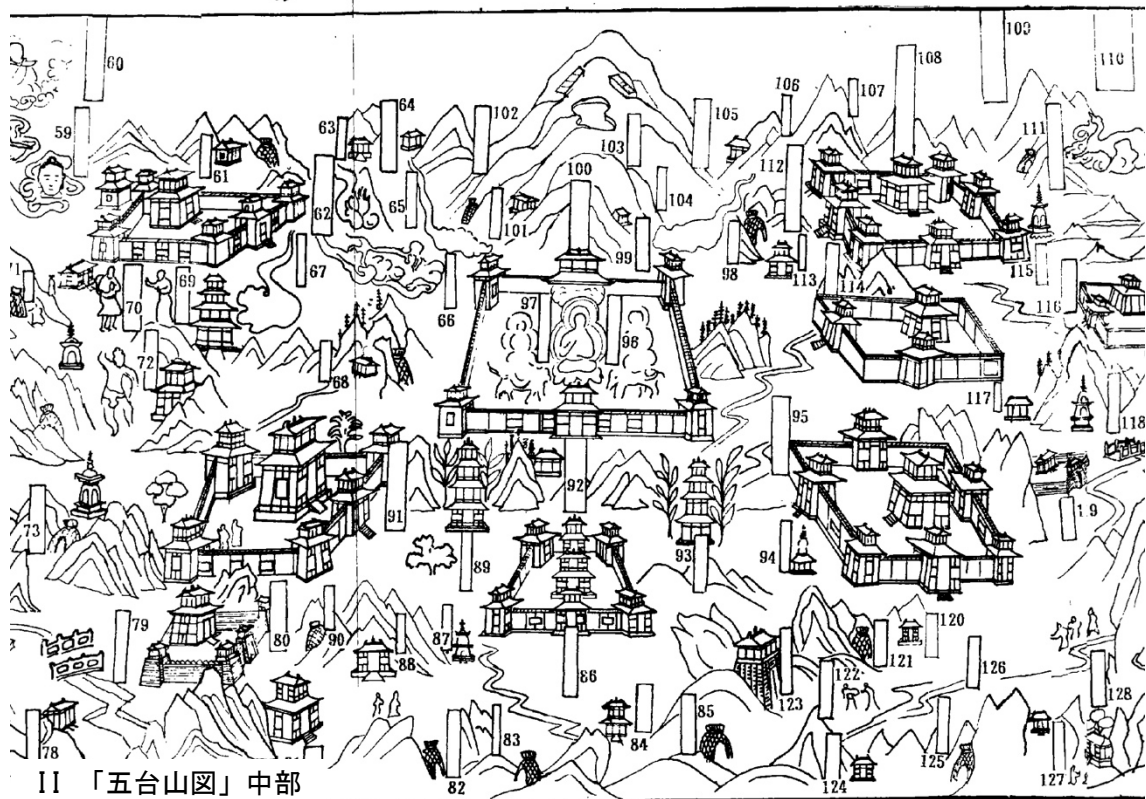


图 1-4-4 敦煌莫高窟「五台山图」(赵声良写)

図」には8の城垣が表現されている。これらの城垣は版築されたもので、上に女垣（城のまわりにめぐらした低い垣）と堞眼（壁面に開けてある防御用の穴や窓）が設けられ、城垣の基壇と角楼の基壇は磚（レンガ）が積まれているように見られる。五台縣城の場合では、その城垣は方形の平面を持ち、南門のみが設けられ、城垣の四角に角楼が置かれている。③寺院：「五台山図」には大小67寺院が表現されている。これらの寺院には共通点がある。すなわち、すべての建物は磚で造られた基壇の上に築かれ、桁行・梁行が3間の規模で、版門（板扉）、直櫺窗（連子窓）、朱欄（赤色の手すり）が用いられている。門の前に踏道（階段）あるいは姜礫（磚や石で造った鋸歯状の斜面）の代わりに、斜めの磚道が備えられた。柱の上に一斗三升（平三斗）の簡単な組物が施され、角柱に側角（中心に向かい対角状に傾ける）の工法が採用された。屋根は青瓦で葺かれ、脊（棟）と簷邊（軒先）は緑色に塗られ、脊の上に宝珠と鴟尾が置かれた。67の寺院のうち、規模が大きな寺院は山門、仏殿、角楼、後殿で構成され、いずれも二重屋根の歇山（入母屋造り）、二階に平座（建築上層の回廊を支える組物の構造層）がつかない高閣



I 大清凉寺



II 大福聖寺

図 1-4-5 「五台山図」に描かれた大寺院



I 天壽寺



II 鉄勒寺

図 1-4-6 「五台山図」に描かれた小寺院

式の建築である（図 1-4-5）。規模が小さな寺院には 1 棟の桁行 3 間の殿堂のみが表現されている（図 1-4-6）。④仏塔：「五台山図」には大小 28 塔が表現されている。数多くの塔に共通点がある。すなわち、方形の平面と磚で築かれた基壇がある。石塔・磚塔の場合、疊澀（幾重にも重なって外へ跳出）の工法を用いて軒の重量を支えた。塔の四面に半円形の拱龕（塔内に設けられたアーチ状の小室）が設けられた。木塔のほうは桁行 3 間の楼阁式で、上層には平座がほとんど設けられていなかった。

なお、城垣、寺院、仏塔のほか、「五台山図」には 33 草廬、4 店舗、9 橋の構造物も描写されているという。

一方、唐代の木造建築の遺構としては、五台山の周辺に南禅寺大仏殿と佛光寺東大殿の 2 棟の唐代の木造建築が残されている。南禅寺大仏殿については、1953 年に崔斗辰などによって発見された。1974 年から 1975 年にかけて修復工事が行われた。この工事で明清時代に交換されていた大棟、鴟尾、垂木、建具などの部分が唐代風に改築された（図 1-4-7）。先行研究として、祁英濤、柴澤俊、劉憲武は大仏殿の平面、梁架、斗栱、門窓、彩画などの特徴を分析し^{注 22)}、高天は 70 年代大仏殿の修復工事の背景と過程を明らかにした上で、文化財保護の面で修復工事を再評価した^{注 23)}。また、段智鈞は公開された実測のデータに基づいて、大仏殿の平面、梁架、斗栱などの寸法とその相互関係を再考している^{注 24)}。

佛光寺東大殿は日中戦争が勃発する直前の 1937 年 7 月 5 日に梁思成・林徽因夫婦により発見された（図 1-4-8）。のちに、梁思成は佛光寺東大殿の沿革や、構造、装飾、組物、仏像などを詳しく分析した論文を発表した^{注 25)}。1964 年羅哲文は東大殿に描かれた題記と壁画を発見し、その価値を指摘した^{注 26)}。2004 年と 2006 年の間に山西省古建築保護研究所と清華大学は東大殿を実測した。ミリメートル級精度のデータに基づいて、張栄、劉暢、臧春雨は東大殿各部分の寸法とその相互関係を再考した^{注 27)}。近年では、温静は藤井恵介が提唱する組物意匠論を活かし、佛光寺東大殿の組物を再考し、構造部材と思われる組物の背後にあ

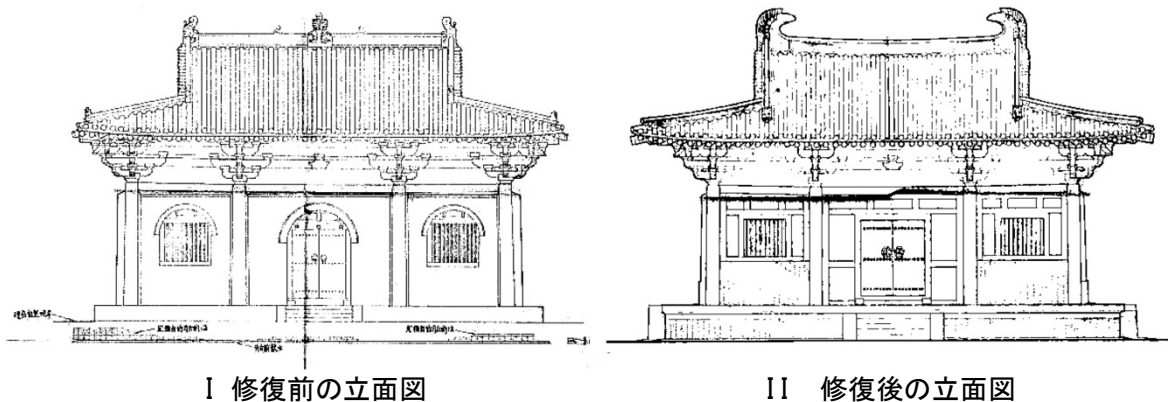


図 1-4-7 南禅寺大仏殿立面図

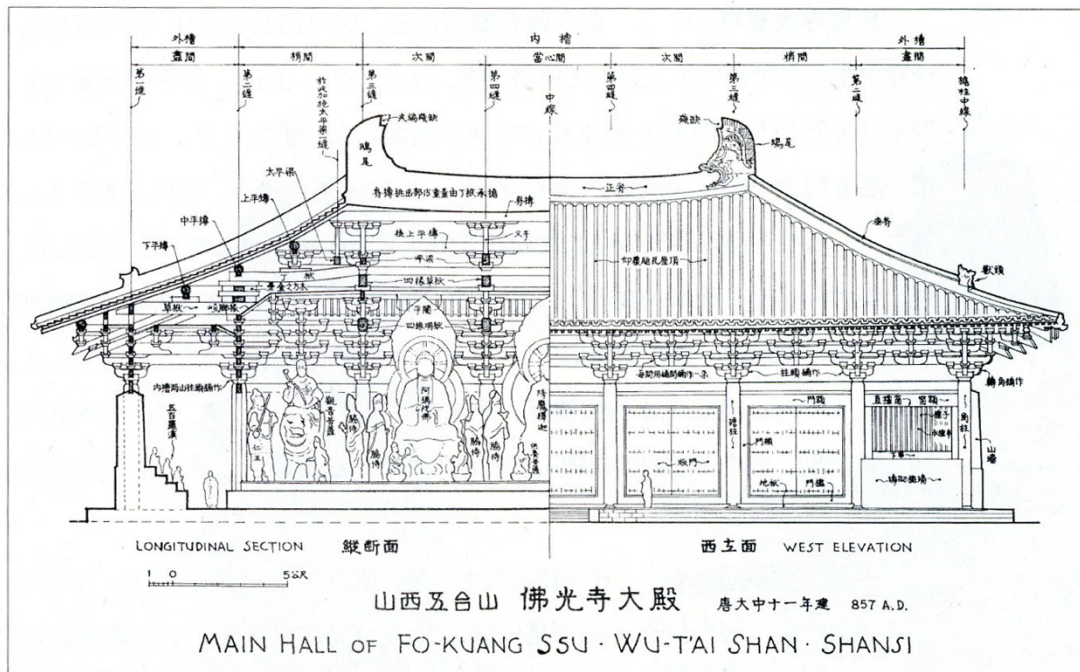


図 1-4-8 佛光寺東大殿立面・断面図（梁思成作成）

った色々な意匠を示した^{注28)}。任思捷はアメリカにおける東アジア文化に対する特徴的な研究方法を用い、唐代初期皇帝の権力と仏教の教義の関係という観点から、佛光寺東大殿の立地、内部空間、及び室内にそなえた仏像を分析し、建築知識と営造活動の背後に隠された国家の意識形態と仏教の中国化の過程を明らかにした^{注29)}。

以上のように、南禅寺大仏殿と佛光寺東大殿の構造、空間、意匠は明らかにされつつが、ただ二つの例のみで唐代五台山地区に分布していた寺院建築の一般性を示すことは難しい。なお、南禅寺と佛光寺全域の発掘調査は未だ行われておらず、文献史料も限られ、唐代の時点の2寺院の伽藍配置もいまだ明らかになっていない。一方、五台山の他の寺院では石礎、石幢、仏塔などの唐代の遺構が発見されたが、寺域全体での発掘調査は行われていない。

さて、清代は五台山仏教のもう一つの盛期である。唐代と比して、清代五台山の図像史料と文献史料は比較的多い。しかし、清代五台山の先行研究の中では、チベット仏教の文化・歴史、およびチベット仏教と皇帝の関係に関する研究が多く、寺院建築の研究は意外に少ない。

清代の皇帝はチベット仏教を尊崇したので、五台山には多くのチベット仏教寺院が建立された。これらの寺院は中国仏教伝統的な伽藍配置を持つが、一般に見られる中国仏教寺院と異なる。王貴祥は清代寺院の発展には、中国仏教寺院の伝統を具有したチベット仏教寺院の出現が革新的であったと見なすべきであること、を主張した^{注30)}。一方、清代チベット仏教建築芸術の導入・融合は中国伝統的な建築の特色と意匠を変えたほか、五台山にあるチベ

ット仏教寺院は皇帝によって従来の中国仏教寺院から改築されたことを、孫大章は強調した^{注31)}。陳暹は、清代五台山にある多くの寺院は中心地区の台懷に集中しており、以下の3点の特徴を指摘している。まず、これらの寺院は南北方向で配置された点；五台山全ての寺院は山の地形に応じて分布しており、建物は寺院の中心軸の両側に配置され、主な建物も地形に応じ位置を決めている点；規模が大きな寺院には山門、大殿などの建物が揃うが、寺院の発展や、地形などの原因によって建物が自由に分布していた点、の以上の3点である^{注32)}。

一方、五台山にある寺院の現状に関して、杜季月は黛螺頂、七佛寺、殊像寺、南山寺、顯通寺、佛光寺、龍泉寺、普化寺、碧山寺、万佛閣の10寺院を取り上げ、入口区、仏殿区、僧侶修行区、僧侶生活区、観光接待区の主な五つの部分、および車、観光客、僧侶の三つの動線で各寺院の構成を分析した^{注33)}。武哲は台懷にある寺院の景観を分析し、以下の特徴を指摘した：寺院が台懷に密集する；中国仏教とチベット仏教は共存する；各寺院に文殊殿という殿堂があり、かつ中心軸上に配置されている；山の地形に応じ建設された寺院の建築、植栽などは平野にある寺院とは異なる^{注34)}。謝岩磊は中国仏教寺院を山地寺院と平地寺院に分類した。伽藍配置によって山地寺院が「縦軸式」「台地院落式」「廊院式」「自由式」「総合式」に分けられ、特に塔院寺・顯通寺は「縦軸式」であると指摘した^{注35)}。また、朱明燁は文化財保護の視点を取り入れ、菩薩頂、真容寺の現状を分析した上で、修復案を提出した^{注36)}。

(3) 3寺院の先行研究

研究対象として取り上げる菩薩頂、塔院寺、鎮海寺の3寺院については、以下の先行研究がある。まず、菩薩頂の名は広く知られているが、その研究は意外に少ない。先行研究では、以下の5点が指摘されている^{注37)}。①伽藍配置：寺院は前、中、後の三つの部分で構成されている。前部は階段と影壁からなる。中部は山の頂点に位置し、横に並ぶ東院、中院、西院の三つの院子で構成されている。後部は生活の空間である。寺院の後部と前部の標高が中部より低いのが特徴的である。また、菩薩頂は自然景観と人文景観との融合する産物であり、中国北方にある寺院の配置の特徴を反映している。②屋根：ほかの寺院と異なり、黄色の屋根が特徴的で、皇帝権力の権威が表現されている。③建築様式：寺内の建築は官式建築（中国古代建築は官式と民間の2種類に分類され、官式または抬梁式とも呼称）の影響を受け、建物は左右対称に配置され、宮殿の様式と似ている。④装飾：寺内にある文殊殿などの建築には彫刻が多く、彩画も輝かしく施されており、柱と柱の間に装飾される罫牙（柱の間にある透し彫り）は山西一帯の特色的な手法にするものである。⑤建築の年代：寺内に現存する天王殿、伽藍

殿、祖師殿は清代のもの、大慈延壽宝殿は明代萬曆年間（1579～1582年）のもの、大蔵経閣も明代に建設されたものである。

また、塔院寺の中にある大白塔についての研究は比較的多い。これらの先行研究は以下の4点を指摘している^{注38)}。①伽藍配置：塔院寺は元来顯通寺に属する塔院であり、明代に顯通寺から独立して一つの寺院を形成した。寺院は大白塔によって高い寺格を有したが、この塔は五台山を象徴している。大白塔を伽藍の中心に配置するのが特徴である。②大白塔：高さは27丈、明代萬曆7～10年（1579～1582）の遺構である。大白塔はラマ塔と呼ぶべき様式の塔であり、元代に初めて出現したもので、明代以降ラマ塔は高僧の墓塔として広く建造される。元代の世祖（第1代皇帝、クビライ）の時代にチベット懐柔政策により、チベット仏教が導入され、それにとまってラマ塔という変わった形式の塔が建造され、異彩をはなちはじめた。その代表的遺構として、北京の妙応寺白塔はもっとも古い例で、塔院寺の塔は80メートルの高さを有し、規模も最大の例である。大白塔には元代の特徴が残っていると見られており、明代官式のラマ塔を代表する典型的な塔の一つであるともいう。大白塔の基壇の四隅に六角形の木造の亭が設けられ、このデザインは他のラマ塔にはあまり見られない。基壇の部分にある四つの亭、裳階（腰檐）、および裳階の下に設けるマニ車は後の時代に増築された可能性がある。③壁画：塔院寺の伽藍殿には10.03平方メートルの清代末期の壁画が残っている。寺院を守護する神として関羽の生涯が壁画に表現され、清代の関公（関羽）信仰が示されている。④建築の年代：寺内に現存する天王殿は明代成化年間（1465～1487年）のもの、大雄宝殿、大文殊殿、帶箭文殊殿、怖畏金剛殿は清代に建設された。そのほかに、寺院にある行宮（原文には「Xinggong Monastery」）は清代乾隆26年（1761）に建設されたものである。

なお、鎮海寺については、日本での研究が意外に多い。これらの研究により、以下の3点が指摘されている^{注39)}。①立地：清水河に面した山の中腹にあり、楊、松、柏などの樹木鬱蒼たる美しい周辺環境の中に立つ。②伽藍配置：山西省に残る多くの古建築とは異なり、鐘楼、鼓楼と山門が一行に配置され、三者の間を壁でつなぐ配置である。③靈塔：靈塔は乾隆51年（1786）に示寂したチャンキャ・ホトクト3世のために、寺内の永楽院に建立された。靈塔の彫刻は精巧で、北京の西黄寺のパンチェン・エルデニ靈塔に似ている。豪華であるが、やや繁縟な感を与えその手法はパンチェン・エルデニ靈塔と比べると、少からず劣る。

(4) 使用する学術用語の定義と前提となる知識

中国建築の特徴に関する先行研究では、用語の使い方などが必ずしも統一されていない。

本研究では、中国様式、中国系要素、漢民族式、漢風などの用語を「中国式」に統一して用いることとする。他民族の建築との違いを区分するために、清代中国式の寺院建築の特徴をまとめると、次の6点の特徴があると考えられる^{注40)}。①主な施設：入り口の山門、天王像を設ける天王殿、正殿である大雄宝殿、経典を収蔵する藏経楼の以上四つが伽藍を構成する主な殿堂である。ただし、山門と天王殿を一つの建築にする例も少なくない。寺内には中国式の塔はあまり建築されなかった。②伽藍配置：合院式の伽藍配置である。主な建物を貫く南北の中心軸があり、厳格な左右対称の配置ルールで構成される。南北中心軸は主幹で、東西方向の横軸は副次的な位置で、往々にして重視されない。中心軸に対して、横軸は完全に従属する。規模が大きな寺院の場合、中心軸の方向に院子の数量が増加し、全体として南北が長くて東西が狭い平面になる。東西の方向で規模を拡大する場合、往々にして元来の中心軸に平行するもう一本の南北の中心軸が加えられる。新しい中心軸と元来の中心軸の間には有機的なつながりはない。このように、伽藍の規模を拡大するために、南北または東西の軸に沿って複数の院子が増築されることは中国式の建築の特徴である。③屋根の形：屋根には等級制度があり、廡殿（寄棟造り）が最高級な様式であり、次は歇山（入母屋造り）、次は懸山（切妻造り）、次は硬山（螭羽がない切妻造り）である。高級な建築には廡殿が用いられ、他の屋根形が一般の建築に多用される。④構造：京畿、華北一帯の寺院には官式大木作（抬梁式）の構造が採用されている。前代の組物と比べると、組物のサイズが縮小され、梁と柱の間の組物が省略される場合もあり、特に叉手（叉首）の使用が絶えた。一方、南方の寺院では抬梁と穿斗の混合式が採用される。⑤色彩：建築の彩色は封建社会の等級制度に厳しく拘束され、高級な寺院建築の屋根には黄色と青色の琉璃瓦が用いられる。寺院建物を繋ぐ牆（壁・垣）は常に赤色に塗られる。⑥開口部：板門と槩扇（門）、および支摘窓と檻窓が広く使用されている。塼、石で造られるアーチは鼓楼、鐘楼、山門、天王殿などの建物に多用される。

一方、中国式に対して、先行研究においてチベット様式、チベット系要素、西藏作風などと呼ばれていたものを、以下では「チベット式」とする。清代チベット式の寺院建築（清代圧倒的な勢力を持つゲルク派の寺院を中心に）は次の6点の特徴を持つと考えられる^{注41)}。①主な施設：中心的な宗教施設のツォクチェン（措欽）、日常的仏事と教学を行う場所のタツァン（扎倉）、僧坊としてのカンツェン（康村）の主として3種類の建造物が伽藍を構成する。ただし、仏塔が寺院を構成する重要な施設の一つとして建設された。活仏の肉体をおさめる霊塔・仏像・経典・宝物などをおさめる仏塔の2種類があり、室外と室内のどちらにも設けられる。②伽藍配置：自由な伽藍配置となる。建物はツォクチェンを中心に、密集してその周囲に配

置され、その建築群は山麓の斜面にひな壇のように立地している。ツォクチェンなどの重要な施設は山を背にして山麓の方向に正面を向けている。伽藍全体には中心軸がなく、塔の明確な配置ルールもない。③屋根形：陸屋根は外観の特徴的なものであるが、寺院によっては陸屋根の上に歇山の屋根が建設される例も少なくない。④構造：建築の外壁は石材の組積造であり、内部は木造の軸組とする。柱は均等なスパンで立てられ、礎石が据えられる。方形、八角形、多角形の断面の柱が広く使用されている。柱頭に大斗をおき、上に肘木が載せられる。この大斗と肘木の組み合わせは組物の基本的な形で、広く用いられている。⑤色彩：赤色、白色が寺院建築の基本的な色彩で、重要な施設は赤色に塗られている。窓の周りは黒い縁取りで飾られ、板扉の表面は赤色や黒色で装飾されている。⑥開口部：建築の開口部はほとんど長方形で、アーチは用いられない。

寺院の機能と仏教の儀式に関わる用語については、以下の3点の特徴を指摘すべきである^{注42)}。①機能による寺院の分類：モンゴル地区にあるチベット仏教寺院は、仏教経典を研鑽する寺院と信者礼拝のための寺院の2種類がある。経典の研鑽を主としている寺院は「学問寺」という。同じく、チベット地区にあるチベット仏教寺院は、仏教の学習と修行に目的をおく「僧院」、および礼拝行為を行う「一般寺院」に分類される。②僧侶儀式の空間：寺院におかれる中心的な宗教施設のツォクチェンは僧侶が礼儀・法要が行われる場所で、原則として一般の俗人に開放されない。③信者礼拝の空間：信者はツォクチェンの前庭に「五体投地」（両膝・両肘を地に着けて伏し、さらに合掌して頭を地につける）の礼拝を行う。仏塔、ツォクチェン、寺院、さらに寺院を中心に形成する宗教都市を「右繞」（時計回りに歩く）して礼拝する。右繞の儀式は古代インドに遡り、チベット仏教と中国仏教の両方にも定着した。一方で、学問寺または僧院と一般寺院の二元の分類や、僧侶儀式の空間と信者礼拝の空間をはっきりすることは、伝統的な中国仏教寺院には見えない。

清代皇帝のための空間はいかなる特徴があったのか、については代表的な宮殿の紫禁城を取り上げる。紫禁城の建築は次の6点の特徴を有すると考えられる^{注43)}。①主な施設：紫禁城は外朝と内廷の二つの部分で構成され、外朝は国家的行事や儀式が行われる公的な場、内廷は皇帝一家が生活する私的な場である。外朝と内廷の構成は「前朝後寝」の伝統的な礼制を反映している。外朝の主な建築は太和殿・中和殿・保和殿で、内廷の主な建築は乾清宮、交泰殿および坤寧宮である（図1-4-9）（図1-4-10）。②配置：合院式の配置。南北を貫く主な中心軸があり、これと平行する複数の中心軸を有する。主要な建築は中心軸上に配列され、南を向かっている。附属建築は左右対称に配置されている。③屋根形：建築の等級に応じ、廡殿、歇山、懸山、硬山などの屋根が多用される。太和殿の重檐廡殿（二重屋根の寄棟造り）

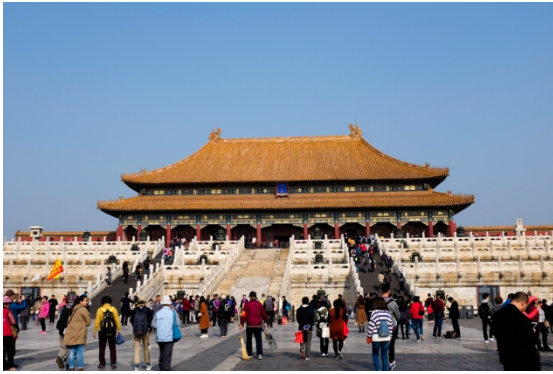


図 1-4-9 紫禁城太和殿
(2017 年 10 月、筆者撮影)

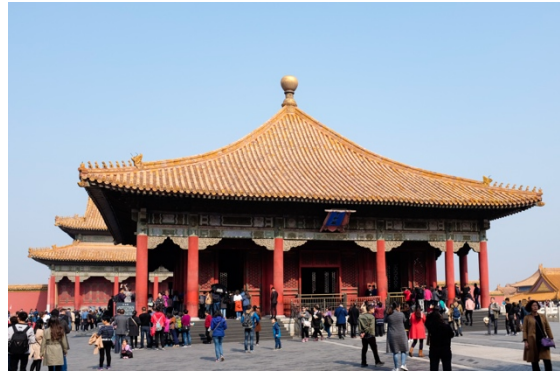


図 1-4-10 紫禁城中和殿
(2017 年 10 月、筆者撮影)

の屋根が最も高い格式が示しているとされる。そのほかに、基壇の高さ、彩画、建築の規模、組物なども清代の社会の身分に対応する建築ルールに拘束されている。④構造：高度規格化の清代官式建築の構造である。⑤彩色：黄色の琉璃瓦、赤色の壁（紅牆）、青色の彩画（碧繪）が標準的に用いられている。数は少ないが、緑色、青色の琉璃瓦葺きの建築も存在する。主な建築は白色の基壇の上に設けられ、欄干も白色である。⑥開口部：板門、楹扇門、支摘窓、および檻窓が広く使用されている。アーチは天安門、午門などの建物に限り用いられている。乾隆年間以降、ガラス（玻璃）が紫禁城に導入された。

第五節 小結

清代の五台山には、中国仏教、チベット仏教、および皇帝権力に対応する景観が共存しており、さらに各寺院内部にも中国仏教、チベット仏教、および皇帝権力に対応する空間が存在した。

チベット仏教に比して、中国仏教は先に五台山に定着し、中国仏教寺院も先に建立された。従来の空間としての中国仏教寺院は、のちに導入されたチベット仏教・皇帝権力の空間を受容した。中国仏教寺院には明確な中心軸がり、建物が左右対称に設けられ、複数の院子の組み合わせによる合院式の伽藍配置を有する。この特徴は仏教伝来から現在までのおおよそ 2000 年にわたって変わらずに継承されている。

チベット仏教は 13～14 世紀に中国内地に導入されはじめ、元・明・清の三つの時代に中国内地にある寺院建築の発展に影響を大きく与えた。また、皇帝権力の影響は清代康熙・乾隆・嘉慶年間に行われた西巡によって五台山にもたらされた。2000 年にわたって変わらぬ中国仏教寺院の空間に対して、チベット仏教寺院と皇帝の宮殿は時代の変化と皇帝の更迭によって変化していた。

先行研究では、五台山にある寺院の分布、立地、景観、構成、配置や、建築の構造、装飾、

意匠などに関する研究は多い。また、五台山に中国仏教・チベット仏教の空間が併存した
こと自体は研究者の注目を集めたが、二つの空間にはいかなる相互関係があったのか、チベッ
ト仏教の空間はいかなる経緯で現れたのか、については明らかではない。また、清代の皇帝
は五台山の仏教と寺院の発展を促進したが、寺院内にある皇帝権力の空間自体の研究は十
分ではない。本研究では、これらに注目して研究を進めていくこととする。

注

- 注 1) 『広辞苑 (第四版)』、岩波書店、1996 年、頁 1, 210。
- 注 2) 『日本大百科全書 11』、小学館、1988 年、頁 458。
- 注 3) 文化庁編、『宗教年鑑 (平成 30 年版)』、2018 年、頁 34-35。
- 注 4) 矢野恒太記念会、『日本のすがた 2019-表をグラフでみる社会科資料集』、2019 年、頁 18 により、2017 年の日本総人口は 12, 671 万人。
- 注 5) 『日本大百科全書 13』、小学館、1988 年、頁 389-390。
- 注 6) 太田博太郎、藤井恵介ほか、『日本建築様式史』、美術出版社、2010 年、頁 20。また、太田博太郎、『南都七大寺の歴史と年表』、岩波書房、1979 年を参考。
- 注 7) 景山春樹、『比叡山と高野山』、教育社、1991 年、頁 56-67。渡辺守順、『比叡山延暦寺 世界文化遺産』、吉川弘文館、1998 年、頁 1-2、174-220。
- 注 8) 藤川昌樹、「高野山の山内空間と建築」、『高野山と密教文化』、小学館スクウェア、2006 年、頁 106-117。景山春樹、『比叡山と高野山』、教育社、1991 年、頁 228-239。松長有慶、『高野山』、岩波新書、2014 年、頁 27-41。
- 注 9) 鈴木亘、『中世鎌倉五山の建築』、中央公論美術出版、2016 年、頁 1-6。川上貢、『禅院の建築一禅僧のすまいと祭享』、中央公論美術出版、2005 年、頁 49-52。太田博太郎、藤井恵介ほか、『日本建築様式史』、美術出版社、2010 年、頁 64-67。
- 注 10) 崔正森、『五台山仏教史』、山西人民出版社、2000 年、序 1-3、頁 801。また、陳遲、「明清四大仏教名山的形成及寺院歴史変遷」、清華大学博士学位論文、2017 年を参考。
- 注 11) 李桂紅、「四大名山仏教文化及其現代意義」、四川大学博士学位論文、2003 年。崔正森、『五台山仏教史』、山西人民出版社、2000 年、頁 801-838。
- 注 12) 孫大章、『中国古代建築史 第五卷 清代建築 (第二版)』、中国建築工業出版社、2016 年、頁 281-283。祁美琴、安子昂、「試論藏傳佛教的王朝化与国家認同一以清朝敕建藏傳佛教為中心的考察」、『清史研究』、2019 年 01 期、頁 1-16。
- 注 13) 王淑雲、『清代北巡御道和塞外行宮』、中国環境科学出版社、1989 年。李文君、『康乾南巡區額楹聯通解』、故宮出版社、2017 年。向斯、『乾隆南巡的故事』、故宮出版社、2016 年。趙雲田、『大清帝國的得与失 乾隆出巡記』、江西人民出版社、2017 年。杜家驥、李然、『嘉慶事典』、紫禁城出版社、2010 年を参考。
- 注 14) 王敬雅、「康熙西巡五台山若干問題探析」、『故宮博物院院刊』、2014 年 01 期、頁 99-110、159。
- 注 15) 趙雲田、『大清帝國的得与失 乾隆出巡記』、江西人民出版社、2017 年、頁 63-72。

- 注 16) 林士鉉、「中華衛藏：清仁宗西巡五臺山研究」、『故宮學術季刊』、第二十八卷第二期、民國九十九年冬季（2010）、頁 147-212。
- 注 17) 余思奇、趙詩迪、「五台山行宮座落地盤圖」研究—繪制內容、年代および繪制背景考」、『華中建築』、2019 年 09 期、頁 110-113。
- 注 18) 梁思成、『中国建築史』、三聯書店、2018 年。劉敦楨、『中国古代建築史（第二版）』、中国建築工業出版社、1984 年。潘谷西、『中国建築史（第六版）』、中国建築工業出版社、2003 年。楊銜之、『洛陽伽藍記』、全 5 卷、臺灣中華書局、民國 58 年（1969）、卷 1。『北魏洛陽永寧寺 中国社会科学院考古研究所發掘報告』、奈良文化財研究所、1998 年。蕭默、『敦煌建築研究』、機械工業出版社、2003 年。北京市古代建築研究所（編）、『寺觀』、北京出版集團公司、2014 年、頁 144-149。楊小琳、「元大都大聖壽万安寺与白塔建築布局形制初探」、中央民族大学修士學位論文、2012 年。王貴祥、『中国漢伝仏教建築史』、清華大学出版社、2016 年を参考。
- 注 19) 日比野丈夫、小野勝年、『五台山』、平凡社、2009 年を参考。
- 注 20) 甘肅省敦煌研究院によると、莫高窟第 61 窟は西暦 10 世紀半ばに曹元忠夫婦によって建設された。洞窟の西壁に描かれている「五台山図」は彩色、幅は 13 メートル、高さは 3.6 メートルである。
原図は <https://www.e-dunhuang.com/cave/10.0001/0001.0001.0061> に掲載されている。
- 注 21) 宿白、「敦煌莫高窟中的「五台山図」」、『文物』、1951 年 05 期、頁 49-71。
- 注 22) 柴澤俊、劉憲武、「南禪寺」、『文物』、1980 年 11 期、頁 76-77。祁英濤、柴澤俊、「南禪寺大殿復」、『文物』、1980 年 11 期、頁 61-76。
- 注 23) 高天、「南禪寺大殿修繕与新中国初期文物建築保護理念的發展」、『古建園林技術』、2011 年 02 期、頁 15-19。
- 注 24) 段智鈞、「南禪寺大殿大木結構用尺与用材新探」、『中国建築史論匯刊』、2008 年 00 期、頁 83-99。
- 注 25) 梁思成、「記五台山佛光寺的建築—蒼萃在一寺的魏、齊、唐、宋的四个孤例；蒼萃在一殿的唐代四种芸術」、『文物參考資料』、1953 年 Z1 期、76-121。
- 注 26) 羅哲文、「山西五台山佛光寺大殿發現唐、五代的題記和唐代壁画」、『文物』、1965 年 04 期、頁 31-35。
- 注 27) 張榮、「佛光寺東大殿文物建築勘察研究」、『古建園林技術』、2010 年 03 期、29-39。張榮、劉暢、臧春雨、「佛光寺東大殿実測数据解読」、『故宮博物院院刊』、2007 年 02 期、頁 28-51。

- 注 28) 温静、「「殿堂」—解讀佛光寺東大殿的斗栱設計」、『建筑學報』、2017 年 06 期、頁 43-48。
- 注 29) 任思捷、「唐初五台山佛光寺的政治空間与宗教構建」、『建筑學報』、2017 年 06 期、頁 22-28。
- 注 30) 王貴祥、『中国漢伝仏教建築史』、清華大学出版社、2016 年、頁 2, 118-2, 146 を参考。
- 注 31) 孫大章、『中国古代建築史 第五卷 清代建築 (第二版)』、中国建築工業出版社、2016 年、頁 305。
- 注 32) 陳遲、「明清四大仏教名山的形成及寺院歷史變遷」、清華大学博士学位論文、2017 年。
- 注 33) 杜季月、「20 個中国漢伝仏寺的平面布局研究」、西安建築科技大学修士學位論文、2013 年。
- 注 34) 武哲、「五台山寺廟園林建築与自然景觀融合研究」西安建築科技大学修士學位論文、2017 年。
- 注 35) 謝岩磊、「山地漢伝仏教寺院規劃布局与空間組織研究」、重慶大学修士學位論文、2012 年。
- 注 36) 朱明燁、「近期五台山寺廟建築保護途徑案例分析」、太原理工大学修士學位論文、2013 年。
- 注 37) 陳遲、「明清四大佛教名山的形成及寺院歷史變遷」、清華大学博士学位論文、2014 年、頁 69-74。張静、「五台山菩薩頂環境芸術与保護研究」、太原理工大学修士學位論文、2014 年、頁 42-45。孫大章、『中国古代建築史 第五卷 清代建築 (第二版)』、中国建築工業出版社、2016 年、頁 305-306。State Administration of Cultural Heritage (国家文物局)、『The Nomination Report for Inscription on the World Heritage List』、2009 年、頁 38-39 を参考。
- 注 38) 陳遲、「明清四大佛教名山的形成及寺院歷史變遷」、清華大学博士学位論文、2014 年、頁 64-68。黃寶瑜、『中國建築史』、正中書局、民国 62 年 (1973)、頁 198。竹島卓一、『中国の建築』、中央公論美術出版、1970 年、頁 147-148。孫大章、『中国仏教建築』、中国建築工業出版社、2017 年、頁 75、274。王貴祥、『中国漢伝仏教建築史』、清華大学出版社、2016 年、頁 1, 760。侯雪、「五台山塔院寺伽藍殿閼帝壁画芸術探析」、『忻州師範学院學報』、2018 年、第 34 卷、第 6 期、41-45。State Administration of Cultural Heritage (国家文物局)、『The Nomination Report for Inscription on the World Heritage List』、2009 年、頁 38-39 を参考。
- 注 39) 日比野丈夫、小野勝年、『五台山』、平凡社、2009 年、頁 243-246。張家驥、『簡明中

国建築論』、江蘇人民出版社、2012年、頁116-117。日比野丈夫、小野勝年、『五台山』、平凡社、2009年、頁243-246。関野貞、常盤大定、『支那佛教史蹟評解（五）』、佛教史蹟研究会、1928、頁21-22。関野貞、常盤大定、『支那文化史蹟 解説第一巻』、法蔵館、1939年、頁83を参考。

注40) 梁思成、『中国建築史』、三聯書店、2018年。劉敦楨、『中国古代建築史（第二版）』、中国建築工業出版社、1984年。黄寶瑜、『中国建築史』、國立編譯館、民国62年（1973）。潘谷西、『中国建築史（第六版）』、中国建築工業出版社、2003年。孫大章、『中国古代建築史 第五卷 清代建築（第二版）』、中国建築工業出版社、2016年。王貴祥、『中国漢伝仏教建築史』、清華大学出版社、2016年。孫大章、『中国仏教建築』、中国建築工業出版社、2017年。竹島卓一、『中国の建築』、中央公論美術出版社、1970年を参考。

注41) 梁思成、『中国建築史』、三聯書店、2018年。劉敦楨、『中国古代建筑史（第二版）』、中国建筑工業出版社、1984年。潘谷西、『中国建筑史（第六版）』、中国建筑工業出版社、2003年。孫大章、『中国古代建築史 第五卷 清代建築（第二版）』、中国建築工業出版社、2016年。王貴祥、『中国漢伝仏教建築史』、清華大学出版社、2016年。孫大章、『中国仏教建築』、中国建築工業出版社、2017年。近藤豊、『古建築の細部意匠』、大河出版社、2013年。宿白、『藏伝仏教寺院考古』、文物出版社、1996年。陳耀東、『中国藏族建築』、中国建筑工業出版社、2007年。大岩昭之、『チベット寺院・建築巡礼』、東京堂出版社、2005年。友田正彦、『チベット/天界の建築』、INAX出版社、1995年を参考。

注42) 包慕萍、『モンゴルにおける都市建築史研究』、東方書店、2005年。友田正彦、『チベット/天界の建築』、INAX出版社、1995年。陳耀東、『中国藏族建築』、中国建筑工業出版社、2007年。龍珠多傑、『藏伝仏教寺院建築文化研究』、社会科学文献出版社、2016年を参考。

注43) 梁思成、『中国建築史』、三聯書店、2018年。劉敦楨、『中国古代建筑史（第二版）』、中国建筑工業出版社、1984年。潘谷西、『中国建筑史（第六版）』、中国建筑工業出版社、2003年。孫大章、『中国古代建築史 第五卷 清代建築（第二版）』、中国建築工業出版社、2016年。田中淡、『中国建築の特質』、中央公論美術出版社、2018年。竹島卓一、『中国の建築』、中央公論美術出版社、1970年を参考。

図表出典

第一節

図1-1-1 比叡山現状図。出典：児玉幸多、『日本史年表・地図』、吉川弘文館、2018年、頁

11。

図 1-1-2 高野山現状図。出典：児玉幸多、『日本史年表・地図』、吉川弘文館、2018 年、頁 11。

図 1-1-3 中国仏教四大名山。出典：筆者作成。

図 1-1-4 中国内地におけるチベット仏教の三大中心地。出典：筆者作成。

第二節

図 1-2-1 高野山根本大塔。出典：筆者撮影。

図 1-2-2 五台山大白塔と菩薩頂。出典：趙声良、『敦煌壁畫五台山圖』、江蘇鳳凰美術出版社、2018 年、頁 27。

図 1-2-3 清代末期の台懷。出典：Ernst Boerschmann、『Old China in Historic Photographs』、Dover Publications、1982、頁 76。

図 1-2-4 清代末期の大白塔。出典：Ernst Boerschmann、『Old China in Historic Photographs』、Dover Publications、1982、頁 85。

表 1-2-1 清代の西巡。出典：鄒愛蓮（主編）、『清代起居注・康熙朝』、中国第一歴史档案館蔵、北京所蔵、中華書局、2009 年、第 14 冊、頁 B006566-B006572。第 15 冊、頁 B007275-B007302。庫勒納など、『清代起居注・康熙朝』、国立故宫博物院珍蔵、臺北所蔵、聯經出版事業公司、2009 年、第 11 冊、頁 T06235-T06244。第 17 冊、頁 T09205-T09222。『大清聖祖仁（康熙）皇帝實録（五）』、聯經出版社、1964 年、頁 3, 222-3, 223。中国第一歴史档案館編、『乾隆帝起居注』、広西師範大学出版社、2002 年、第 5 冊、頁 278-282。第 9 冊、頁 34-38。第 20 冊、頁 54-71。第 31 冊、頁 100-105。第 39 冊、頁 86-95。『大清高宗純（乾隆）皇帝實録（二五）』、聯經出版社、1964 年、頁 18, 296-18, 305。中国第一歴史档案館編、『嘉慶帝起居注』、広西師範大学出版社、2006 年、第 16 冊、頁 132-146。董誥など、『西巡盛典』、清代嘉慶 17 年（1812）、卷 14-15。中国第一歴史档案館、「三世章嘉呼圖克圖圓寂前後史料選譯（上）（下）」、『歴史档案』、1995 年 04 期、頁 32-38。1996 年 01 期、頁 38-43 により、また林士鉉、「中華衛藏：清仁宗西巡五臺山研究」、『故宮學術季刊』、第二十八卷第二期、民國九十九年冬季（2010 年）、頁 147-212 を参考に、筆者作成。

第三節

図 1-3-1 野帳。出典：筆者作成

第四節

図 1-4-1 永寧寺遺跡の平面図。出典：『北魏洛陽永寧寺 中国社会科学院考古研究所発掘報告』、奈良文化財研究所、1998 年、頁 7。

図 1-4-2 妙応寺白塔が所在する院子の平面図。出典：劉敦楨、『中国古代建築史（第二版）』、中国建築工業出版社、1984 年、頁 280。

図 1-4-3 北京妙応寺の山門と白塔。出典：筆者撮影。

図 1-4-4 敦煌莫高窟「五台山図」。出典：趙声良、『敦煌壁畫五台山圖』、江蘇鳳凰美術出版社、2018 年、頁 66-67。

図 1-4-5 「五台山図」に描かれた大寺院。

出典：原図は <https://www.e-dunhuang.com/cave/10.0001/0001.0001.0061> に掲載されている。

図 1-4-6 「五台山図」に描かれた小寺院。

出典：原図は <https://www.e-dunhuang.com/cave/10.0001/0001.0001.0061> に掲載されている。

図 1-4-7 南禪寺大仏殿。出典：高天、「南禪寺大殿修繕与新中国初期文物建築保護理念的發展」、『古建園林技術』、2011 年 02 期、頁 15-19。

図 1-4-8 佛光寺東大殿。出典：梁思成、『中国建築史』、三聯書店、2018 年、頁 87。

図 1-4-9 紫禁城太和殿。出典：筆者撮影。

図 1-4-10 紫禁城中和殿。出典：筆者撮影。

第二章 清代の五台山とその寺院建築

第一節 五台山の構成

(1) 空間構成

清代の山西省は直隸省（現河北省）に東面し、黄河を境に西の陝西省（現陝西省）と接した。北は外地であるモンゴル地区（蒙古）であり、南の黄河を渡ると河南省（現河南省）に達する（図 2-1-1）。山西省内の東北に代州という行政区画があり、五台縣、繁峙縣、崞縣の三つの縣によって構成されていた。そのうち五台縣の東北に五台山が所在した（図 2-1-2）。

五台山は五台、台外、台懷の三つの部分で構成され、三つの部分の間に明確な境界はない（図 2-1-3）（図 2-1-4）。五台は五つの峰を指す。すなわち東台の望海峰、西台の掛月峰、南台の錦繡峰、北台の叶斗峰、中台の翠岩峰である。

そのうち、叶斗峰は五台山の最高峰であるばかりでなく、中国華北地区の最高峰である。なお、五つの峰の外周が台外と呼称されている。

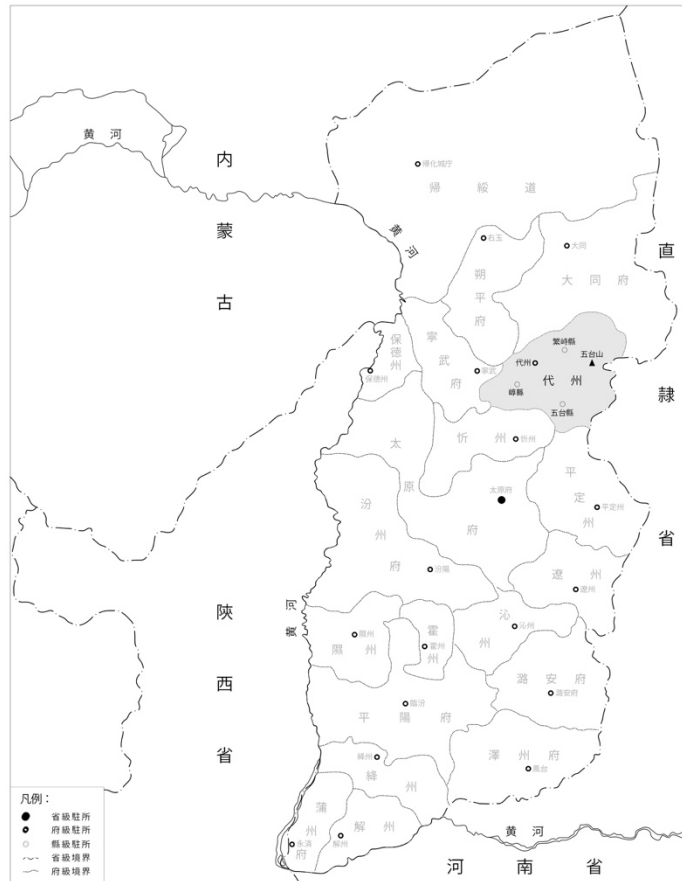


図 2-1-1 清代山西省政区図

(2) 台懷とその構成

五つの峰で囲まれている盆地が台懷で、五台山の中心部である。台懷には清水河という川があり、北西の華嚴谷から南西の交口に流れていく。台懷を囲む夥しい数山の中で、特に三つの小さな山が靈鷲峰、黛螺頂、梵仙山と名付けられている。そのうち、靈鷲峰は台懷の中央に所在し、複数の有名な大寺院が靈鷲峰の頂上から山麓までの地区に密集し、五台山の特徴的な景観であると見なされる。

清代末期には 32 カ所の寺院は台懷に分布した。そのうち 16 寺院はチベット仏教寺院、

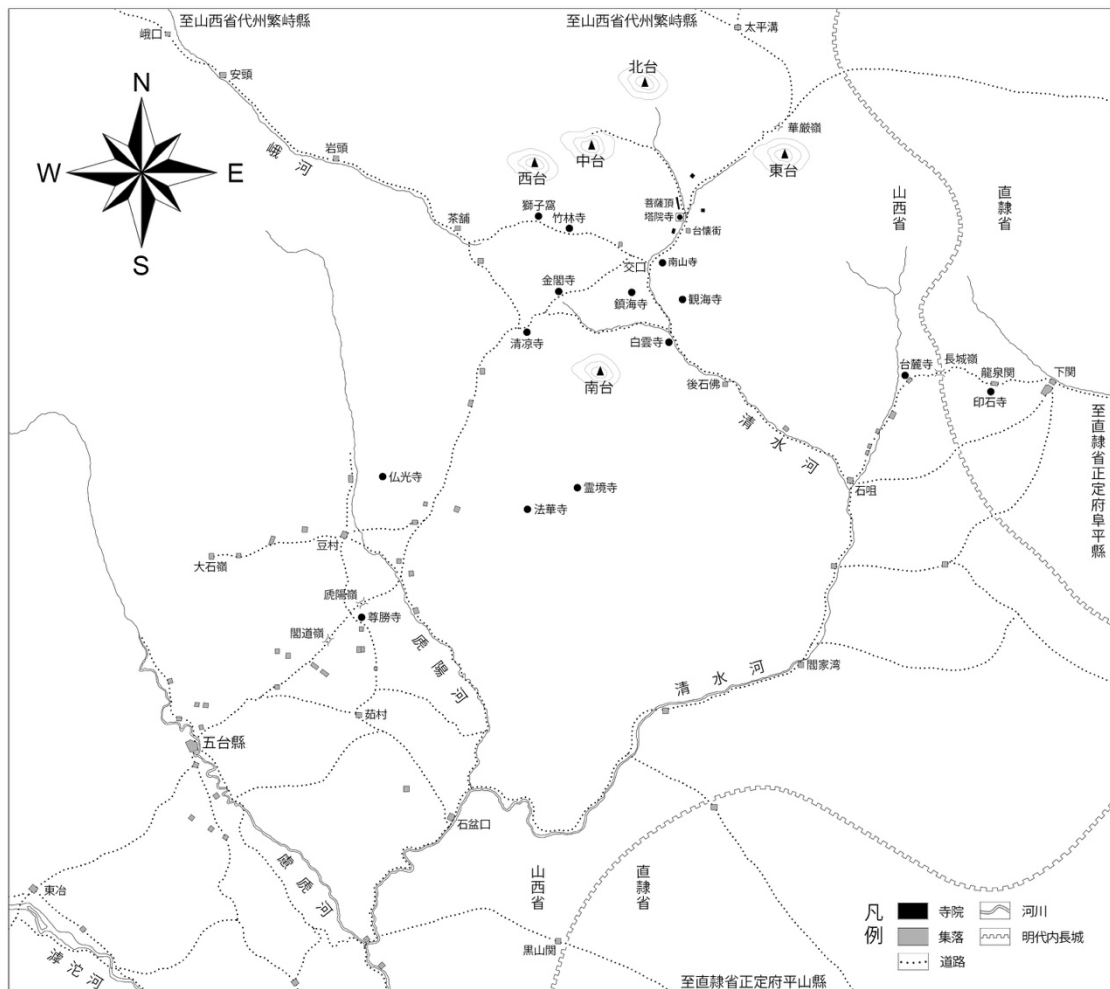


図 2-1-2 清代五台縣圖

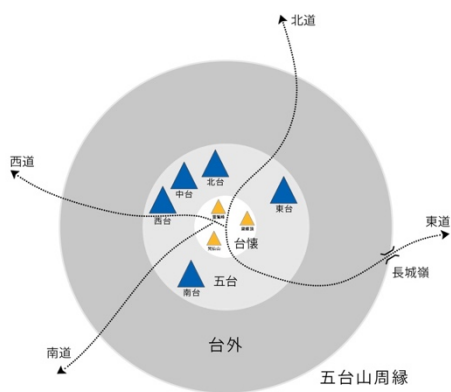


図 2-1-3 五台山空間構成概念圖



図 2-1-4 長城嶺遺跡 (2016年3月、筆者撮影)

16 寺院は中国仏教寺院であった^{注1)}。寺院の数からも、チベット仏教は強い影響力を持ったことがわかる。仏教寺院のほか、龍王廟、玉皇廟、孔子廟などの在来宗教（道教、儒教、および民間信仰など）の施設が存在したことが確認される。寺院が密集する靈鷲峰の南麓、および

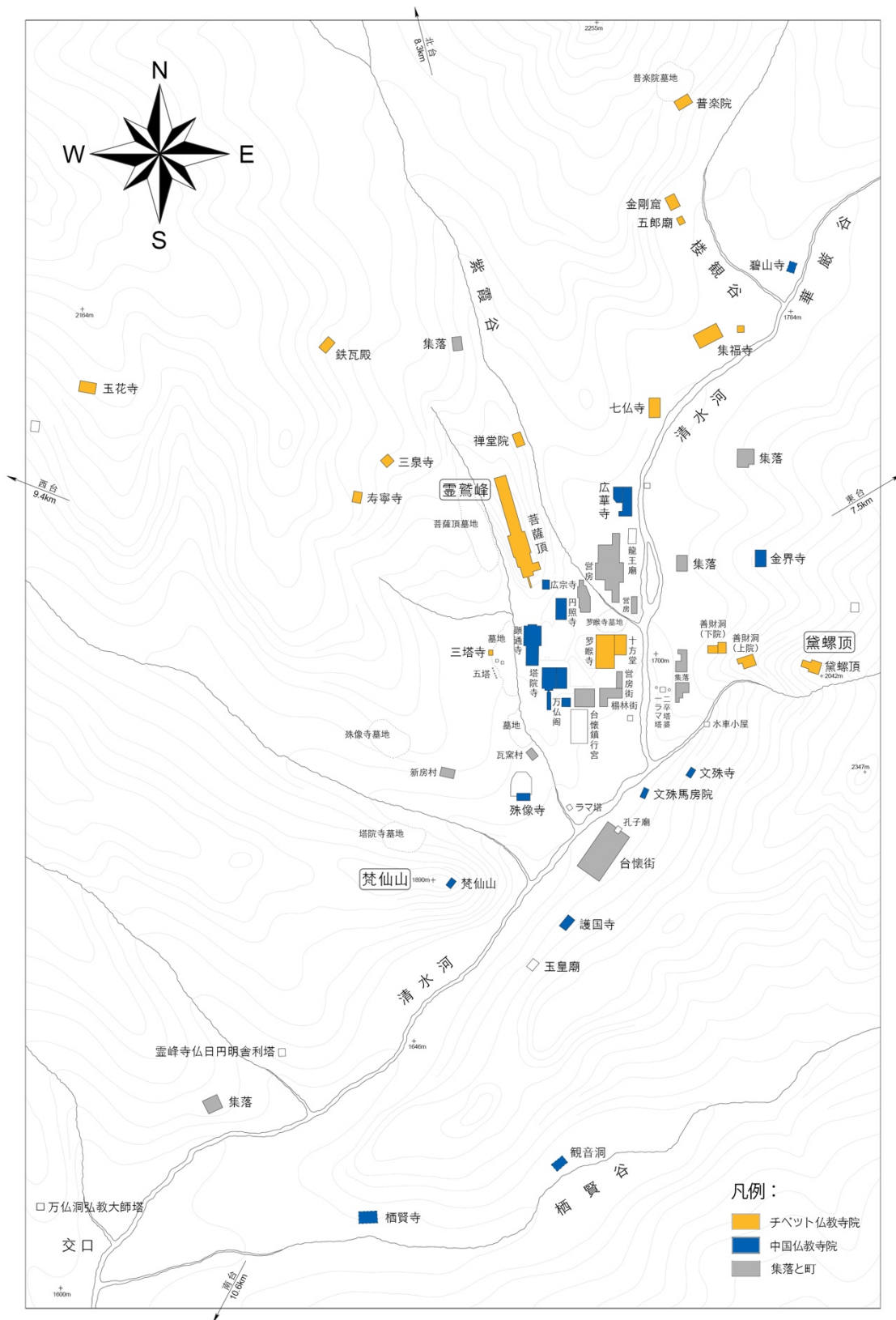


图 2-1-5 清代末期台懷寺院分布图

清水河の東岸には楊林街、営房街、台懷街などの門前町が存在したほか、複数の集落があったことも確認される（図 2-1-5）。このため、清代の五台山は中国仏教・チベット仏教の2種類の寺院、在来宗教の廟、および門前町、集落で構成される宗教都市であったと言える。また、仏教聖地で知られる五台山は他宗教に対して一定の包容性を有することも言うことができる。

なお、後述のように、北のモンゴル地区から五台山への巡礼を行うモンゴル族は北道を利用した。16カ所のチベット仏教寺院が台懷の北部に分布しているのはモンゴル族の巡礼のためと推定される。

(3) 台懷への道路と西巡のルート

五台山の外部から中心部の台懷へ行くには、東道、南道、西道、北道の四つの道路を利用することが可能である。南道、西道は隋唐時代長安、洛陽などから五台山へ行く道路として使われ、のちに利用し続けていた。この二本の道路は東道と台懷にある交口という要所に合流する。北道は北のモンゴル地区とつなぐ道路であり、五台山への巡礼を行うモンゴル族はよく利用した。北道を沿って華嚴嶺という峠を越え、台懷の華嚴谷に到達する。一方、東道

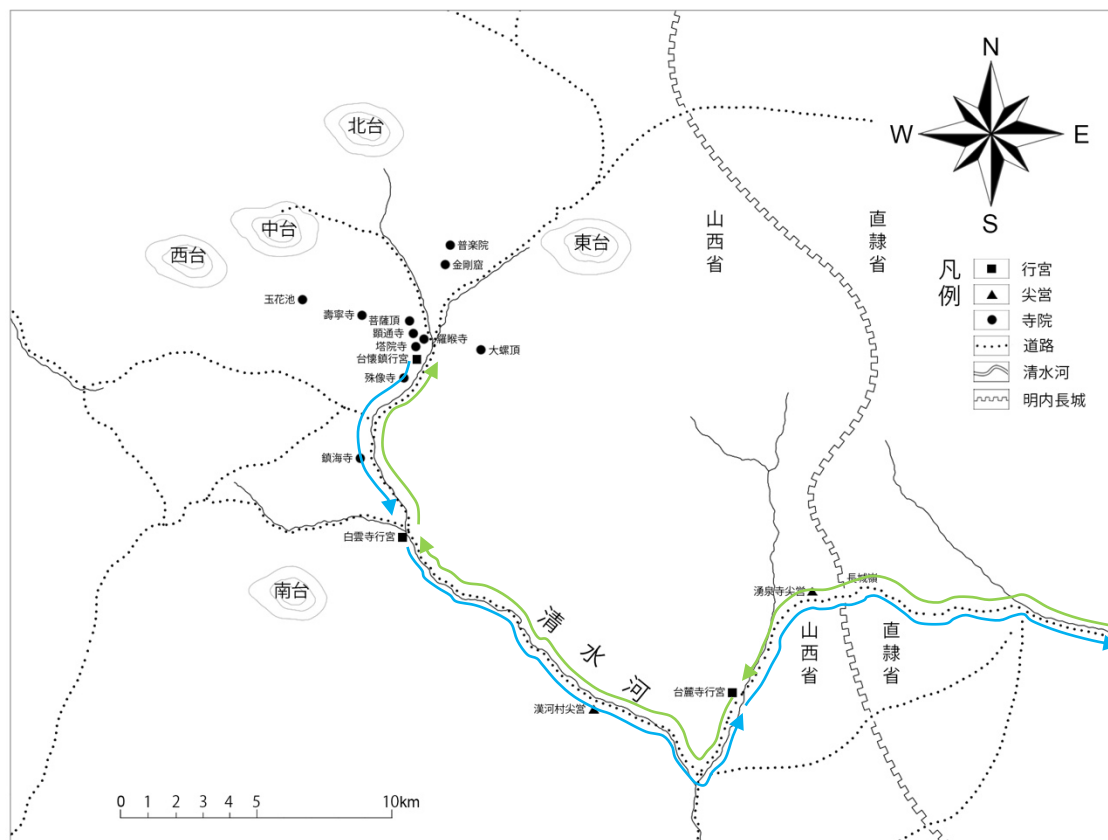


図 2-1-6 清代仁宗の西巡ルート

は直隸省と山西省をつなぐ道路である。清代 12 回の西巡には、聖祖、高宗、仁宗は東道を利用した。東道の起点は北京であり、北京から直隸省を經由し、直隸省と山西省の境にある長城嶺という峠を越え、山西省に到達する（図 2-1-4）。そして、清水河沿いの東道を辿って台懐に入る。

『西巡盛典』によると、嘉慶 16 年の西巡を行った際に、仁宗は東道を經由して台懐に達し、3 月 30 日と閏 3 月 8 日の 9 日間に五台山に滞在した。この期間には仁宗は菩薩頂、鎮海寺、塔院寺などの 11 寺院を訪問したほか、3 月 30 日と閏 3 月 8 日に台麓寺行宮、閏 3 月 1 日と閏 3 月 7 日に白雲寺行宮、閏 3 月 2 日から 6 日まで台懐鎮行宮に宿泊した。また、湧泉寺尖営と漢河村尖営の 2 尖営で休憩したことがわかる（図 2-1-6）^{注2)}。

第二節 康熙年間（1662～1722）の寺院

『清涼山新志』（康熙 40 年・1701）には 100 寺院が記述される。そのうち「臺懐佛刹」に分類される寺院が 64 寺、「臺外佛刹」に分類される寺院が 36 寺ある。「臺外佛刹」の中では、「南臺外」が 9 寺、「東臺外」が 9 寺、「西臺外」が 9 寺、「北臺外」が 9 寺ある（表 2-2-1）^{注3)}。これによると、康熙年間の五台山にある 100 寺院のうち、約 6 割の寺院は台懐に分布していたことになる。台懐は五台山の地理的な中心だけではなく、寺院が集中する宗教的な中心であったと言える。

同書には多くの寺院の所在のみが記述されているが、顯通寺、菩薩頂、圓照寺、殊像寺などの有名な寺院の場合、沿革、仏像なども合わせて収録されている。しかし、これらの寺院の伽藍配置や、建築の様式、構造などを説明する記述はない。一方、塔院寺、演教寺には仏塔の存在が確認される。後述のように、塔院寺には「佛舍利塔」と「文殊髮塔」の 2 基の仏塔があり、演教寺には舍利を蔵する「鐵塔」の記載があるが、その様式を説明する記述がない^{注3)}。

表 2-2-1 五台山の 100 寺院（康熙 40 年・1701）

番号	分類	寺院	別称	寺院の所在	説明 ^{注1)}
1	臺懐佛刹	顯通寺	古名は大孚靈鷲寺	靈鷲峰	北魏に重修し、靈鷲峰をまわって 12 院を置いた。唐代に重ねて修理し、大華嚴寺を改名した。明代に重ねて建設し、大顯通寺に改名し、皇帝は「莊嚴」という額を賜った。清代皇帝は顯通寺に滞在した。

2	臺懷佛刹	菩薩頂	真容院	靈鷲峰	唐代の創建。歴代に修繕を加えた。明代皇帝によって大文殊寺に改築し、寺内に「文殊乘獅行像」があった。清代順治年間以降、菩薩頂の住持はチベット仏教僧が務め、寺内にある建築の屋根は黄色琉璃に葺き替えた。
3	臺懷佛刹	塔院寺	-	顯通寺の南	寺内に「佛舍利塔」と「文殊髮塔」の2基の仏塔が存在した。
4	臺懷佛刹	圓照寺	古称は普寧寺	顯通寺の左	明代に京で逝去した「室利沙」というインドからきた僧侶の舍利を捧げるために、皇帝によって普寧寺跡の上に圓照寺を建立した。
5	臺懷佛刹	広宗寺	銅瓦殿	靈鷲峰の南	明代の創建。屋根は銅の瓦で覆うので、銅瓦殿と呼称した。
6	臺懷佛刹	羅睺寺	-	塔院寺の東北隅	明代に趙惠王によって重修した。
7	臺懷佛刹	広縁寺	古名は大王寺	靈鷲峰の東	-
8	臺懷佛刹	法王寺	-	妃子寺の後	-
9	臺懷佛刹	普濟寺	北山寺	華嚴谷	清代康熙37年、皇帝の財貨によって重ねて建設した。
10	臺懷佛刹	般若寺	-	楼観谷	明代に晋王によって再建した。
11	臺懷佛刹	太平興国寺	-	楼観谷	北宋に皇帝によって建立した。寺院の中には五郎寺がある。
12	臺懷佛刹	法雲寺	-	華嚴嶺	官人の王朝によって重修した。
13	臺懷佛刹	普恩寺	舊称は西天寺	普濟寺の東	-
14	臺懷佛刹	平章寺	-	-	金代の創建。
15	臺懷佛刹	報恩寺	-	華嚴谷	-
16	臺懷佛刹	金界寺	-	華嚴谷	唐代の創建。明代に重修した。
17	臺懷佛刹	萬壽寺	玉花寺	中台東南	明代萬壽寺に改名した。
18	臺懷佛刹	鐵瓦寺	-	玉花池の南	-

19	臺懷佛刹	壽寧寺	古名は王子焚身寺	三泉寺	北齊皇帝によって建立した。唐代に重修した。宋代壽寧寺に改名した。元代成宗、英宗の2名の皇帝は壽寧寺に滞在した。
20	臺懷佛刹	西壽寧寺	-	-	元代の創建。
21	臺懷佛刹	三塔寺	-	靈鷲峰の西	-
22	臺懷佛刹	殊像寺	-	梵仙山の左	寺内に「文殊大士跨狻猊像」があった。清代康熙 37 年皇帝の財貨によって重修した。
23	臺懷佛刹	日光寺	-	鳳林谷	明代の創建。
24	臺懷佛刹	寶林寺	-	日光寺の北	明代の創建。
25	臺懷佛刹	鳳林寺	-	-	-
26	臺懷佛刹	護国寺	-	靈鷲峰の南 3 里	元代皇帝によって建立した。
27	臺懷佛刹	帝釈宮	-	-	即ち玉皇廟。
28	臺懷佛刹	碑楼寺	-	帝釈宮の南	-
29	臺懷佛刹	萬聖祐国寺	-	交口東の山麓	元代皇帝によって建立した。
30	臺懷佛刹	觀海寺	-	明月池の側	北魏の創建。明代に重修した。
31	臺懷佛刹	鎮海寺	-	交口西南嶺の下	-
32	臺懷佛刹	雷音寺	-	海螺城	-
33	臺懷佛刹	雲集菴	-	曉天梁	-
34	臺懷佛刹	天聖寺	-	井溝	明代の創建。
35	臺懷佛刹	靈峰寺	-	陽白峪	唐代の創建。明代皇室の親戚の周善世によって重修した。
36	臺懷佛刹	中峰寺	-	陽白峪	靈峰寺の支院。
37	臺懷佛刹	聖水寺	-		
38	臺懷佛刹	天城寺	-		
39	臺懷佛刹	天盆寺	-	-	-
40	臺懷佛刹	日照寺	-	天盆谷	-
41	臺懷佛刹	金燈寺	-	南台東北麓	-
42	臺懷佛刹	金閣寺	-	南台西北嶺畔	-

43	臺懷佛刹	竹林寺	-	中台南 30 里	唐代の創建。
44	臺懷佛刹	清涼寺	-	中台南 40 里	-
45	臺懷佛刹	知導菴	-	中台南麓	-
46	臺懷佛刹	望海寺	東台	東台	元代の創建。
47	臺懷佛刹	普濟寺	南台	南台	宋代の創建。
48	臺懷佛刹	法雷寺	西台	西台	唐代の創建。
49	臺懷佛刹	靈應寺	北台	北台	靈應寺の標高は最高。明代皇室が仏像を鑄造し、寺院を建立した。
50	臺懷佛刹	演教寺	中台	中台	唐代の創建。鐵塔の中に舍利を蔵する
51	臺懷佛刹	浄土菴	-	棲賢谷	明代の開山。
52	臺懷佛刹	龍興菴	-	棲賢谷	-
53	臺懷佛刹	靈鷲菴	-	華嚴谷の東	-
54	臺懷佛刹	大益菴	-	紫霞谷	-
55	臺懷佛刹	静林菴	-	紫霞谷	-
56	臺懷佛刹	雜華菴	-	塔児溝	-
57	臺懷佛刹	法雲菴	古名は弥陀寺	-	-
58	臺懷佛刹	大林菴	-	鳳林谷	-
59	臺懷佛刹	龍樹菴	-	車溝	-
60	臺懷佛刹	棲鳳菴	-	天盆北嶺	明代の創建。
61	臺懷佛刹	華嚴菴	-	棲鳳菴の東北	-
62	臺懷佛刹	白頭菴	-	南台東北 10 里	-
63	臺懷佛刹	臥雲菴	-	中台西南麓	-
64	臺懷佛刹	不二楼	華嚴楼	西台の北	-
65	南臺外	靈境寺	-	南台から 20 里	明代の創建。
66	南臺外	石塔寺	小栢寺	南台東南	-
67	南臺外	娑婆寺	-	南台から西南 30 里	-
68	南臺外	佛光寺	-	南台から西南 40 里	北魏の創建。
69	南臺外	嵌巖寺	-	南台から 60 里	北魏の創建。

70	南臺外	聖福寺	-	-	-
71	南臺外	赤崖寺	-	-	-
72	南臺外	法華寺	-	-	-
73	南臺外	殊公寺	-	仙花山の陽	-
74	東臺外	華林寺	-	古華巖	唐代の創建。明代4回修理した。
75	東臺外	香雲寺	-	華林寺と連なる	-
76	東臺外	香藁寺	-	華林寺の東	-
77	東臺外	慈雲寺	-	香藁寺の南	-
78	東臺外	龍蟠寺	-	大會谷	-
79	東臺外	鳳嶺寺	-	龍蟠寺の隣	-
80	東臺外	温泉寺	-	東台から東南 50 里余	元代重修した。
81	東臺外	銅鐘寺	-	大會谷	-
82	東臺外	龍泉寺	-	東台の東南 舊路嶺	宋代の創建。明代に重修した。
83	西臺外	秘密寺	秘魔崖	巖谷の奥	唐代の創建。
84	西臺外	圭峰寺	-	峨谷	隋代の建立。
85	西臺外	豹子寺	-	峨谷	隋唐の建立。
86	西臺外	熊頭寺	-		
87	西臺外	向陽寺	-		
88	西臺外	育王寺	-		
89	西臺外	望台寺	-		
90	西臺外	石門寺	-		
91	西臺外	鐵勒寺	-	西台から西南 60 里の鐵勒山	唐代の建立。
92	北臺外	寶積寺	-	北台の谷の中	-
93	北臺外	木瓜寺	-	北台の谷の中	-
94	北臺外	普濟寺	-	大黃尖南麓	唐代の建立。
95	北臺外	公主寺	-	北台の西北	北魏の建立。唐代に重修した。
96	北臺外	浄名寺	-	北台の西北 繁峙縣の南	唐代の建立。宋代重修し、金・元時代重ねて修理した。

97	北臺外	正覚禅院	宋代天王院と呼称	北台の北	北宋宣和年間道教が侵入し、寺院を神霄宮に改築した。現在（当時）皇帝から「正覚禅院」の額を賜った。
98	北臺外	清源寺	-	大黃尖下から 20 里	元代の創建。
99	北臺外	蘭若寺	-	大黃尖から北 20 里	唐代の創建。
100	北臺外	普光寺	黎峪寺	文岫山	明代に皇帝によって重修した。

注1) 原文には説話、詩文、僧侶、仏典などの記述を外し、沿革、仏像などをまとめて訳する。

注2) 「-」は情報がなく、または相応しい情報がない。

第三節 乾隆年間（1736～1795）の寺院

(1) 『清涼山小志』からみた寺院の構成とその分布

『清涼山小志』（乾隆11年・1746）には38寺が収録され、そのうちチベット仏教寺院が9カ所、中国仏教寺院が29カ所あったことが明らかである（表2-3-1^{注4)}。寺院の数によると、

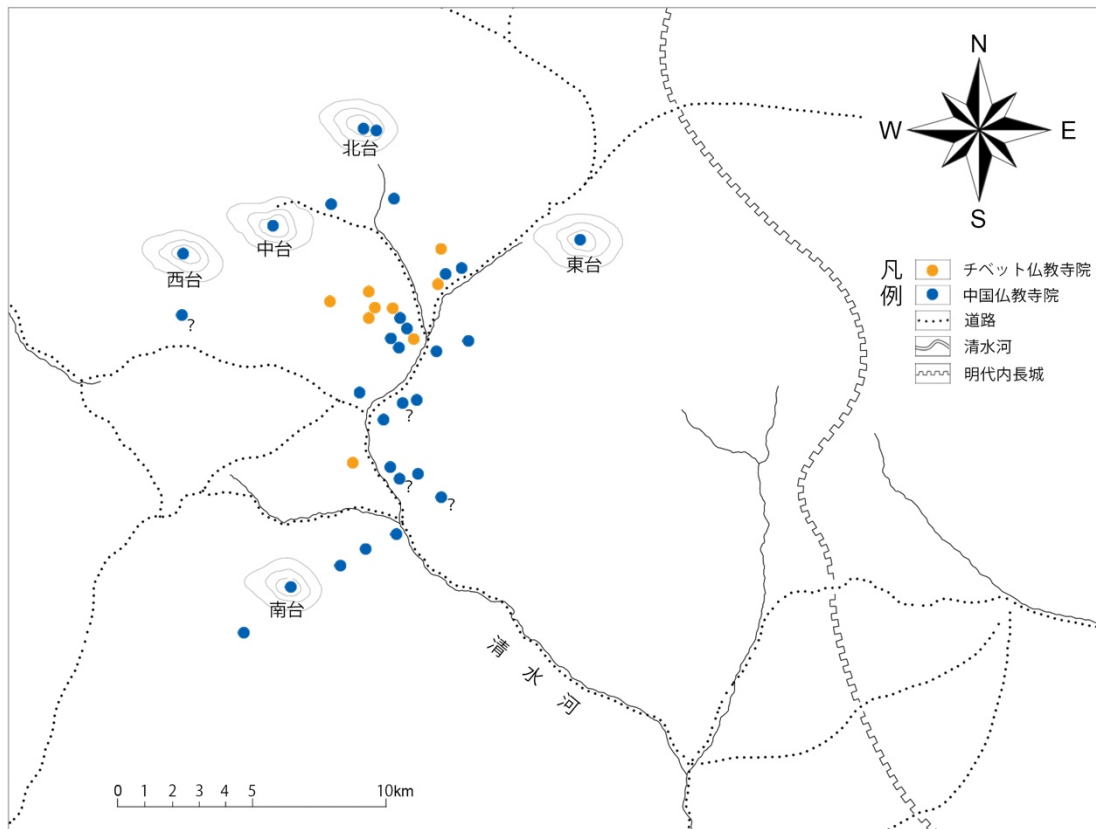


図 2-3-1 五台山 38 寺院の分布（乾隆 11 年・1746）

中国仏教に比して、チベット仏教の力は比較的弱かったと言える。

同書によると、僧侶の人数が一番多かった寺院は菩薩頂であり、100人余のチベット仏教僧がいた。また、玉花池には20人余のチベット仏教僧、白雲寺には20人余の中国仏教僧がいたが、他の寺院で生活していた僧侶は10人以下であった^{注4)}。隋唐時代に千人以上の僧侶が生活していた寺院もあったことと比べると、この頃には寺院の僧侶の数はかなり少なかった。

伽藍配置については、「層」を単位として寺内にある主な殿堂の数が記録されている。そのうち菩薩頂、顕通寺の規模が比較的大きい。菩薩頂には4棟の殿堂が配置され、3進の院子があった。顕通寺には6棟の殿堂が配置され、5進の院子があったことがわかる^{注4)}。鎮海寺の伽藍配置は特徴的なもので、寺院を構成する建築は山の地形に応じてひな壇のように配置されているという。また、塔院寺、顕通寺、雑花庵、演教寺の4寺院には塔が存在したが、その様式を説明する記述がない。

38寺院の所在によると、これらの寺院は五台と台懐に分布していたことがわかる（図2-3-1）。そのうち、全てのチベット仏教寺院は台懐に集中し、特に菩薩頂、羅睺寺、壽寧寺、三泉寺、鐵瓦寺、玉花池の6寺院は靈鷲峰とその周りに分布していた。乾隆年間高宗の支持によって五台山のチベット仏教は発展したが、チベット仏教の影響は台懐のみに限られたと言える。

表 2-3-1 五台山の 38 寺院（乾隆 11 年・1746）

番号	性質	寺院	別称	僧侶の人数	寺院の所在	伽藍配置
1	チベット仏教寺院	菩薩頂	真容院/ 文殊院	100 人余	靈鷲峰の頂上	殿四層 ^{注1)}
2	チベット仏教寺院	羅睺寺	- ^{注2)}	住持はチベット仏教僧	圓照寺から東南 1 里	殿三層
3	チベット仏教寺院	七佛寺	-	2~3 人	大螺頂の下、山の北から 2 里	殿一層
4	チベット仏教寺院	般若寺	-	住持はチベット仏教僧	宏慶寺の東北、楼観谷内 2 里余	殿二層
5	チベット仏教寺院	壽寧寺	古名は 王子焚 身寺	10 人余	菩薩頂から西北 1 里	殿二層

6	チベット仏教 寺院	三泉寺	-	2~3人	壽寧寺から正北1里	殿一層
7	チベット仏教 寺院	鐵瓦寺	古佛寺	住持はチベ ット仏教僧	三泉寺の傍	-
8	チベット仏教 寺院	玉花池	-	20人余	鐵瓦寺から西北1里	殿三層
9	チベット仏教 寺院	鎮海寺	-	10人余	萬縁庵から東半里の間	殿宇隨山構成。層 次叠落 ^{注3)} 。
10	中国仏教寺院	望海寺	-	2人	妙徳庵の東北	殿二層
11	中国仏教寺院	法雷寺	西台	3人	演教寺から西北10里	殿二層
12	中国仏教寺院	普濟寺	南台	3~4人	金燈寺の西南	殿二層
13	中国仏教寺院	靈隱寺	北台	2人	黒龍池から西北半里	殿二層
14	中国仏教寺院	演教寺	-	2人	玉花池の西北から上が り、羅漢坪を15里越え るところ	殿一層。塔一座。
15	中国仏教寺院	古南台	-	4~5人	普濟寺から西南5里	殿二層
16	中国仏教寺院	圓照寺	-	3~4人	菩薩頂から東40歩	殿二層
17	中国仏教寺院	大羅頂	-	-	所在する山は羅睺寺の 東にある	前後兩層。山門内 有六角亭。
18	中国仏教寺院	宏慶寺	-	1人	七佛寺から北1里	殿一層
19	中国仏教寺院	碧山寺	-	10人余	般若寺から東北1里	殿三層
20	中国仏教寺院	妙徳庵	-	2~3人	雜花庵から正東3里	僅存前後殿
21	中国仏教寺院	雜花庵	-	2~3人	碧山寺の正北、塔兒溝内	塔一座。殿一層。
22	中国仏教寺院	西林寺	-	3~4人	法雷寺から北下5里	今僅存殿一層
23	中国仏教寺院	広宗寺	-	住持は中国 仏教僧	菩薩頂の南	-
24	中国仏教寺院	頭通寺	-	住持は中国 仏教僧	広宗寺から南1里	廟落最大。山門起 至後閣共六層。六 層内有無梁殿。磚 圈砌成。四圍上下。 皆供磚鑿小佛。有

						銅塔四座。銅鑄殿一層 ^{注4)} 。
25	中国仏教寺院	塔院寺	-	住持は中国 仏教僧	顯通寺から南半里	此寺以塔興。(中略)。前後二塔。
26	中国仏教寺院	殊像寺	-	-	塔院寺から東南1里余	殿二層
27	中国仏教寺院	碑楼寺	-	3人に過ぎ ない	殊像寺から東2里	-
28	中国仏教寺院	佑国寺	-			
29	中国仏教寺院	紫府寺	-			
30	中国仏教寺院	棲賢社	-	-	碑楼寺の東	-
31	中国仏教寺院	萬縁庵	-	1人	棲賢社から東南2里に過ぎない	-
32	中国仏教寺院	沐浴堂	-	2~3人	鎮海寺から東2里余	殿一層。後閣一層。
33	中国仏教寺院	明月池	-	2人	沐浴堂東南の山口	殿一層
34	中国仏教寺院	護衆庵	-	3人	明月池から東南3里の間	殿二層
35	中国仏教寺院	白雲寺	接待院	20人余	護衆庵から東南3里に過ぎない	殿二層。(中略)。山門外牌楼一座。(中略)。鐘鼓楼二座。
36	中国仏教寺院	千佛洞	-	モンゴル語を話せる5~6人	白雲寺山門の東から西南に向かい、5里を歩くところ	殿二層
37	中国仏教寺院	金燈寺	-	2~3人	千佛洞から西南5里余	殿二層
38	中国仏教寺院	黒龍池	-	2人	望海寺の北から西に下り、華巖嶺からから西北に20里余上がる	殿一層。抱廈一層。抱廈前有兩廂房。内貯雪。

注1) 「層」は「棟」と理解される。「殿一層」は寺内に1棟の殿堂があり、「殿四層」は寺院の中心軸上に4棟の殿堂が配置され、3進の院子があると考えられる。同じく、のちの「銅鑄殿一層」は銅で鑄造する殿堂が1棟あり、「後閣一層」は寺院の後ろには楼閣が1棟あると理解される。

注2) 「-」は記述がなし。

注3) 「鎮海寺の建築は山の地形に応じてひな壇のように配置されている」を意味する。

注4) 「寺院の規模は最大で、山門から後閣まで計6棟の殿堂が有り。寺内に無梁殿が有り、磚で造成す

る。無梁殿四つの立面に下から上までは磚で刻む小型の仏像がそなえる。銅塔4基が有り、銅で鑄造する殿堂が1棟ある」を意味する。

(2) 『欽定清涼山志』からみた寺院の構成とその分布

『欽定清涼山志』(乾隆50年・1785)には金剛窟精舎・寛灘村精舎の2精舎、および102寺院が収載されている^{注5)}。まず、精舎については、金剛窟精舎の場合は「大門三楹、山亭五、正宇五楹、敞軒十八楹、左右廡十六楹」との記述がある。寛灘村精舎の場合、「大門三楹、正宇三楹、敞軒十四楹、左右廡十八楹」とある^{注5)}。これによると、精舎には独立の「大門」が設けられ、大門の内には「正宇」「敞軒」といった主な建物があり、「(配)廡」という配房が左右対称に配置されていたことがわかる。建物の配置などから、精舎は少なくとも2進の院子で構成されたと推定される。

なお、同書に2精舎は寺院として巻11に収録されているが、山門、鼓楼、鐘楼、天王殿、大雄宝殿などの施設がないことから、精舎は寺院とは言えないだろう。一方、後述の寺院に付属して建設された精舎に比すると、金剛窟精舎・寛灘村精舎の2精舎は独立の出入り口(大門)を有しており、一定の独立性を有すると言える。

同書には102寺院が記述されているが、これらの寺院の性質の記述がない。102寺院の中では、「五臺古刹」に分類される寺院は25寺あり、これらの25寺院が廃棄されたことがわかる。また、「東臺外佛刹」は5寺、「西臺外佛刹」は3寺、「南臺外佛刹」は5寺、「北臺外佛刹」は8寺があげられている。五臺古刹と臺外佛刹を合わせて46寺院となり、これらの寺院の伽藍配置は明記されていないが、そのほかの56寺院の伽藍配置は明らかである(表3-3-2)^{注5)}。

56寺院には山門、鼓・鐘楼、前・後殿、文殊殿、羅漢殿などの建物が建設されるので、中国仏教伝統的な伽藍配置を有することがわかる。特に、塔院寺と顯通寺にある仏塔はチベット式の構造物であることが、「五台山行宮座落地盤圖」、『西巡盛典』に収録される古絵図、近代の黑白写真、および現存する遺構などで確認される。仏塔と周りの建物を構成する塔院はチベット仏教の空間であると見なすべきであろう。

一方、寺院には精舎という施設があった。この精舎については、菩薩頂の「其西精舎額曰斗室」との記述によると、精舎は寺院の西に位置する。台麓寺の「(乾隆)二十六年、葺寺傍精舎」の記述から、精舎は寺院の傍に建設されたことがわかる。また、白雲寺の「聖祖御書前殿額曰法雲精舎、(中略)、(乾隆)二十年、於寺傍修建行宮、(乾隆)二十五年、改為精舎」との記述によると、聖祖は白雲寺を「法雲精舎」と称した。乾隆20年(1755)寺院の傍に行宮が建設され、乾隆25年には行宮が精舎に改築された^{注5)}。このため、精舎は寺院に付

属して建設された施設としてあったことがある。後述の精舎の役割を検討すると、精舎は西巡に皇帝を迎えるために建設された、皇帝権力の空間であったと言える。

このように、清代五台山にある寺院には中国仏教の空間 (Chinese Buddhist space = C) ・チベット仏教の空間 (Tibetan Buddhist space = T) ・皇帝権力の空間 (Emperor Power space = E) の3空間が存在したことがわかる。

3空間の相互関係に関わらず、その組み合わせによると、56寺院は中国仏教の空間のみが存在する寺院 (C)、中国仏教・皇帝権力の空間が併存する寺院 (C・E)、中国仏教・チベット仏教・皇帝権力の空間が併存する寺院 (C・E・T) の三つのタイプに分けられる。中国仏教の空間のみが存在する寺院は33寺、中国仏教・皇帝権力の空間が併存する寺院は21寺あり、中国仏教・チベット仏教・皇帝権力の空間が併存する寺院は顯通寺・塔院寺の2寺のみである (表3-3-2)。一方、チベット仏教の空間のみが存在する寺院 (T)、チベット仏教・皇帝権力の空間が併存する寺院 (T・E)、中国仏教・チベット仏教の空間が併存する寺院 (C・T) の三つのタイプの寺院がないことは注意すべきである。

まず、中国仏教の空間のみが存在する寺院では、寺院の規模により、山門、鼓楼、鐘楼、大殿などの施設がなかった寺院はあるが、全ての寺院は主な殿堂が中心軸上に設けられ、建物が左右対称に配置された伽藍配置を有したと考えられる。特に、規模が大きな寺院には、龍王祠、關聖祠、山樓、峻雲閣、文殊閣、羅漢殿、文殊殿などの殿堂が存在した。そのうち、龍王祠は人格化した神の龍王を祀る殿堂である。中国の仏教、道教、および民間信仰には龍王があるが、仏教寺院の場合では龍王が守護神として扱われている。また、關聖祠は三国時代 (184~280) 武将の關羽 (当時司隸河東郡、現山西省運城市の出身) を祀る殿堂で、關羽は寺院を鎮護する神としてその殿堂は山西省の寺院によく見られる。このように、これらの寺院には中国仏教と異質な空間はなかったことがわかる。

次に、中国仏教・皇帝権力の空間が併存する寺院は伝統的中国式の伽藍配置を有した一方、皇帝権力の空間である精舎が存在した。玉花池、普安寺にある精舎の所在は明らかではないが、菩薩頂には精舎が中国仏教の空間の西に、千佛洞には精舎が中国仏教の空間の前に、残る17寺院は精舎が中国仏教の空間の傍に配置されたことがわかる。つまり、精舎は中国仏教の空間の南北または東西の軸に沿って、従来の院子の外に増築されたと考えられる。なお、これらの精舎は3~6間の規模有した。

『欽定清涼山志』の書かれた翌年にチベット式の塔が建立された鎮海寺を加えると、中国仏教・チベット仏教・皇帝権力の空間が併存する寺院は3寺ある。三つの空間の相互関係において、3寺院はそれぞれの特徴があったが、菩薩頂では他寺院に比して、皇帝権力の空間

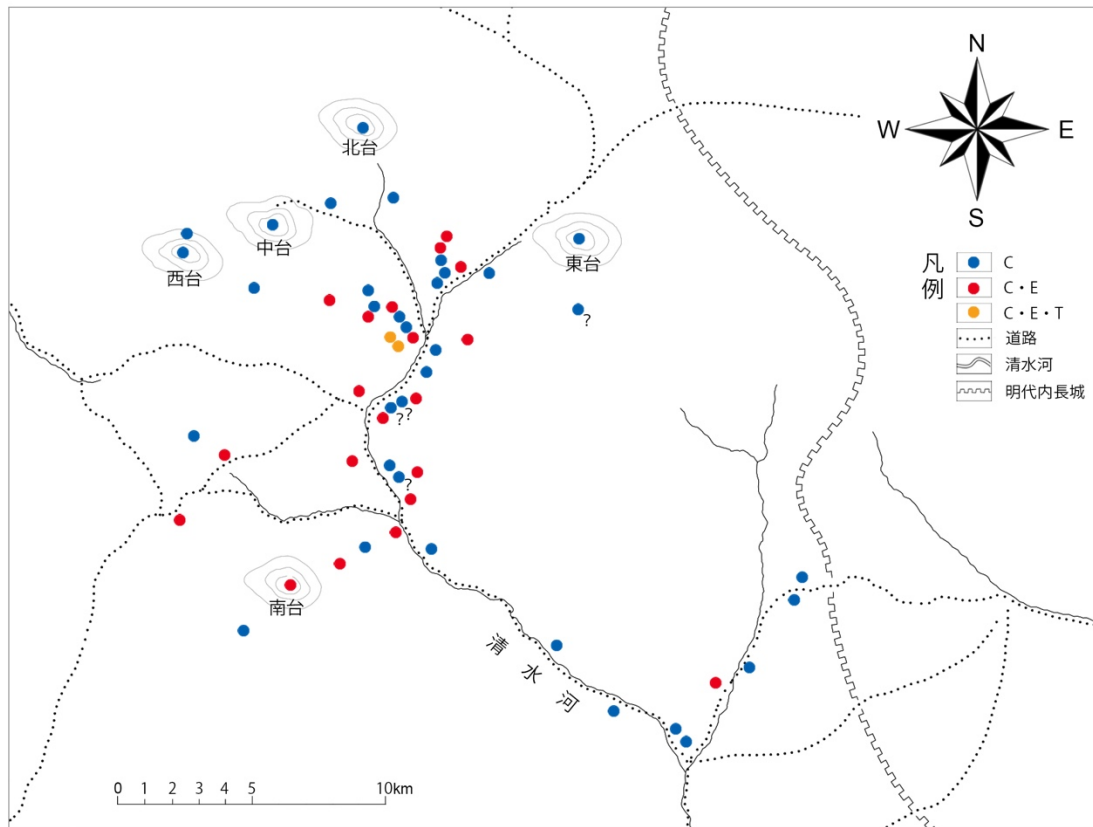


図 2-3-2 五台山 56 寺院の分布（乾隆 50 年・1785）

は比較的に大きなパワーを有したことがわかる。乾隆 51 年以降になると、鎮海寺および塔院寺にも三つの空間がそろった。面積、配置の上で三つの空間が大体均等的に並ぶのが鎮海寺の特徴であり、チベット式の巨大な仏塔を有したのが塔院寺の特徴である。

56 寺院の所在を見ると、中国仏教の空間のみが存在する寺院は五台山への東道沿い、および五台・台懐に分布していたことがわかる（図 2-3-2）。中国仏教・皇帝権力の空間が併存する寺院はやや広く分布していたが、東台、北台、中台、西台の四台には中国仏教・皇帝権力の空間が併存する寺院がない。乾隆 15 年以降高宗は四台を訪問しなかったため、皇帝権力から空間への影響が四台にある寺院に定着しなかったと考えられる。他方で、中国仏教・チベット仏教・皇帝権力の空間が併存する寺院である菩薩頂、塔院寺は台懐の靈鷲峰に所在した。

これによると、清代五代山にあるチベット仏教寺院は少なくないとはいえ、チベット仏教が寺院の空間に対する影響は比較的に弱かった。しかもチベット仏教の空間は注目を集める靈鷲峰にある寺院だけに定着したのは注意すべきである。なお、皇帝権力の空間が導入されない寺院にはチベット仏教の空間がないことから、チベット仏教と皇帝権力には強い繋がりがあったと推定される。

表 2-3-2 五台山の 56 寺院（乾隆 50 年・1785）

番号	類型 ^{注1)}	寺院	別称	寺院の所在	伽藍配置
1	C	中台演教寺	中台頂	— ^{注2)}	有舍利藏於鐵塔。山門三楹 ^{注3)} 。正殿三楹。配殿六楹。
2	C	東台望海寺	東台頂	望海峰の上	山門三楹。前殿五楹。後殿五楹。配廡三楹。僧房三楹。龍王祠一楹。
3	C	西台法雷寺	西台頂	—	山門一楹。前殿三楹。後殿三楹。配廡六楹。
4	C	北台靈應寺	北台頂	—	山門三楹。正殿三楹。配廡六楹。後廡三楹。龍池三楹。僧舍七楹。
5	C	圓照寺	古称は 普寧寺	靈鷲峰の下、頭 通寺の左	山門五楹。鐘鼓樓各一。前殿三楹。大殿三楹。配殿六楹。配廡、禪房九十楹。
6	C	広宗寺	銅瓦殿	靈鷲峰の南半 麓	山門三楹。鐘鼓樓各一。文殊殿五楹。銅殿三楹。配廡、僧房四十楹。
7	C	旃林寺	—	東台の南	山門一楹。文殊殿五楹。配廡二十二楹。僧舍十楹。
8	C	普濟寺	—	石嘴村の西北	山門三楹。鐘鼓樓各一。文殊殿三楹。大殿三楹。關聖祠三楹。配廡二十二楹。僧舍七楹。
9	C	湧泉寺	—	盧家莊の東	山門三楹。鐘鼓樓各一。中殿五楹。後殿五楹。配殿六楹。山樓、僧舍四十楹。
10	C	萬縁菴	—	東台の南	山門三楹。前殿三楹。中殿五楹。後殿五楹。前後配廡四十二楹。僧舍二十四楹。
11	C	妙徳菴	—	南台の西北	山門三楹。前殿三楹。大殿三楹。配廡十八楹。僧舍六楹。
12	C	雑花菴	—	北台の東南	山樓三楹。前殿三楹。大殿五楹。配廡十二楹。僧舍十楹。
13	C	古南台	—	南台の西南	山門一楹。大殿五楹。羅漢殿三楹。配廡十楹。山樓一楹。僧舍十楹。
14	C	古清涼	—	清涼石の西北	前山樓三楹。坊一。(中略)。峻雲閣五楹。文殊閣三楹。正殿三楹。東西山樓六楹。僧

					舎六楹。
15	C	紫府廟	-	台懷鎮の東	山門三楹。坊一。鐘鼓樓各一。大殿三楹。配廡二十二楹。僧舎六楹。
16	C	八功德水	-	北台の北麓	山門三楹。配廡六楹。
17	C	集福寺	洪慶寺/ 太平興 国寺	楼観谷	山門一楹。鐘鼓樓各一。大殿三楹。文殊殿三楹。後殿三楹。配廡十八楹。山房六楹。僧舎二十二楹。
18	C	五郎寺	五郎廟	洪慶寺の東北	山門三楹。中殿三楹。大殿三楹。配廡三十四楹。僧舎二十九楹。
19	C	古佛寺	-	蛤蟆石の北	山門三楹。大殿三楹。配廡十六楹。
20	C	碑楼寺	-	靈鷲峰の東南	坊一。亭一。文殊殿三楹。後殿三楹。關聖祠三楹。配廡二十楹。山房八楹。僧舎十五楹。
21	C	護国寺	-	靈鷲峰から南3 里	山門三楹。鐘鼓樓各一。中殿三楹。後殿五楹。配廡三十楹。山房六楹。僧舎八楹。
22	C	七佛寺	-	妙徳菴の南	前殿三楹。大殿三楹。配廡十六楹。山房六楹。僧舎十二楹。寺旁龍王祠三楹。山樓三楹。鐘鼓樓各一。
23	C	平章寺	-	光明汎の東	山門三楹。鐘鼓樓各一。文殊殿三楹。配廡六楹。
24	C	三泉寺	-	中台の南麓	山門一楹。亭一。大殿三楹。配廡八楹。僧舎三十一楹。
25	C	鐵瓦寺	-	三泉寺の東	山門一楹。文殊殿三楹。正殿三楹。前後配廡十二楹。鐘鼓樓各一。山房四楹。僧舎二十楹。
26	C	吉祥寺	-	清涼橋	山門三楹。前殿三楹。正殿五楹。配廡十六楹。山房十楹。僧舎三十七楹。
27	C	竹院寺	-	碑楼寺の西南	山門三楹。鐘鼓樓各一。前廡三楹。前殿五楹。配廡十六楹。後閣五楹。山樓十二楹。僧舎十五楹。
28	C	白頭菴	-	南台の東北、白	山門三楹。大殿三楹。

				雲寺の東南	
29	C	海會菴	-	金剛窟の西北	山門三楹。大殿三楹。左右殿六楹。配廡二十四楹。小山樓一楹。僧舍十四楹。
30	C	沐浴堂	-	鎮海寺の西南	山門三楹。鐘鼓樓各一。大殿三楹。配廡十二楹。藏經樓五楹。僧舍五十一楹。
31	C	萬佛閣	-	湧泉寺の南	山門一楹。正殿三楹。配廡八楹。
32	C	聖母廟	俗称は 娘娘廟	射虎川の東	山門三楹。鐘鼓樓各一。正殿三楹。配廡十楹。山房六楹。僧舍三楹。
33	C	石嘴関聖祠	-	普濟寺東南の 石嘴村	山門三楹。鐘鼓樓各一。大殿三楹。中殿三楹。配廡十六楹。
34	C・E	菩薩頂	文殊寺/ 真容院	中台靈鷲峰頂	山門三楹。左右鐘鼓樓各一。坊一。天王殿三楹。配殿六楹。都綱殿三楹。配廡十楹。文殊殿三楹。配廡六楹。藏經樓五楹。前後順山樓一百二楹。禪房、僧舍一百八十楹。 (中略)。其西精舍額曰斗室 ^{注4)} 。
35	C・E	台麓寺	-	東台の東南、射 虎川の上	山門三楹。鐘鼓樓各一。前殿五楹。配殿、配廡各六楹。文殊殿五楹。配殿、配廡各十楹。禪房、僧舍一百八楹。(乾隆) ^{注5)} 二十六年、葺寺傍精舍。
36	C・E	白雲寺	舊名は 接待院	北台の南	山門三楹。鐘鼓樓各一。前殿三楹。文殊殿三楹。後殿五楹。配廡、僧房四十楹。(中略)。聖祖御書前殿額曰法雲精舍。(中略)。 (乾隆)二十年、於寺傍修建行宮。(乾隆)二十五年、改為精舍。
37	C・E	南台普濟寺	南台頂	-	山門三楹。正殿三楹。文殊殿三楹。配廡十楹。山房六楹。寺旁精舍三楹。
38	C・E	羅睺寺	-	塔院寺の東北 隅	山門三楹。鐘鼓樓各一。文殊殿三楹。都綱殿六楹。後閣五楹。前後配廡六十楹。山樓十楹。僧房六十八楹。寺後有轉輪閣。(乾隆)二十五年、寺傍改修精舍。正殿三楹。前殿五楹。敞軒、齋室六楹。配廡六楹。

39	C・E	殊像寺	-	靈鷲峰の麓、飯 仙山の左	有文殊跨狻猊像。(中略)。山門三楹。鐘鼓樓各一。大殿三楹。後殿五楹。大悲閣三楹。配廡二十二楹。僧舍二十四楹。旁有精舍。敞軒三楹。山樓三楹。
40	C・E	清涼寺	保安寺	中台の南	山門三楹。鐘鼓樓各一。坊一。亭一。前殿三楹。正殿三楹。前後配廡二十四楹。僧舍三十三楹。寺旁有精舍。正殿三楹。配廡、軒亭十八楹。(乾隆)十六年、改修寺旁精舍。
41	C・E	壽寧寺	-	中台から南 30 里	山門三楹。鐘鼓樓各一。坊一。亭一。大殿三楹。後殿五楹。配廡二十楹。山房七楹。僧舍三十五楹。寺旁有精舍三楹。亭一。
42	C・E	金剛窟	般若寺	東台楼観谷	山門一楹。鐘鼓樓各一。坊一。大殿三楹。中殿五楹。後殿五楹。配廡六楹。金光閣一楹。配廡二十楹。僧舍十六楹。寺旁精舍三楹。
43	C・E	鎮海寺 ^{注6)}	-	交口西南嶺の 下	山門三楹。鐘鼓樓各一。亭一。前殿三楹。大殿五楹。後山殿三楹。前後配廡二十四楹。僧舍六楹。寺旁精舍三楹。
44	C・E	碧山寺	普濟寺/ 北山寺	華嚴谷	山門三楹。鐘鼓樓各一。坊一。文殊殿五楹。雷音、戒壇各五楹。藏經閣五楹。龍神寺三楹。前後配廡六十二楹。山樓二十楹。僧舍四十七楹。寺旁精舍三楹。
45	C・E	棲賢寺	棲賢社	東台棲賢谷	山門五楹。鐘鼓樓各一。坊一。正殿五楹。觀音殿五楹。後閣殿五楹。前後配廡四十四楹。山樓二十楹。僧舍五十四楹。寺旁有精舍三楹。
46	C・E	金閣寺	-	南台の西北	山門五楹。鐘鼓樓各一。坊一。大殿五楹。中殿三楹。後殿五楹。配廡十楹。僧舍十六楹。寺旁精舍三楹。
47	C・E	明月池	-	萬縁菴の東	山門三楹。坊一。文殊殿三楹。配廡十二楹。

					僧舎五楹。 <u>池旁精舎三楹</u> 。敞軒三十六楹。
48	C・E	玉花池	明代に 萬壽寺 に改名 した	中台の南麓、西 の羅漢坪を接 する	山門三楹。鐘鼓樓各一。亭一。大殿三楹。 配廡八楹。山樓十四楹。後閣五楹。山房三 楹。僧房六十楹。 <u>精舎三楹</u> 。
49	C・E	普樂院	-	金剛窟の西	山門一楹。鐘鼓樓各一。坊一。白水池亭一。 前殿三楹。後殿三楹。前後配廡二十一楹。 山房十一楹。藏經樓五楹。山樓十八楹。龍 王祠一。東西僧舎十九楹。 <u>院旁精舎四楹</u> 。 山軒十二楹。(中略)。精舎前簷有御書普樂 院三字。
50	C・E	千佛洞	-	南窑子の西	山門三楹。坊一。文殊殿三楹。大士殿五楹。 正殿三楹。前後配廡十二楹。山樓三楹。龍 王祠一楹。禪房五楹。 <u>洞前精舎三楹</u> 。山軒 九楹。
51	C・E	大螺頂	黛螺頂	靈鷲峰の東	山門三楹。文殊殿三楹。後殿五楹。配廡十 四楹。僧舎十楹。 <u>寺旁精舎六楹</u> 。
52	C・E	金燈寺	-	南台東北麓、千 佛洞の西	山門三楹。文殊殿三楹。大殿三楹。配廡十 二楹。山樓七楹。僧舎二十二楹。 <u>寺旁精舎 三楹</u> 。
53	C・E	普安寺	-	萬縁菴の南	山門三楹。鐘鼓樓各一。亭一。大殿三楹。 配廡十楹。 <u>精舎五楹</u> 。山房三楹。僧舎十六 楹。
54	C・E	南山寺	-	棲賢谷の東南	山門三楹。山樓五楹。配廡十楹。 <u>寺旁有精 舎</u> 。正殿五楹。亭一。山樓八楹。僧舎二楹。
55	C・E・T	顯通寺	古名は 大孚靈 鷲寺	靈鷲峰の上	内外山門六楹。鐘鼓樓各一。文殊殿五楹。 大雄殿五楹。無梁殿七楹。千佛殿三楹。銅 殿一區。 <u>銅塔五座</u> 。前後配殿四十楹。後閣 五楹。藏經樓二所。禪舎、僧房二百四楹。 (中略)。 <u>寺東有精舎五楹</u> 。
56	C・E・T	塔院寺	大寶塔	靈鷲峰の下	<u>内有佛舍利塔</u> 。左有文殊髮塔、佛足碑。後

			寺	殿有轉輪藏。内外山門六楹。鐘鼓樓各一。 延壽殿五楹。配廡六楹。藏經樓五楹。禪房、 僧舍三十四楹。山門外千佛閣三楹。文殊殿 三楹。龍王祠三楹。僧房七十楹。 <u>寺旁精舍</u> <u>三楹。</u>
注1) C = Chinese Buddhist space =中国仏教の空間 T = Tibetan Buddhist space = チベット仏教の空間 E = Emperor Power space =皇帝権力の空間 注2) 「-」は史料なし。 注3) 「楹」は「間」である。柱と柱の間の空間を指す。 注4) 「(乾隆)」は筆者による加筆、以下同じ。 注5) 下線は筆者による。 注6) 乾隆50年の時点に鎮海寺にはチベット式の仏塔がない。				

第四節 嘉慶年間（1796～1820）の寺院

嘉慶年間には、前代のように多くの寺院が記述される山志がないが、『西巡盛典』には仁宗が訪問した鎮海寺、殊像寺、菩薩頂、大螺頂、金剛窟、普樂院、羅睺寺、顯通寺、塔院寺、壽寧寺、玉花池の11寺院の情報と絵図が収録されている。そのうち7寺院はチベット仏教寺院、4寺院は中国仏教寺院であった^{注6)}。乾隆年間の寺院に比して、この時点の寺院に生活していた僧侶の人数は増加し、高宗の支持によって寺院は発展したことがわかる。一方、嘉慶15年（1810）に作成された「五台山行宮座落地盤圖」には塔院寺、殊像寺、普樂院、大螺頂、壽寧寺、鎮海寺、玉花池、菩薩頂の8寺院の地盤が描かれている。

両図によると、11寺院は中国式の伽藍配置を有し、寺院の中には皇帝のための「座落」が存在したことが確認される。このうち、鎮海寺、塔院寺、および顯通寺にはチベット仏教の空間があった^{注7)}。「座落」が所在する座落院と寺院の関係においては、塔院寺、玉花池には座落院が中国仏教の空間の内、東北隅に配置された。壽寧寺には座落院が2カ所あり、一つは中国仏教の空間の前方にあり、もう一つは中国仏教の空間の内、寺院の東北隅に配置された。残る8寺院には座落院は中国仏教の空間の外、寺院の傍に設けられたことがわかる。座落院の出入り口は垂花門、屏門、隨牆宮門（壁・塀に開かれた門）などの門が用いられ、中国仏教の空間の内に設けられた座落院の場合では、垂花門が多用されていた。一方、11寺院の所在によると、全ての寺院は台懷に位置する（図 2-4-1）。先述の通り（第二章第一節）、

多くのチベット仏教寺院は台懷の北部に位置するように見られる。

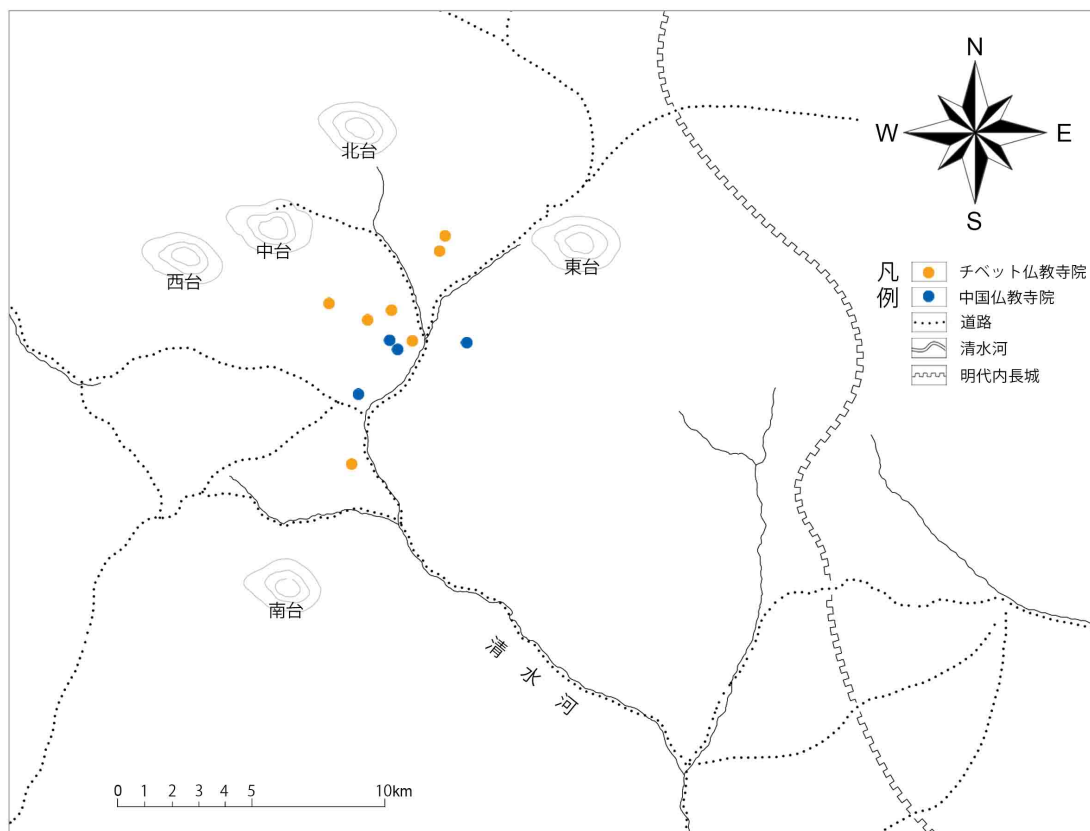


図 2-4-1 五台山 11 寺院の分布（嘉慶 17 年・1812）

表 2-4-1 五台山の 11 寺院（嘉慶 17 年・1812）

番号	性質	類型 ^{注1)}	寺院	僧侶の人数	寺院の所在	座落院の所在	座落院の出入り口
1	チベット 仏教寺院	C・E・T	鎮海寺	12 人	交口の西南 嶺の下	中国仏教の空間の南側	垂花門
2	チベット 仏教寺院	C・E	菩薩頂	560 人	中台の靈鷲 峰頂	中国仏教の空間の西側	屏門
3	チベット 仏教寺院	C・E	金剛窟	15 人	東台の楼觀 谷	中国仏教の空間の前方	? ^{注2)}
4	チベット 仏教寺院	C・E	普樂院	22 人	金剛窟の西	中国仏教の空間の右側	寺院より 独立され た大門
5	チベット	C・E	羅睺寺	297 人	塔院寺の東	中国仏教の空間の後方	?

	仏教寺院				北隅		
6	チベット 仏教寺院	C・E	壽寧寺	12人	中台から南 30里	座落院が2カ所あり、一 つは中国仏教の空間の 前方にあり、もう一つは 中国仏教の空間の内、東 北隅	2垂花門
7	チベット 仏教寺院	C・E	玉花池	52人	中台の南麓	中国仏教の空間の内、東 北隅	垂花門
8	中国仏教 寺院	C・E	殊像寺	20人	梵仙山の左、 台懐鎮から 数里	中国仏教の空間の東側	垂花門
9	中国仏教 寺院	C・E	大螺頂	20人	靈鷲峰の東	中国仏教の空間の南側	隨牆宮門
10	中国仏教 寺院	C・E・T	顕通寺	108人	靈鷲峰の上	中国仏教の空間の東側	?
11	中国仏教 寺院	C・E・T	塔院寺	20人	靈鷲峰の下	中国仏教の空間の内、東 北隅	垂花門

注1) C = Chinese Buddhist space =中国仏教の空間

T = Tibetan Buddhist space = チベット仏教の空間

E = Emperor Power space =皇帝権力の空間

注2) 「?」は出入り口の門が存在したが、様式は未詳。

第五節 小結

五台山は五台、台外、台懐の3部分で同心円のように構成され、台懐は五台山の地理的な中心のみならず、宗教的な中心であったと言える。数が夥しい中国仏教寺院と比較すると、チベット仏教寺院の数は少なく、特に台懐に集中していた。

中国仏教の空間のみが存在する寺院(C)は五台山に広く分布し、圧倒的なパワーを有したことが示されている。チベット仏教の空間は外来の要素として在来中国仏教寺院に浸透したが、中国仏教の空間とチベット仏教の空間だけが併存する寺院(C・T)はなかったことから、皇帝権力からの影響がなければ、中国仏教の空間とチベット仏教の空間の融合はできなかったと推定される。一方、西巡を介して皇帝権力の空間が多くの中国仏教寺院に導入さ

れ、中国仏教の空間と皇帝権力の空間が併存する寺院 (C・E) が多く現れた。

また、チベット仏教の空間のみが存在する寺院 (T) が建立されなかったため、チベット仏教の空間と皇帝権力の空間のみが併存する寺院 (T・E) もなかった。他方で、チベット仏教の空間は顕通寺、塔院寺、鎮海寺の3寺院のみに限られて定着し、皇帝権力の空間と中国仏教の空間が共存した。中国仏教に比して、チベット仏教と皇帝権力との繋がり強く、五台山の寺院にはチベット仏教と皇帝権力の二つの空間がセットのように導入されたことが特徴である。

なお、皇帝権力の空間については、乾隆年間の寺院には精舎があり、精舎は中国仏教の空間の外に配置された。嘉慶年間の寺院には座落院が設けられ、座落院は中国仏教の空間の内と外の両方で配置されたことがわかる。

では、中国仏教寺院はいかなる経緯でチベット仏教・皇帝権力の空間を受容したのか、寺院内部の三つの空間にはいかなる関係があったのかなどについて、菩薩頂、鎮海寺、塔院寺の3寺院を事例に、以下みていくこととする。

注

- 注 1) Ernst Boerschman、『Lageplane Des Wutai Shan Und Verzeichnisse Seiner Bauanlagen in Der Provinz Shanxi』、Harrassowitz Verlag、2012 年。
- 注 2) 董誥など、『西巡盛典』、全 24 卷、嘉慶 17 年 (1812)、ハーバード大学図書館蔵、巻 9、10。おな、余思奇、藤川昌樹、「西巡盛典」から見る嘉慶 16 年の五台山、『日本建築学会大会学術梗概集』、2017 年 8 月、頁 869-870 を参照。
- 注 3) 老藏丹巴、『清涼山新志』、全 10 卷、清代康熙 40 年 (1701)、巻 2。
- 注 4) 愛新覺羅弘晝 (和碩和親王)、『清涼山小志』、全 1 卷、清代乾隆 11 年 (1746)。
- 注 5) 『欽定清涼山志』、全 22 卷、清代乾隆 50 年 (1785 年)、巻 10、11。
- 注 6) 董誥など、『西巡盛典』、全 24 卷、嘉慶 17 年 (1812)、ハーバード大学図書館蔵、巻 9、10。おな、余思奇、藤川昌樹、「西巡盛典」から見る嘉慶 16 年の五台山、『日本建築学会大会学術梗概集』、2017 年 8 月、頁 869-870 を参照。
- 注 7) 「五台山行宮座落地盤圖」、嘉慶 15 年 (1810)、中国国家図書館蔵。董誥など、『西巡盛典』、全 24 卷、嘉慶 17 年 (1812)、ハーバード大学図書館蔵、巻 15。

図表出典

第一節

- 図 2-1-1 清代山西省政区図。出典：傅林祥、林涓、任玉雪、王衛東、『中国行政区劃通史 清代卷』、復旦大学出版社、2013 年、頁 221 により、筆者作成。
- 図 2-1-2 清代五台縣図。出典：Ernst Boerschman、『Lageplane Des Wutai Shan Und Verzeichnisse Seiner Bauanlagen in Der Provinz Shanxi』、Harrassowitz Verlag、2012 年により、筆者作成。
- 図 2-1-3 五台山空間構成概念図。出典：筆者作成。
- 図 2-1-4 長城嶺遺跡。出典：筆者撮影。
- 図 2-1-5 清代末期台懷寺院分布図。出典：Ernst Boerschman、『Lageplane Des Wutai Shan Und Verzeichnisse Seiner Bauanlagen in Der Provinz Shanxi』、Harrassowitz Verlag、2012 年により、筆者作成。
- 図 2-1-6 清代仁宗の西巡ルート。出典：Ernst Boerschman、『Lageplane Des Wutai Shan Und Verzeichnisse Seiner Bauanlagen in Der Provinz Shanxi』、Harrassowitz Verlag、2012 年により、余思奇、藤川昌樹、「西巡盛典」から見る嘉慶 16 年の五台山、『日本建築学会大会学術梗概集』、2017 年 8 月、頁 869-870 を参考しながら、筆者作成。

第二節

表 2-2-1 五台山の 100 寺院 (康熙 40 年・1701)。出典：老藏丹巴、『清涼山新志』、全 10 卷、清代康熙 40 年 (1701)、巻 2 により、筆者作成。

第三節

図 2-3-1 五台山 38 寺院の分布 (乾隆 11 年・1746)。出典：老藏丹巴、『清涼山新志』、全 10 巻、清代康熙 40 年 (1701)、巻 2。愛新覺羅弘晝 (和碩和親王)、『清涼山小志』、全 1 巻、清代乾隆 11 年 (1746)。『欽定清涼山志』、全 22 巻、清代乾隆 50 年 (1785 年)、巻 10、11。董誥など、『西巡盛典』、全 24 巻、嘉慶 17 年 (1812)、ハーバード大学図書館蔵、巻 15。なお、格龍隆住、「五臺山聖境全圖」、道光 26 年 (1846)、アメリカ議会図書館蔵。五台山風景名勝区規劃組、「五台山風景名勝区現状図」、1983 年。Google Map 航空図を参考しながら、筆者作成。

表 2-3-1 五台山の 38 寺院 (乾隆 11 年・1746)。出典：愛新覺羅弘晝 (和碩和親王)、『清涼山小志』、全 1 巻、清代乾隆 11 年 (1746) により、筆者作成。

図 2-3-2 五台山 56 寺院の分布 (乾隆 50 年・1785)。出典：老藏丹巴、『清涼山新志』、全 10 巻、清代康熙 40 年 (1701)、巻 2。愛新覺羅弘晝 (和碩和親王)、『清涼山小志』、全 1 巻、清代乾隆 11 年 (1746)。『欽定清涼山志』、全 22 巻、清代乾隆 50 年 (1785 年)、巻 10、11。董誥など、『西巡盛典』、全 24 巻、嘉慶 17 年 (1812)、ハーバード大学図書館蔵、巻 15。なお、格龍隆住、「五臺山聖境全圖」、道光 26 年 (1846)、アメリカ議会図書館蔵。五台山風景名勝区規劃組、「五台山風景名勝区現状図」、1983 年。Google Map 航空図を参考しながら、筆者作成。

表 2-3-2 五台山の 56 寺院 (乾隆 50 年・1785)。出典：『欽定清涼山志』、全 22 巻、清代乾隆 50 年 (1785 年)、巻 10、11 により、筆者作成。

第四節

図 2-4-1 五台山 11 寺院の分布 (嘉慶 17 年・1812)。出典：老藏丹巴、『清涼山新志』、全 10 巻、清代康熙 40 年 (1701)、巻 2。愛新覺羅弘晝 (和碩和親王)、『清涼山小志』、全 1 巻、清代乾隆 11 年 (1746)。『欽定清涼山志』、全 22 巻、清代乾隆 50 年 (1785 年)、巻 10、11。董誥など、『西巡盛典』、全 24 巻、嘉慶 17 年 (1812)、ハーバード大学図書館蔵、巻 15。なお、格龍隆住、「五臺山聖境全圖」、道光 26 年 (1846)、アメリカ議会図書館蔵。五

台山風景名勝区規劃組、「五台山風景名勝区現状図」、1983年。Google Map 航空図を参考しながら、筆者作成。

表 2-4-1 五台山の 11 寺院（嘉慶 17 年・1812）。出典：「五台山行宮座落地盤圖」、嘉慶 15 年（1810）、中国国家図書館蔵。董誥など、『西巡盛典』、全 24 卷、嘉慶 17 年（1812）、ハーバード大学図書館蔵、巻 9、10、15。おな、余思奇、藤川昌樹、「「西巡盛典」から見る嘉慶 16 年の五台山」、『日本建築学会大会学術梗概集』、2017 年 8 月、頁 869-870 により、筆者作成。

第三章 菩薩頂の空間構成とその変容

第一節 菩薩頂の現状

菩薩頂は五台山の中心地区である台懷に位置する。清水河に東面し、靈鷲峰の頂上に立地する（図 3-1-1）。歴史上文殊寺、大文殊院、真容院などとも呼称される。中国仏教寺院であった。後述のように、現状ではこの菩薩頂は四つの性格の異なる空間から構成されている。そのうち中院、東院、西院については、清代に遡ることが明らかである。

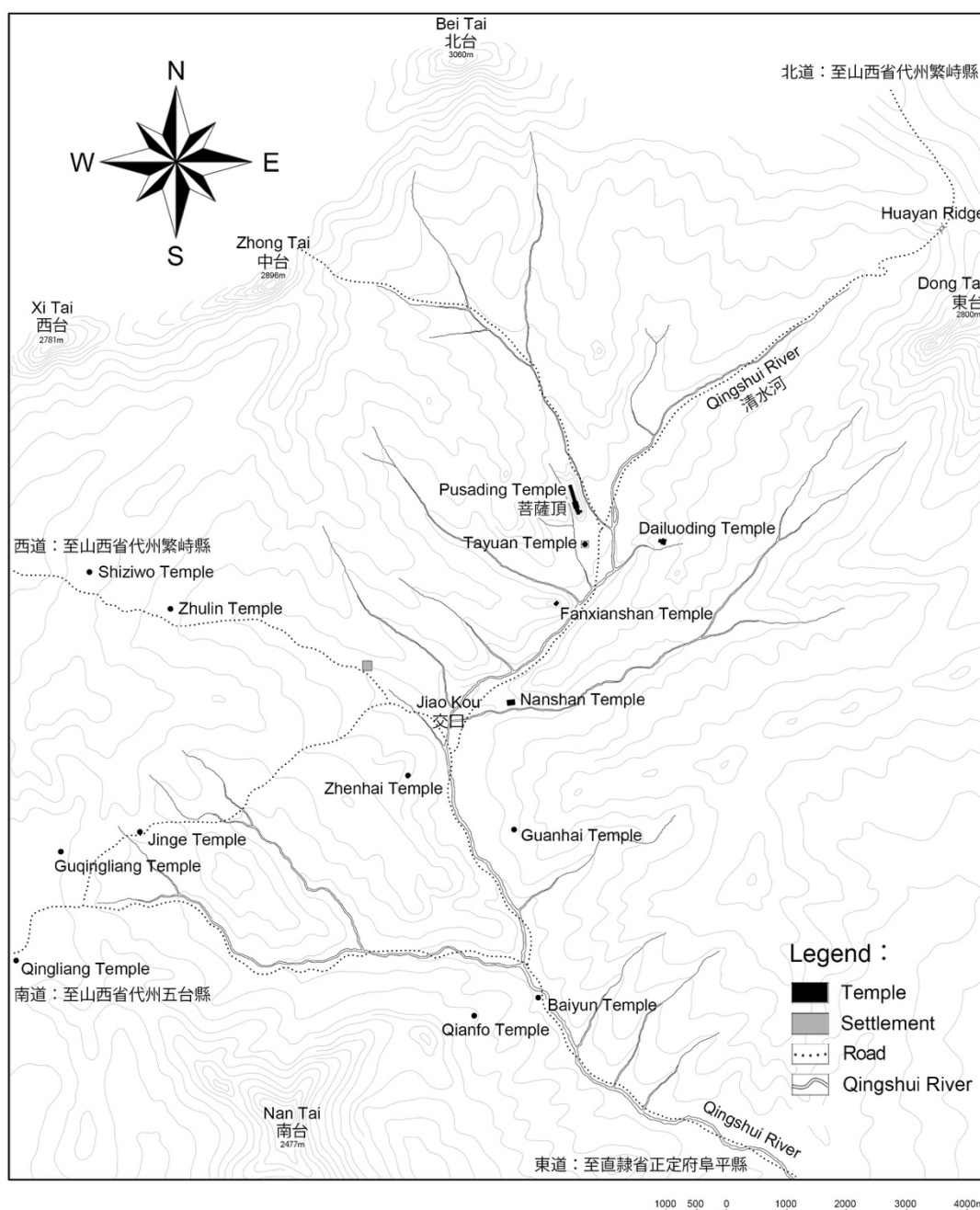


図 3-1-1 菩薩頂の位置

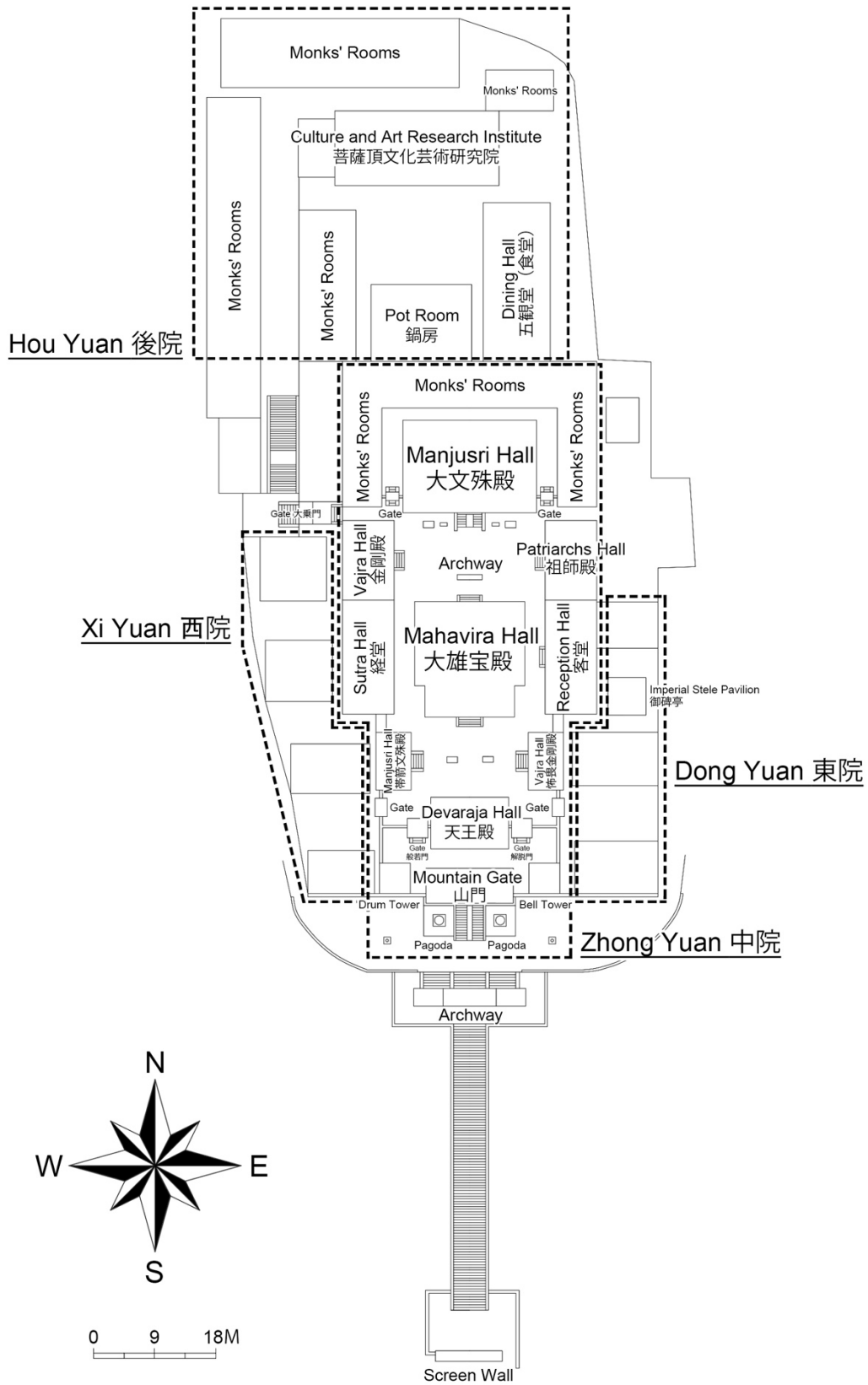


图 3-1-2 菩薩頂配置图 (2018 年 8 月の調査により、筆者作成)



図 3-1-3 菩薩頂チベット式の塔
(2018年8月、筆者撮影)



図 3-1-4 菩薩頂銅塔
(2018年8月、筆者撮影)

菩薩頂は五台山の「漢藏仏教の首府」(中国仏教・チベット仏教の首府)とも呼称され、現在は前後に連なる中院、東院、西院、後院の四つの部分で構成され、9,100平方メートルの寺域を有する(図3-1-2)^{注1)}。門前には影壁、3間の牌楼、および2基のチベット式の塔、2基の銅塔が設けられている。塔は山門の左右にそれぞれ配置されている。チベット式の塔は須弥壇様式の塔座、塔身、相輪で構成され、創建年代は明らかではないが、近年修復された(図3-1-3)。銅塔は新築されたものであり、チベット式の塔と宝篋印塔とを折衷した様式のようにみられる(図3-1-4)。

中院はその中心軸上に歇山3間の山門、歇山3間の天王殿、歇山5間の大雄宝殿、廡殿5間の大文殊殿が配列され(図3-1-5)(図3-1-6)、その他に歇山2階建ての鼓楼・鐘楼、硬山3間の帶箭文殊殿・怖畏金剛殿、硬山5間の経堂・客堂、硬山3間の金剛殿・祖師殿が左右対称に配置されている(図3-1-7)。これらの殿堂の屋根は黄色琉璃瓦であり、特に大文殊殿の廡殿の屋根は高い格式が示されている。大雄宝殿と大文殊殿との間の中庭に石造の牌楼が設けられている。

中院の怖畏金剛殿の隣にある門を潜ると、東院に到達する。東院には南北に並ぶ四つの建物があり、それぞれの前後の2進の院子を構成している。第一進の院子の南側にある建物は



図 3-1-5 大雄宝殿
(2016年3月、筆者撮影)



図 3-1-6 大文殊殿
(2016年3月、筆者撮影)



図 3-1-7 怖畏金剛殿
(2018年8月、筆者撮影)



図 3-1-8 碑院の入り口
(2018年8月、筆者撮影)

硬山4間で、青色琉璃瓦で葺かれている。その北側にある建物は硬山3間で、真ん中の一間は通路である(図3-1-8)。この通路の半ばに1基の石碑が立てられ、通路を通ると、第二進の院子に達する。この建物の正面には「御碑院」という額が掛かれているため、第二進の院子を碑院と呼ぶこととする。碑院の中庭に宝形造(四角攢尖)の碑亭があり、碑亭に納められ、中国語、モンゴル語、チベット語、満洲語の4類の言語で書かれた乾隆皇帝の碑である(図3-1-9)^{注2)}。碑亭の北側にある建物は硬山3間である。碑院を構成する三つの建物の屋根は黄色琉璃瓦で葺かれている。

中院に戻り、帯箭文殊殿の隣にある門を潜ると、西院に到達する。西院には雁行しながら並ぶ硬山の四つの建物があり、南の二つの3間の建物は一つの院子を構成し、院子の南側の建物は青色琉璃瓦で葺かれている。北にある二つの建物には立ち入ることが禁じられているが、屋根は黄色琉璃瓦葺きと確認される。西院は清代康熙・乾隆年間に皇帝を迎えるために建設された「行院」(後述の座落院)であったという^{注3)}。

中院の大文殊殿の背後が後院であり、僧房、五観堂(食堂)、鍋房などの施設で構成されている。現在「菩薩頂文化芸術研究院」という組織が後院を利用している。



図 3-1-9 碑亭と石碑 (2018 年 8 月、筆者撮影)

五台山にある他の寺院が「紅牆灰瓦」(赤色の壁、灰色の瓦)で造られているのとは異なり、菩薩頂は靈鷲峰の頂上に立地され、「紅牆黃瓦」の建築意匠でチベットのラサにあるポタラ宮と酷似するという。このため、菩薩頂は「喇嘛宮」(ラマ宮)とも呼称されている^{注4)}。

以上のような菩薩頂は如何なる経緯で生まれたのだろうか。特に中院、東院、西院に着目して清代から順を追って検討する。

第二節 順治年間の菩薩頂

清代はじめの順治年間、世祖(第3代皇帝、愛新覺羅福臨)は自ら五台山は訪問しなかったが、五台山仏教の発展に力を入れた。五台山鳳林谷に立てられた「勅封清涼老人碑記」(康熙27年・1688)には以下の内容が記述されている^{注5)}。

(前略)。太喇嘛清涼老人、法諱阿王老藏、道俗姓賈氏、金臺之西巖人也。甫十齡、父母送崇國寺為驅鳥、十八剃度。(中略)。洎順治己亥、老人果以兼統番漢膺選、乘驛上主五臺、總理番漢事務、食俸臺邑。(後略)。

阿王老藏は10歳の時に北京のチベット仏教寺院である崇國寺に入り、18歳の時に髪をそって正式の僧侶になった。彼は漢民族の出身で、「清涼老人」と呼称されていた。順治16年

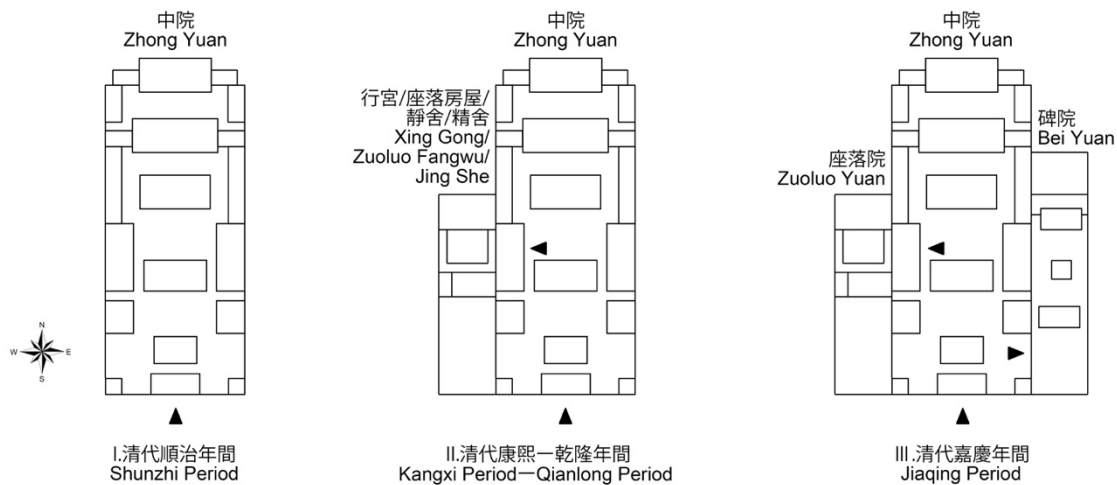


図 3-2-1 菩薩頂伽藍変容模式図

(己亥・1659) 阿王老藏は世祖によって選定され、五台山へ赴任した。彼は「總理番漢事務」(チベット・中国仏教の事務を総理する)の権力が世祖から与えられた。このため、阿王老藏は五台山の主宰者のような地位を有した。

五台山にチベット仏教と中国仏教の事務を総理する大ラマ(大喇嘛)を置く制度は世祖によって確立された。阿王老藏は1代目の大ラマであり、菩薩頂の住持として五台山を管理していた。順治16年から民国26年(1937)までの間に計21代の大ラマが菩薩頂へ赴任した。そのうち1代目から5代目までの大ラマは朝廷により、6代目以降の大ラマはチベットのダライ・ラマによって任命され、任期は6年間であった^{注6)}。このように、順治年間に皇帝の権力によってチベット仏教の勢力が五台山に導入され、菩薩頂はチベット仏教寺院として五台山の他の寺院より高い地位を有するようになったと考えられる(図3-2-1 I)。

第三節 康熙年間の菩薩頂

康熙年間に入ると、聖祖は康熙22年2月、同22年9月、同37年2月、同41年2月、同49年2月の計5回西巡をおこない、菩薩頂を4回訪問したことが確認できる^{注7)}。菩薩頂が聖祖に重視されたことがわかる。この時の菩薩頂3代目の大ラマ^{注8)}老藏丹巴によって書かれた『清涼山新志』(康熙40年・1701)の中に以下の記述がある。

大文殊寺、即菩薩頂真容院。(中略)。康熙癸亥、聖駕臨幸駐蹕、灑宸翰以光梵刹、造旌幢以煥法筵、重建五頂殿宇、改覆本寺大殿琉璃黃瓦。未幾、瓦有滲壞、於辛未春、差官擇匠、陶製新瓦、遍寺皆易黃色琉璃、以示隆重。(後略)。

康熙22年(癸亥)聖祖が菩薩頂を訪問したことをきっかけに、五台山の五つの峰の頂上にある殿宇が再建(重建)されたほか、菩薩頂の大殿の瓦が黄色琉璃瓦に葺き替えられた。と

ころが、屋根の工事が終わって間もなく、瓦は雨漏りで壊れてしまった。そこで、康熙 30 年(辛未・1691)の春に聖祖は官人を派遣して匠人を選択させ、新しい陶製の瓦を製作させた。こうして、菩薩頂寺内にある全部の建築の屋根は新たに黄色琉璃瓦に交換された。

また、鳳林谷に立つ「五臺山菩薩頂大喇嘛老藏丹貝塔銘」(康熙 24 年・1685) という碑文には「甲子、復以陳請菩薩大殿改覆碧琉璃瓦」とある^{注9)}。これによると、2 代目の大ラマの老藏丹貝は漢民族の出身で、元北京崇國寺の僧侶であったが、康熙 23 年(甲子・1684)に菩薩頂大殿の瓦を、青(碧)色琉璃瓦に改築したいという願いを皇帝に出したことがわかる。この願いが聖祖に許可されたか否か、史料上確認できない。ただし、前述の『清涼山新志』によれば 7 年後の康熙 30 年の菩薩頂の建築の屋根は黄色琉璃瓦で覆われていたようである。

一方、「五臺山清修禪師老藏丹巴碑銘」(康熙 45 年・1706) も同じ鳳林谷に残っている。この碑文には以下の内容が記述されている^{注10)}。

山西五臺山、舊係文殊菩薩道場。峰巒高峻、寺宇壯麗傑秀、富有名勝、為國家祝釐寶地、華夷内外、無不瞻仰。住持僧設番漢大喇嘛一員、下有格隆、班弟三百餘人、皆妙選熏修上士、以供厥職、領其任者、蓋綦難矣。清修禪師者、俗姓姜氏、山東登州萊陽人也。幼時出家崇國寺、既而隸大喇嘛老藏丹貝堅參師座下、食俸五臺、(中略)。又三十六年、遣官就山敕書一道、清修禪師銀印一顆、仍提督五臺山番漢大喇嘛之職。計師住持二十二年。皇上凡四幸山中、施帑金八千餘兩、禪師無豪釐私、盡以供佛。其改修之寺、曰顯通、曰廣宗、曰栖賢、曰白雲、曰碧山、曰殊像、曰湧泉。其丹牖者、曰羅睺、曰台麓。又造佛三尊、滲金菩薩二尊、購經一藏、外製幡幢、供器至夥。(後略)。

寺内には 300 余人のチベット仏教僧(大喇嘛、格隆、班弟)が暮らしていたことがわかるが、3 代目の大ラマの老藏丹巴は山東省の漢民族の出身、元北京崇國寺の僧侶で、2 代目の大ラマの老藏丹貝に師事した。康熙 36 年(1699)老藏丹巴は朝廷から「清修禪師」の銀の印章を受け、師の老藏丹貝をついで「五臺山番漢大喇嘛」の職を務めた。この僧は計 22 年間、菩薩頂の住持を務めた。

康熙 45 年までに聖祖は 4 回五台山を訪問しており、8,000 両余の金が下賜された。老藏丹巴はこれを財源に、顯通寺、廣宗寺、栖賢寺、白雲寺、碧山寺、殊像寺、湧泉寺を改修し、羅睺寺、台麓寺を赤色(丹牖)に塗り、仏像を鑄造し、また經典も購入したことがわかる。

康熙年間には、五台山の他の寺院と異なり、菩薩頂は皇帝の権力によって宮殿と同様の様式を持つような寺院に変わり、五台山の中心寺院に発展したと考えられる。一方、皇帝に委任された菩薩頂住持の大ラマは、諸寺院の整備など、五台山仏教の発展を促進したことがわかる。更に、後述のように、康熙年間の菩薩頂の中には聖祖のために建設された「斗室」が存在した(図 3-2-1 II)。

第四節 乾隆年間の菩薩頂

乾隆年間に高宗は乾隆 11 年 9 月、同 15 年 2 月、同 26 年 2 月、46 年 3 月、51 年 3 月、57 年 3 月の計 6 回西巡を行ない、菩薩頂を訪問した^{注 11)}。和碩和親王の弘晝が自ら編成した『清涼山小志』（乾隆 11 年・1746）には菩薩頂につき次の内容が記述されている^{注 12)}。

菩薩頂。地居五臺之中。寺冠百廟之首。（中略）。特揀官督理。崇起臺基。百有八層。牌樓丹刻。瓦獸琉璃。都剛殿內。幢幡縹緲。文殊閣下。金赤輝煌。金刊八寶。供於佛前。瑤瑯爐瓶。獻於左右。殿宇前後四層。喇嘛百餘人。山門上懸皇上御書匾曰十刹圓光。都剛殿外。石碑樓上。刻聖祖皇帝御書匾曰五臺勝境。（中略）。殿後門外上懸聖祖皇帝御書匾曰五峯化宇。行宮內懸聖祖皇帝御書匾曰斗室。皇上今復錫行宮匾曰人天尊勝。（中略）。丙寅季秋。隨駕巡省至此。信宿三朝。（後略）。

この史料によると、乾隆 11 年の秋（丙寅季秋）に親王の弘晝は五台山で 3 日滞在し、菩薩頂を訪問した。菩薩頂は五台山の中央に位置し、「百廟之首」の地位を有したという。寺院は 3 進の院子（殿宇前後四層）で構成され、門前に牌樓があり、寺内には都剛殿、文殊閣という建物が存在した。この時寺内で暮らしていたチベット仏教僧（喇嘛）は 100 人余であった。山門と殿後門の上に高宗の書いた「十刹圓光」「五峯化宇」の額が掛けられ、石造の牌樓には聖祖の書いた「五臺勝境」の文字が刻まれていた。

一方、この時の寺内には「行宮」が存在し、行宮の中に聖祖から下賜された「斗室」の額が掛けられていたとも記されている。「斗室」は小さな個室の意味であることから、行宮の規模は小さかったと考えたい。この行宮は清代皇帝の中で初めて五台山を訪問した聖祖のために建設されたものと推定される。なお、この行宮には高宗も「人天尊勝」の額を下賜したという。

降って乾隆 26 年 2 月の巡幸直前の乾隆 25 年（1760）12 月 15 日に、山西省巡撫（省の長官）の鄂弼は皇帝の許可を得ないまま、菩薩頂に「座落房屋」を新築し、後に「山西巡撫鄂弼為在五臺山菩薩頂修建座落房屋事奏折」として高宗に報告された^{注 13)}。

山西省巡撫臣鄂弼謹奏、為奏明事。

恭照明春皇上恭奉皇太后鑾輿臨幸五臺山拈香、一應予備事宜、臣凜遵面奉諭旨、務從儉約、不事華侈。
第臣恭查皇上兩次臨幸五臺山、均在菩薩頂駐蹕營盤、未經啓建行宮。明歲欣逢皇太后七旬大慶、中外臣民無不趨赴臺山、群上嵩呼之祝。臣擬于菩薩頂營盤地面啓建座落房屋、以副臣民瞻仰微忱。因查五臺山各寺廟內、均有貯備歲修木石磚瓦暨拆存舊料。又大同府屬懷仁縣城內、有舊日都司衙署久已廢棄、木料甚巨、頗堪削用、遂擇節料估、酌量建蓋、屋宇甚屬無多、裝修概從質樸、于十月初間擇吉興工。仰賴皇上洪福、今歲冬令臺山氣候異常暄暖、工匠踴躍赴工、未及兩月建造完備、現在油飾裝修。臣因

臺山冬令冰堅氣肅、建造工程殊難預定、且所建屋宇無多、本非行宮體式、是以未敢預期奏明。茲仰荷聖主福庇、山靈呵護、竟得依期告成。

謹將所建屋宇樣盤恭呈御覽、並據實奏明、伏乞皇上聖鑒。謹奏。

朱批：汝若預先奏明、必不令汝建造。今既事成、知道了。其一切予備、不可過費。

乾隆 11 年・15 年の 2 回の巡幸には、高宗は菩薩頂に滞在したが、この時は寺内に行宮は新築されなかった。次の乾隆 26 年の皇太后の 70 歳の誕生日を祝福するために、鄂弼は菩薩頂の中に「座落房屋」を新築した。建設資材については、五台山の各寺院に毎年の修繕工事のために貯蔵されていた木、石、磚、瓦などの旧材（舊料）、および山西省大同府懷仁縣城にある廃棄された役所（都司衙署）の木材が再利用されたという。建築工事は乾隆 25 年 10 月初旬から 12 月半ばまで 2 ヶ月弱をかけて完成し、12 月 15 日の頃は内装工事を進めていたという。鄂弼は新築された建物が少なく、しかもこれらの建築は標準的な行宮の様式ではなかったと強調した。責任を追求するかわりに、高宗は菩薩頂にある座落房屋の建設を黙認した（「今既事成、知道了」）。

乾隆 26 年 2 月の巡幸の際に高宗は「文殊寺靜舍少憩」という詩文を書いた^{注 14}。この詩文によると、高宗は菩薩頂の「靜舍」で少し休憩したといい、この靜舍には、前述の聖祖から下賜された「斗室」の額が掛かっていたという。乾隆 46 年 3 月の巡幸の際にも、高宗は「文殊寺靜舍作」という詩文を書いた。この詩文には「精舍花宮側、春朝憩偶然、三間仍斗室二字乃皇祖御書題額也」とある^{注 15}。これによると、「斗室」の額が掛けられた建物は 3 間の規模であったことがわかる。つまり、康熙年間の菩薩頂に皇帝のために建設された 3 間の斗室は引き続き寺内に存在し、乾隆 25 年の座落房屋の新築工事に際しても斗室は取り壊されなかったことになる（図 3-2-1 II）。

さらに降って、乾隆 50 年 (1785) に編纂された『欽定清涼山志』は前代の山志と比べると、菩薩頂の伽藍配置をやや詳しく記録している^{注 16}。

大文殊寺、在中臺靈鷲峰頂、亦曰菩薩頂真容院。（中略）。山門三楹、左右鐘鼓樓各一、坊一。天王殿三楹、配殿六楹。都綱殿三楹、配廡十楹。文殊殿三楹、配廡六楹。藏經樓五楹。前後順山樓一百二楹、禪房、僧舍一百八十楹。歷代遞加修葺。（中略）。文殊殿額曰五臺勝境、其西精舍額曰斗室。（中略）。臺懷行宮在菩薩頂之前三里、乾隆二十五年改建。（後略）。

この時の菩薩頂は 3 間の山門、牌樓（坊）、3 間の天王殿、3 間の都綱殿、3 間の文殊殿、5 間の藏經樓で構成され、鐘・鼓樓、配殿、配廡、および 180 間の僧房などの建物が左右に配置されていた。このうち都綱殿は建物の配置の順から、後述の大雄宝殿であると推定される。注意すべき点は文殊殿の西に「精舍」という建物があり、「斗室」の額が掛けられてい

たとあることである。以上のことから、前述の行宮、座落房屋、静舎、および精舎は寺院に設けられ、皇帝のためのほぼ同じ機能を持つ施設であったことがわかる。一方、乾隆 25 年には菩薩頂の前 3 里の所に、皇帝のための正式な行宮が改築（改建）され、この行宮は「臺懷行宮」と呼称されていた。

乾隆 51・57 年の巡幸の際に、高宗は「至靈鷲峰文殊寺即事成句」（丙午、乾隆 51 年）、「靈鷲峰文殊寺瞻禮偶效禪語」（壬子、乾隆 57 年）という詩文を書いた^{注 17)}。これらの詩文は中国語で書かれたが、のちにモンゴル語、チベット語、満州語を加え、四面に詩文の刻まれた石碑として、菩薩頂に立てられた^{注 18)}。2 枚の石碑は現在菩薩頂の碑院の中庭にある碑亭、および碑院への通路の中央に立っている。また、同年に高宗が書いた詩文の「文殊寺静舎疊辛丑韻」、および乾隆 57 年の「文殊寺静舎作」によると、乾隆末年になっても菩薩頂には 3 間の静舎が引き続き存在したことがわかる^{注 19)}。

前節で確認した通り、康熙年間の西巡によって皇帝の空間が菩薩頂に導入された。この空間は乾隆年間に至っても寺院の西側に存在し続けたことがわかる。また、菩薩頂の門前には新たに「臺懷行宮」が建設された。寺内に備えた皇帝のための施設と比べると、この門前の行宮の規模は大きく、一定の独立性があると考えられよう。

第五節 嘉慶年間の菩薩頂

嘉慶 16 年（1811）3 月に仁宗は西巡を行い、菩薩頂を訪問した。^{注 20)} この時菩薩頂には 560 名のチベット仏教僧がおり、康熙・乾隆年間より人数が増加したことがわかる^{注 21)}。巡幸の前に五台山では行宮、尖営、寺院が修繕された。前年の嘉慶 15 年 7 月山西省巡撫（省の長官）の衡齡は修繕された施設を描いた「五台山行宮座落地盤図」を作成して仁宗に報告した^{注 22)}。その中の一枚に「菩薩頂地盤図」（以下「地盤図」）があり、影壁、牌楼を除く寺院の全体を知ることができる（図 3-5-1）。一方、五台山の巡幸翌年の嘉慶 17 年に編纂された『西巡盛典』には、嘉慶 16 年の仁宗の西巡が記録された^{注 23)}。『西巡盛典』巻 15 には 1 枚の「菩薩頂図」（以下「盛典図」）が収録されている（図 3-5-2）。地盤図と盛典図の 2 枚の図に表現されている伽藍配置や、建物の規模、屋根形、および建具などの細部を視察すると、いくらかの相違があることもわかる。

まず両図により、嘉慶年間の菩薩頂の伽藍配置には 3 間の山門から 5 間の藏経楼までの明確な中心軸がある。両図とも 3 間の天王殿、3 間の大雄宝殿、3 間の文殊殿、および倒座偏厦が中心軸に配置され、配殿、順山圍房、圍房、配楼などの建物が左右対称に配列されている。なお、両図によると、菩薩頂にはチベット式の仏塔がない。

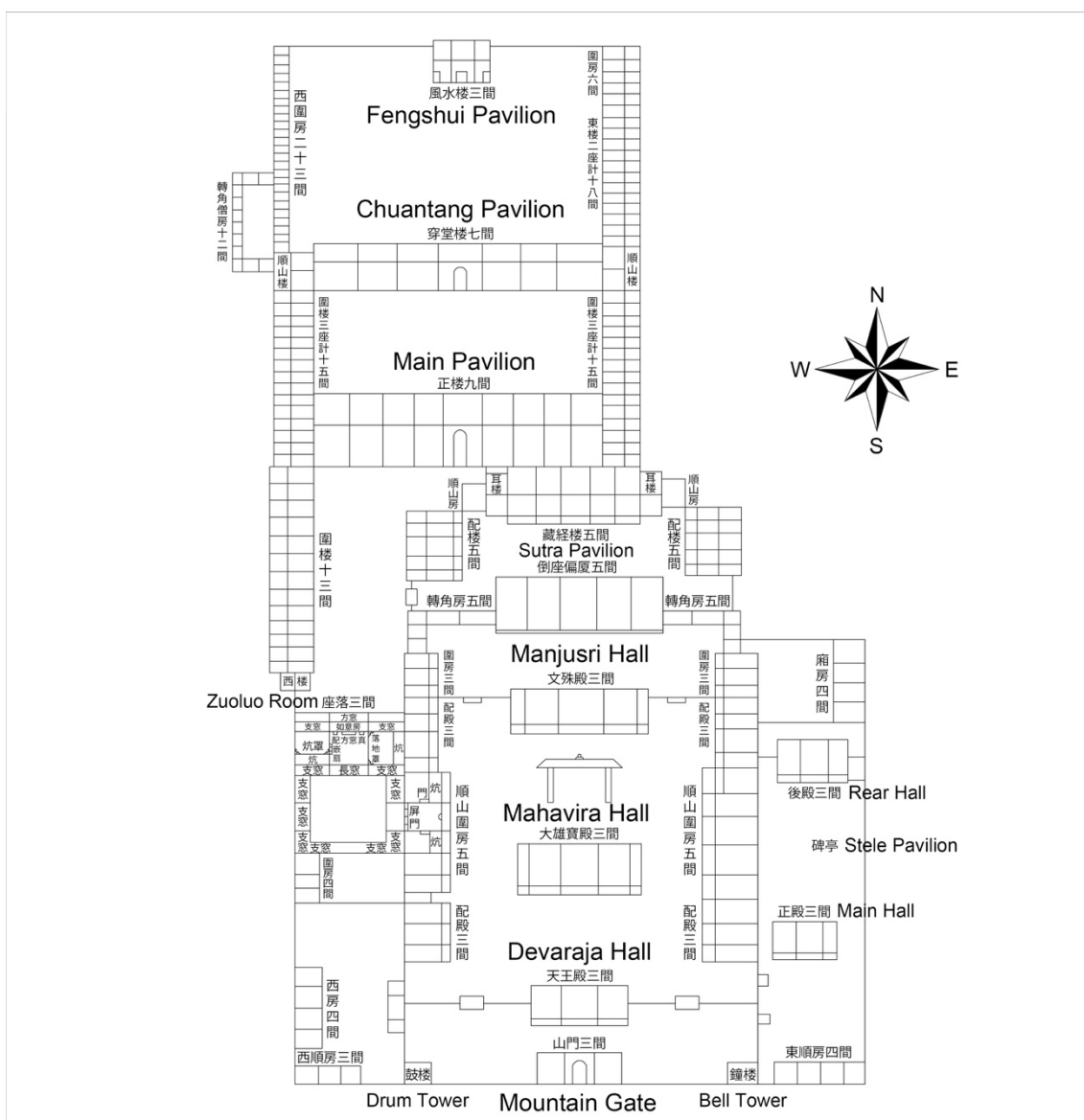


図 3-5-1 菩薩頂地盤圖（嘉慶 15 年・1810、筆者写）

一方で、盛典図には藏経楼、配楼、および所在したはずの院子が表現されず、しかも両図に描かれているこれらの建物の規模も一致しない。この一面の東にはもう一つの院子があり、東順房、正殿、後殿、および廂房で囲まれ、正殿、後殿は 3 間の規模であった（表 3-5-1）。

また、盛典図には碑亭も描かれていない。地盤図には、正殿と後殿の間の院子に「碑亭」とあり、これが乾隆 51 年と嘉慶 16 年の間に高宗の石碑を収納する目的で新築された建物であったと推定される。したがって、この院子を「碑院」と名付けることができるだろう。なお、碑院には独立の門がないので、院子出入りのためには、鐘楼と配殿（東側）との間にある二つの門を利用することになる。このことは、碑院が寺院に付属する性格を持つことを

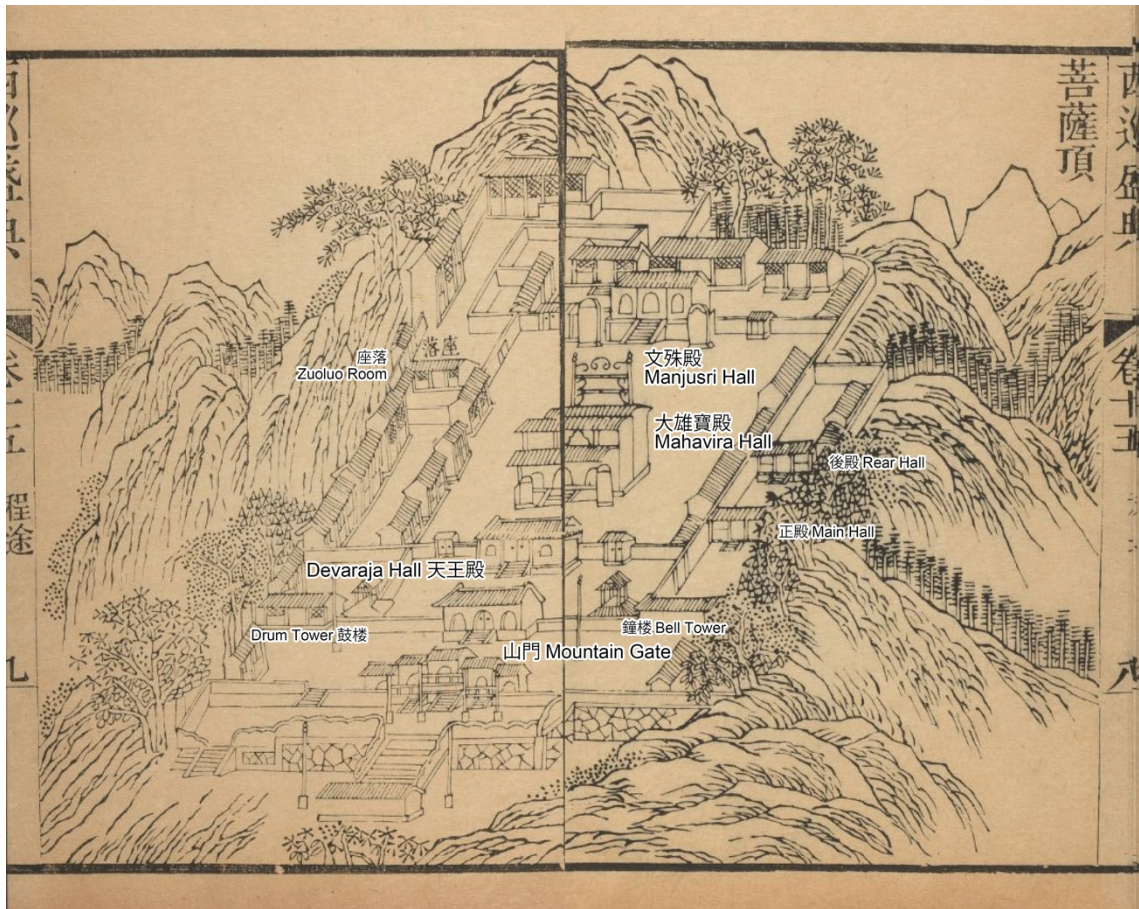


図 3-5-2 菩薩頂図（嘉慶 17 年・1812）

示していると考えられる。

両図とも大雄宝殿の西にある順山圍房に設けられる屏門を通ると、西の院子に入る。盛典図にはこの院子の上に「座落」と書いてあるので、座落院と名付けるべきものである。この座落院（現西院）は3間の座落、回廊、圍房、西房、3間の西順房で構成されている。この座落院は仁宗の巡幸のために、寺内に備えられた施設であろう。座落院は前述の精舎または斗室であったと考えられる。座落院は独立の門を持たず、東の順山圍房に設けられる屏門が座落院の入り口として使われていたようである。つまり、座落院はその意味で独立性が弱く、寺院に付属する空間であったと言える。

一方、両図にはともに柱上に組物が描かれていない。しかし、建具をみると、盛典図の山門、天王殿、大雄宝殿、文殊殿の門、窓にはアーチが施されている。中国式の建築にアーチが広く用いられるのは明代半ば以降の時期とされているので、これは中国式建築の伝統によるものと考えられる^{注25)}。また、配殿、座落などの建物には菱形模様の窓が施され、寺内に設けられていた門は両開きの板扉であったように見える。盛典図に表現されている菱形模様の窓、板扉などの建具は古来の中国式であると判断される^{注26)}。

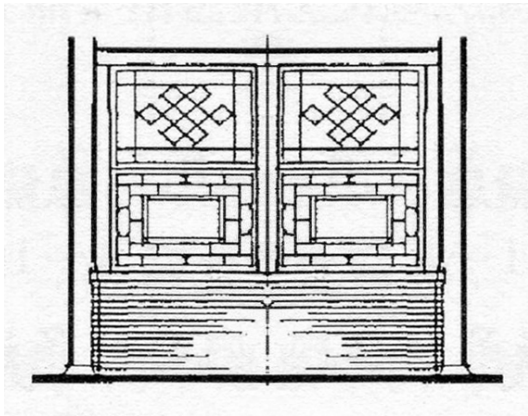


図 3-5-3 支摘窓

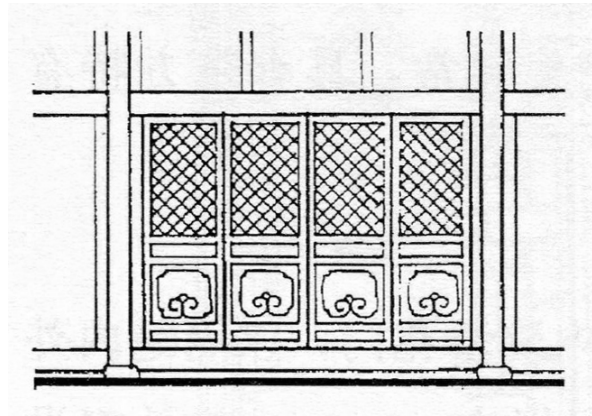


図 3-5-4 榻扇

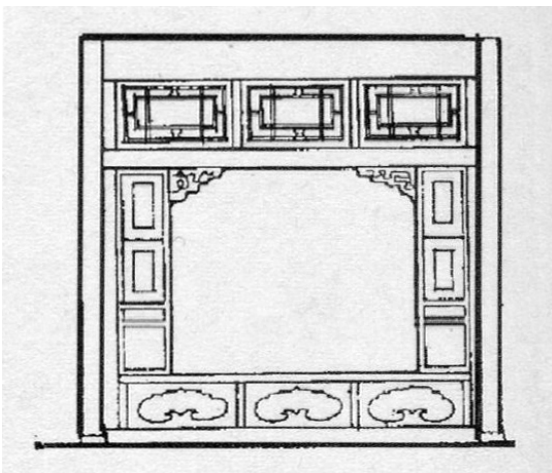


図 3-5-5 炕罩

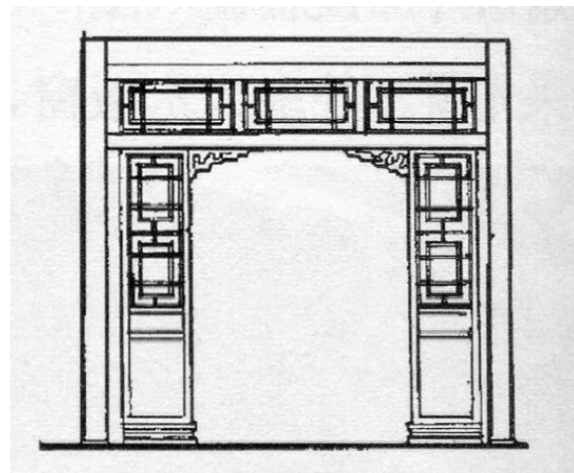


図 3-5-6 落地罩

地盤図には座落院に施されていた室外の建具（外檐裝修）と室内の室礼（内檐裝修）の様式が詳しく記述されている。これによると、座落には支摘窓（原図に「支窓」）、榻扇（原図に「長窓」）が設けられていたことがわかる。支摘窓は上下の二枚の窓で構成され、上の窓を支えたり（支起）、下の窓を取り外したり（摘下）することができるものである（図 3-5-3）。この窓は北京、華北、および西北地区の民家に広く使用されている。また榻扇は門と窓を一体化した仕組みで、4～8 枚（扇）の扉で構成され、建物の入り口の門として中国全土で用いられている（図 3-5-4）^{注 27)}。

室内の明間（または当心間。三間の建物の中央の間）の北壁には「真（門）」「配（門）」^{注 28)}「方窓」と記されている。真門は本当の門、配門は仮の門、方窓は窓が付いた間仕切りであり^{注 29)}、配門などの飾りが配されていたことがわかる。また、次間（明間と隣接する両脇の部屋）には暖房装置の炕が設けられていた。西次間の炕は南側の支摘窓に沿って設置され、炕の縁に炕罩（または床罩）が設けられていた（図 3-5-5）。東次間の炕は妻壁（山牆）に沿って置かれた。罩は柱の間または梁の下に裝飾され、採光、換気、裝飾などを目的とする間仕切りで

ある（図 3-5-6）。落地罩とは開放的な間仕切りであるが、嵌扇は次間と明間とを分隔している。

一方、嵌扇は室内に設けられる榻扇で、4枚の扉で構成されるが、中央の2枚しか開けられない。装飾性の高い罩に対して、嵌扇は空間を完全に分隔する間仕切りである。このため、嵌扇の奥側にある部屋は私的な性格が強く、この空間は皇帝の寝室であったと推定される。以上のような室礼は京畿地区の民家と宮殿に多用されていたものであった^{注30)}。つまり、座落院は臨時的に設けられるものではなく、皇帝のために工夫を凝らした施設であったと考えたい。

嘉慶年間の菩薩頂は中国式伽藍配置、皇帝のための座落院、皇帝のための碑院の三つの性格が異なる空間で構成されていた。中国式的伽藍の東西に皇帝権力の空間が配置されたことが菩薩頂伽藍配置の特徴であると言える（図 3-5-1）。一方、菩薩頂すべての建築には、中国式の屋根が造られ、建具・室礼や、寺院全体の建物の配置も中国式だったことがわかる。

表 3-5-1 菩薩頂の屋根形と建築の規模

建物	嘉慶 15 年・1810	嘉慶 17 年・1812 年	2018 年 8 月
	菩薩頂地盤図	「菩薩頂図」	菩薩頂配置図
影壁	-	硬山	硬山
牌楼	-	3 間	3 間
山門	3 間	硬山、3 間	歇山、3 間
天王殿	3 間	歇山、3 間	歇山、3 間
大雄宝殿	3 間	3 間	歇山、5 間
石牌楼	?	1 間	1 間
文殊殿	3 間	硬山、3 間	廡殿、5 間
倒座偏厦	5 間	硬山、3 間	-
藏経楼	5 間	-	-
鐘楼	?	歇山、2 階建	歇山、2 階建
鼓楼	?	歇山、2 階建	歇山、2 階建
配殿（東側）	3 間	硬山、2 間	硬山、3 間
順山圍房（東側）	5 間	硬山、4 間	硬山、5 間
配殿（東側）	3 間	硬山、2 間	硬山、3 間
圍房（東側）	3 間	硬山、2 間	-
轉角房（東側）	5 間	硬山、3 間	-

配楼（東側）	5間	-	-
順山房（東側）	1間	-	-
耳楼（東側）	1間	-	-
配殿（西側）	3間	歇山、2階建	硬山、3間
順山圍房（西側）	5間	歇山、2階建	硬山、5間
配殿（西側）	3間	硬山、2間	硬山、3間
圍房（西側）	3間	硬山、4間	-
轉角房（西側）	5間	硬山、2間	-
配楼（西側）	5間	-	-
順山房（東側）	1間	-	-
耳楼（東側）	1間	-	-
東順房	4間	?	硬山、4間
正殿	3間	硬山、3間	硬山、3間
碑亭	?	-	宝形造（四角攢尖）
後殿	3間	硬山、3間	硬山、3間
廂房	4間	硬山	-
西順山房	3間	硬山、3間	硬山、3間
西房	4間	硬山、2間	-
圍房	4間	硬山、8間	-
座落	3間	硬山、3間	?

注)「？」は建物が存在したが、屋根形と建築の規模は不明。「-」は建物がない。

第六節 小結

順治年間に皇帝権力の影響は菩薩頂の住持の任命を介して寺院に影響を与え、この任命によって中国仏教寺院であった菩薩頂はチベット寺院に変わった。康熙・乾隆年間に西巡を介して皇帝権力の空間が寺院に定着した。嘉慶年間になると、菩薩頂は中国式伽藍の中院をはさんで、東西に皇帝のための座落院と碑院、三つの空間が並ぶような構成を有するに至った。

菩薩頂は五台山の中心寺院の性格を持ち、最高の格式を有するチベット仏教寺院であったが、寺院内部にはチベット仏教の空間がなかった。その原因について、まず菩薩頂は小さい山の靈鷲峰の頂上に位置するので、敷地は大きくなかったことが考えられる。このため、

敷地規模に限定され、寺院の中に塔院寺のような巨大な仏塔（第五章）を建立するのは難しかったと推定される。その代わりに、寺内に鎮海寺霊塔のような小さな仏塔（第四章）が建立される可能性はあったであろう。しかし、康熙・乾隆・嘉慶の三つの時代に菩薩頂の寺内・門前には仏塔の存在は史料で確認できない。順治年間に皇帝により住持が任命されたことによって、菩薩頂はチベット仏教寺院に変わったほか、五台山と朝廷、チベット仏教と皇帝との繋がり の拠点にもなった。この時期に皇帝権力の影響はハード面ではなく、ソフト面で菩薩頂に導入されたと言える。

降って、康熙・乾隆・嘉慶年間になると、政治、経済、軍事、外交などの面で、国家は繁栄期を迎え、皇帝の権力は大きなパワーを有した。そして、皇帝の権力はハードの手段である黄色の琉璃瓦の葺き替えや、皇帝らの詩文・文章が刻まれた石碑を介して、菩薩頂に導入された。しかし、皇帝権力が強く表現された菩薩頂にはチベット仏教の要素・空間の導入はなされなかった。

嘉慶年間以降、皇帝権力が弱くなった近代（1840～1949）に入ると、菩薩頂の山門の前に小さなチベット式の仏塔が建立されたと考えられる。なぜ仏塔が門前に立地されたのか、については史料で確認できないが、寺内の中庭に建立されていた多くの石碑を避けたものと推定される。また、霊鷲峰の頂から麓にかけて夥しい数の寺院が密集しており、敷地が狭かったことが、これらの仏塔のボリュームが小さくなった原因であろう。仏塔はあくまで山門の前に建立されており、菩薩頂におけるチベット仏教の空間的影響は弱かったと言える。しかし、チベット式の建造物の代わりに、菩薩頂の殿堂に安置された多くの仏像にはチベット仏教伝統的な様式が示されていた。

五台山の菩薩頂と北京の雍和宮は似ている。雍和宮は康熙年間に建てられていた親王の邸宅を元に、乾隆年間の改築によってチベット仏教寺院として創建された。北京における多くのチベット仏教寺院の中で、雍和宮の格式は最高で、中心寺院のような性格を具有した。しかし、雍和宮の寺内・門前にはチベット式の仏塔がなく、黄色の琉璃瓦が多用され、皇帝のための石碑を収める碑亭が多く配置されている。中央集権の古代中国では、社会全ての要素が皇帝の権力の下におかれていた。このように、雍和宮・菩薩頂とも皇帝権力が強調された中心寺院には他の異質の要素が皇帝権力より強く表現されることはなかったと考えられる。

上述のような皇帝のための空間を指す用語は、文献によって異なっていた。中央政府が編纂した山志と盛典には「精舎」「座落」、地方の役人が皇帝に提出した文書には「座落房屋」、親王が編集した山志には「行宮」、皇帝の詩文では「静舎」「精舎」が使われていた。いずれ

の用語も寺院に設けられる皇帝のための空間と指すと考えられる。しかし、面積、様式などの上で皇帝権力の空間にいかなる変容があったのか、皇帝権力の空間と寺院にある住持・僧侶のすまいにはいかなる関係があったのか、これらの課題は史料の限界があるため本論では明らかにできなかった。

菩薩頂は外来の要素である皇帝権力の空間を受容した。皇帝権力の空間はそれまでの寺院空間に比してまったく異質の空間ではなく、寺院と同様の四合院形式を採用し、中院の東西に配置されていた。これらの空間へは、山門から中国仏教の空間を経由して、はじめて到達することができる。このため、皇帝権力の空間は強い中心軸を持つ中国仏教の空間に従属する形で付加されたと言える。

座落院と碑院のほか、黄色琉璃瓦も皇帝の権力が反映されたものと解釈できる。従って、黄色琉璃瓦が寺院の全体に用いられたことは、菩薩頂全体に皇帝権力が及んだ結果と見なすこともできよう。皇帝権力を代表する黄色琉璃瓦は康熙 22 年に菩薩頂に導入され、チベット仏教を代表する仏塔は皇帝の権力が弱くなった近代に導入された。菩薩頂はただの寺院としての存在ではなく、皇帝権力の拠点としても機能していた。靈鷲峰の頂点に立地し、注目を集める景観である菩薩頂を利用し、皇帝権力が五台山にも君臨するイメージが強く表現されたと考えたい。また、チベット・モンゴル懐柔方策のために、菩薩頂を利用して皇帝がチベット仏教を重視する姿勢が表現された。

注

- 注 1) 崔正森、『五台山一百零八寺』、山西科学技術出版社、2013 年、頁 31。楊玉潭、周新玉ほか、『五台山寺廟大觀』、山西人民出版社、1985 年、頁 79。明和、還玉、「菩薩頂的建築与塑像特点」、『五台山研究』、1996 年 01 期、頁 18-27。余昀、「五台山寺廟建築的空間組織及佛教文化意義」、『忻州師範学院学報』、2008 年 02 期、頁 31-37。
- 注 2) 崔正森、『五台山一百零八寺』、山西科学技術出版社、2013 年、頁 34。
- 注 3) 余昀、「五台山寺廟建築的空間組織及佛教文化意義」、『忻州師範学院学報』、2008 年 02 期、頁 32。
- 注 4) 崔正森、『五台山一百零八寺』、山西科学技術出版社、2013 年、頁 32。
- 注 5) 趙林恩（收録点校）、『五臺山碑文（上）』、山西人民出版社、2016 年、頁 174-177。
- 注 6) 崔正森、『五台山仏教史（下）』、山西人民出版社、2000 年、頁 752-762。趙改萍、『山西佛教史 五台山卷』、中国社会科学出版社、2014 年、頁 126-128。
- 注 7) 鄒愛蓮（主編）、『清代起居注・康熙朝』、中国第一歴史档案館蔵、北京所蔵、中華書局、2009 年、第 14 冊、頁 B006566-B006572。第 15 冊、頁 B007275-B007302。庫勒納など、『清代起居注・康熙朝、国立故宮博物院珍藏』、臺北所蔵、聯經出版事業公司、2009 年、第 11 冊、頁 T06235-T06244。第 17 冊、頁 T09205-T09222。おな、林士鉉、「中華衛藏：清仁宗西巡五臺山研究」、『故宮學術季刊』、第二十八卷第二期、民國九十九年冬季（2010）、頁 147-212 を参照。
- 注 8) 崔正森、『五台山仏教史（下）』、山西人民出版社、2000 年、頁 752。趙改萍、『山西佛教史 五台山卷』、中国社会科学出版社、2014 年、頁 126 により、1 代目大ラマは阿王老蔵、2 代目は老蔵丹貝、3 代目は老蔵丹巴、4 代目は頂増堅錯、5 代目は丹生嘉措、6 代目は老蔵卻培である。
- 注 9) 趙林恩（收録点校）、『五臺山碑文（上）』、山西人民出版社、2016 年、頁 172-173。また、「五臺山菩薩頂大喇嘛老蔵丹貝塔銘」または「敕賜二代喇嘛塔銘」と書く。
- 注 10) 趙林恩（收録点校）、『五臺山碑文（上）』、山西人民出版社、2016 年、頁 179-181。
- 注 11) 中国第一歴史档案館編、『乾隆帝起居注』、広西師範大学出版社、2002 年、第 5 冊、頁 278-282。第 9 冊、頁 34-38。第 20 冊、頁 54-71。第 31 冊、頁 100-105。第 39 冊、頁 86-95。なお、林士鉉、「中華衛藏：清仁宗西巡五臺山研究」、『故宮學術季刊』、第二十八卷第二期、民國九十九年冬季（2010）、頁 147-212 を参照。
- 注 12) 愛新覺羅弘晝（和碩和親王）、『清涼山小志』、全 1 卷、乾隆 11 年（1746）、序頁 1-2、頁 23-24、33。

- 注 13) 中国第一歴史档案馆、「乾嘉年間五台山寺廟行宮修繕工程史料（上）」、『歴史档案』、2001年03期、頁35。
- 注 14) 『景印 文淵閣四庫全書』、台湾商務印書館、1983年、集部二四四、別集類、第一三〇五冊、頁1,303-443。
- 注 15) 『景印 文淵閣四庫全書』、台湾商務印書館、1983年、集部二四七、別集類、第一三〇八冊、頁1,308-590。
- 注 16) 『欽定清凉山志』、全22卷、清代乾隆50年（1785年）、卷10。
- 注 17) 『景印 文淵閣四庫全書』、台湾商務印書館、1983年、集部二四八、別集類、第一三〇九冊、頁1,309-611。『景印 文淵閣四庫全書』、台湾商務印書館、1983年、集部二五〇、別集類、第一三一〇冊、頁1,311-56。
- 注 18) 趙林恩（収録点校）、『五臺山碑文（上）』、山西人民出版社、2016年、頁185-186。
- 注 19) 『景印 文淵閣四庫全書』、台湾商務印書館、1983年、集部二四八、別集類、第一三〇九冊、頁1,309-612。集部二五〇、別集類、第一三一〇冊、頁1,311-59。
- 注 20) 大清仁宗睿（嘉慶）皇帝實錄（六）、華聯出版社、1964、頁3,550-3,556。中国第一歴史档案馆編、『嘉慶帝起居注（一六）』、広西師範大学出版社、2006、頁132-147。
- 注 21) 董誥など、『西巡盛典』、全24巻、嘉慶17年（1812）、ハーバード大学図書館蔵、巻9。
- 注 22) 余思奇、趙詩迪、「「五台山行宮座落地盤圖」研究—繪製内容、年代および繪製背景考」、『華中建築』、2019年09期、頁110-113。
- 注 23) 董誥など、『西巡盛典』、全24巻、嘉慶17年（1812）、ハーバード大学図書館蔵、巻首。
- 注 24) 中国第一歴史档案馆、「三世章嘉呼圖克圖圓寂前後史料選譯（下）」、『歴史档案』、1996年01期、頁35。
- 注 25) 梁思成、『中国建築史』、三聯書店、2018年、頁265、267。なお、劉敦楨、『中国古代建築史（第二版）』、中国建筑工業出版社、1984年、頁407-408を参照。
- 注 26) （宋）李誠（撰）、王海燕（注譯）、『營造法式譯解』、華中科技大学出版社、2014年、巻6、巻7、巻29。なお、梁思成、『中国建築史』、三聯書店、2018年、頁314-315を参照。
- 注 27) 孫大章、『中国古代建築史 第五巻 清代建築（第二版）』、中国建筑工業出版社、2016年、頁464-465。馬炳堅、『北京四合院建築』、天津大学出版社、2004年、頁104。
- 注 28) 「五台山行宮座落地盤図」のうち一枚の「大螺頂地盤図」には、「真門」「配門」と

書いてある。

注 29) 劉暢、『從圓明園內檐裝修研究到北京公館室內設計』、清華大学出版社、2004 年、頁 49-52。

注 30) 孫大章、『中国古代建築史 第五卷 清代建築 (第二版)』、中国建築工業出版社、2016 年、頁 471-473。馬炳堅、『北京四合院建築』、天津大学出版社、2004 年、頁 110-117。

図表出典

第一節

図 3-1-1 菩薩頂の位置。出典：Ernst Boerschman、『Lageplane Des Wutai Shan Und Verzeichnisse Seiner Bauanlagen in Der Provinz Shanxi』、Harrassowitz Verlag、2012 年により、筆者作成。

図 3-1-2 菩薩頂配置図。出典：2018 年 8 月の実地調査により、「菩薩頂平面図」、『中国古建築測繪十年 2000-2010 (上)』、清華大学出版社、2011 年、頁 376-377 を参考に、筆者作成。

図 3-1-3 菩薩頂チベット式の塔。出典：筆者撮影。

図 3-1-4 菩薩頂銅塔。出典：筆者撮影。

図 3-1-5 大雄宝殿。出典：筆者撮影。

図 3-1-6 大文殊殿。出典：筆者撮影。

図 3-1-7 怖畏金剛殿。出典：筆者撮影。

図 3-1-8 碑院の入り口。出典：筆者撮影。

図 3-1-9 碑亭と石碑。出典：筆者撮影。

第二節

図 3-2-1 菩薩頂伽藍変容模式図。出典：筆者作成。

第五節

図 3-5-1 菩薩頂地盤図 (嘉慶 15 年・1810)。出典：39×38.2 センチ、中国国家図書館蔵。英語を追記した。

図 3-5-2 菩薩頂図 (嘉慶 17 年・1812)。出典：「菩薩頂地盤図」、中国国家図書館蔵を参考に、董誥など、『西巡盛典』、嘉慶 17 年 (1812)、巻 15、「菩薩頂図」に建物の名称を加筆した。

図 3-5-3 支摘窓。出典：孫大章、『中国古代建築史 第五卷 清代建築（第二版）』、中国建築工業出版社、2016 年、頁 466。

図 3-5-4 榻扇。出典：孫大章、『中国古代建築史 第五卷 清代建築（第二版）』、中国建築工業出版社、2016 年、頁 466。

図 3-5-5 炕罩。出典：孫大章、『中国古代建築史 第五卷 清代建築（第二版）』、中国建築工業出版社、2016 年、頁 470。

図 3-5-6 落地罩。出典：孫大章、『中国古代建築史 第五卷 清代建築（第二版）』、中国建築工業出版社、2016 年、頁 470。

表 3-5-1 菩薩頂の屋根形と建築の規模。出典：筆者作成。

第四章 鎮海寺の空間構成とその変容

第一節 鎮海寺の現状

五台山中心地区の台懷にある交口という要所の近く、清水河の西岸の鬱蒼とした山林の中に、鎮海寺と称される寺院がある（図 4-1-1）。寺院の創建は 1465 年以前で、当時漢民族出身の「禪師」がいた禅宗の寺院だったとされる^{注 1)}。後述のように、この鎮海寺は現在五つの性格の異なる空間から構成されている。そのうち前院、南院、南西院の三つについては、

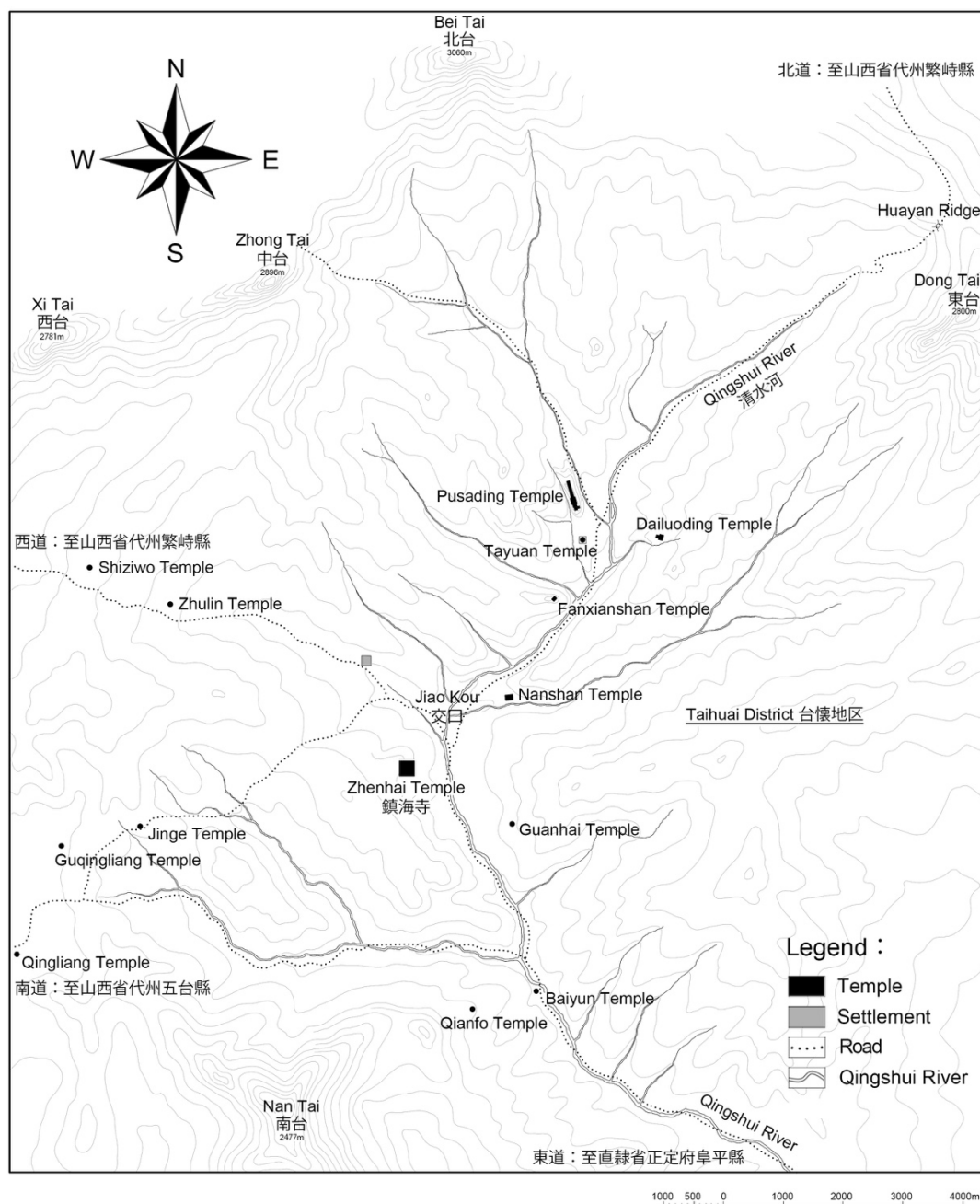


図 4-1-1 鎮海寺の位置

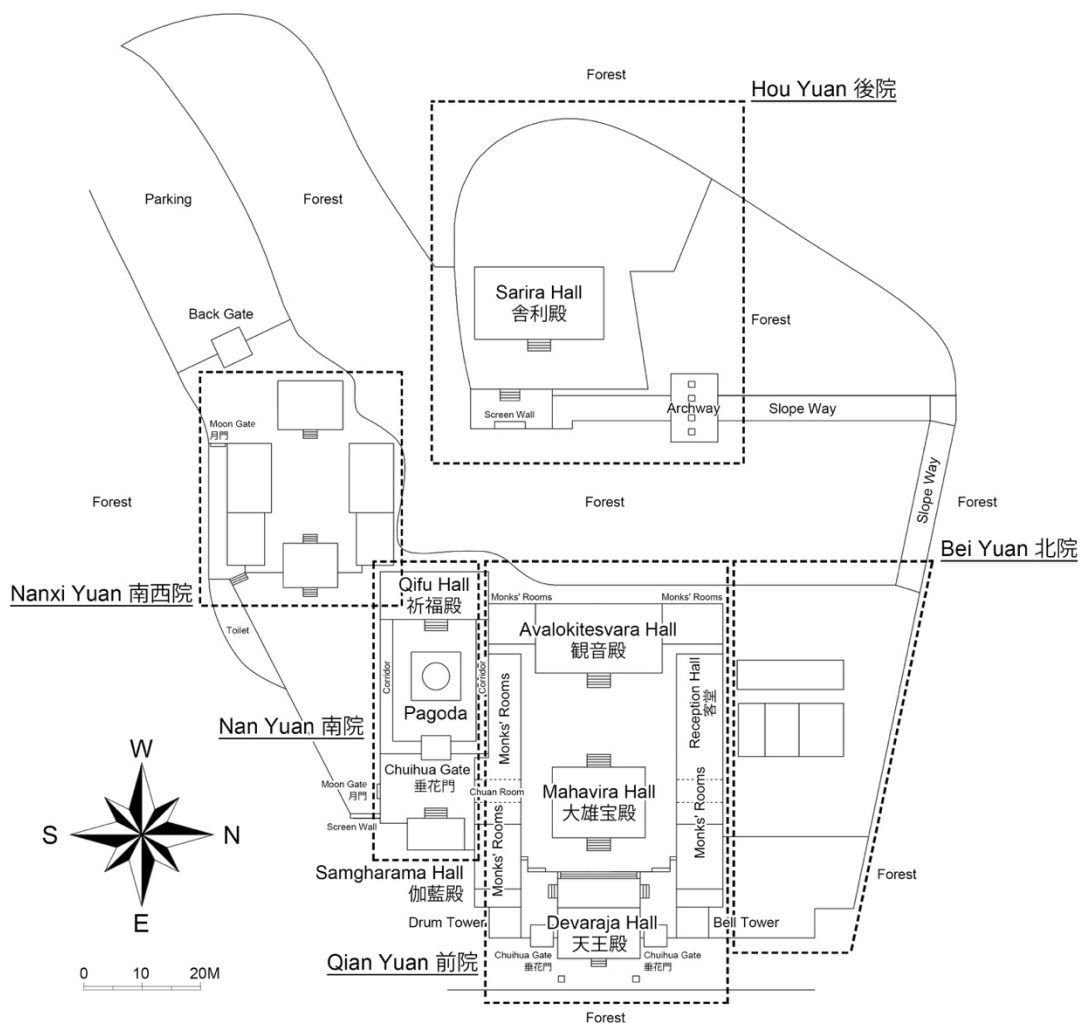


図 4-1-2 鎮海寺配置図 (2018 年 8 月の調査により、筆者作成)

清代に遡ることが明らかである。

五台山の数多くの寺院の中で、鎮海寺は長い歴史を誇った大寺院だったわけではなく、法主のチャンキャ・ホトクト^{注2)} という僧侶の宗教的地位の高さにより、その名前が明代以降広く知られるようになったものである^{注3)}。清代の五台山には、チャンキャ・ホトクトをトップとする寺院が 6 カ所あったとされ、これらの寺院の中でも鎮海寺は中心的な性格を有していた^{注4)}。

現在鎮海寺は前院、北院、後院、南院、南西院の 5 部分で構成され、寺内にある建築は総間口 100 間余の規模を有するという (図 4-1-2)^{注5)}。鎮海寺は東を正面にするが、山門はなく、天王殿が山門の機能を兼ねており、両脇に新築の垂花門が見える。硬山 3 間 (13.4×7.7M) の天王殿、歇山 3 間 (15.6×11.6M) の大雄宝殿、硬山 5 間 (19.2×10.8M) の観音殿は前院の中心軸上に配置され、鐘・鼓楼、4 間の客堂の他、計 10 間の僧舎が左右対称に設けられてい



図 4-1-3 大雄宝殿
(2018年8月、筆者撮影)



図 4-1-4 垂花門
(2018年8月、筆者撮影)



図 4-1-5 チャンキヤ・ホトクト霊塔
(2018年8月、筆者撮影)

る(図4-1-3)。注意すべき点は天王殿が康熙49年(1710)の築であり^{注6)}、正面に門・窓としてのアーチが施されていることである。天王殿と大雄宝殿の外壁は赤色に塗られ、また大雄宝殿の外壁はチベット仏教の壁画で飾られている。

前院北側の僧舎には1間の穿堂があり、それを通じて北院に入ることができる。北院は新築されたもので、僧侶の私的な生活空間となっている。北院の北西にある坂道を登ると後院に入り、中に新築された廡殿7間の舍利殿がある。

また、前院南側の僧舎の1間の穿堂を潜ると南院に入ることができる。硬山3間の伽藍殿、垂花門、月門(円形の門)は南院の前半部を構成している(図4-1-4)。垂花門を入ると、もう一つの院子があらわれ、これが南院の後半部である。この垂花門に「永楽院」の額が掛けられているので、南院の後半部は永楽院と呼称して良い。永楽院の南北両側に計26間の回廊がL字型に配置され、内壁はチベット仏教の壁画で飾られている。西側には硬山5間2階建ての祈福殿が配置されている。院子の中心に位置するのは高さ約9メートル、白色のチベット式の塔である。チャンキヤ・ホトクト霊塔と呼称されている。霊塔は基壇、塔座、塔身、相輪の4部分で構成され、華やかな浮き彫り細工が施されている塔座と塔身、銅鑲金(金メッキ)の相輪はチベット式に特徴的なものである(図4-1-5)。チベット仏教僧、信者、



図 4-1-6 南西院の正面
(2018年8月、筆者撮影)



図 4-1-7 南西院の内部
(2018年8月、筆者撮影)

観光客などがこの塔を右繞して礼拝する様子がみられる。

南院の月門を通じて、南西に位置する南西院に入ることができる。この院子は清代の皇帝が滞在したスペースであり、新築された6棟の硬山の建物で構成されている(図4-1-6)。2018年8月には、この院子の改築工事が行われていた(図4-1-7)。

以上の鎮海寺の構成について、特に前院、南院、南西院に着目して清代から順を追って述べたい。

第二節 康熙年間の鎮海寺

聖祖は康熙22年2月、同22年9月、同37年2月、同41年2月、同49年2月の計5回西巡をおこなったが、鎮海寺は訪問しなかった^{注7)}。『清涼山新志』(康熙40年・1701)の中にも、わずかに「鎮海寺、交口西南嶺下」とだけ記されている^{注8)}。康熙年間半ばまで、鎮海寺は朝廷にあまり重視されていなかったとみられる。

鎮海寺観音殿の前に康熙50年(1711)に立てられた「御製鎮海寺碑文」が残されている。この碑文によると、いくつかの事情がわかる^{注9)}。まず、「茲鎮海寺者、迺交口之幽叢、當台懷之勝概、崇基峻利、縉流禪誦之堂、奧境靈區、法駕經行之地」とあり、鎮海寺は台懷へいく際に、必ず經由する要所の「交口」の近くに位置することを示している。

つぎに、同碑文には「地稱陸海、適標鎮海寺之名、光轉法輪、特賜金輪之額、庶幾琉璃淨國、常添聖母千壽、瓔珞紅樓、永賜蒼黎百福」ともあり、朝廷から鎮海寺に「金輪」の額が下賜されたとわかる。康熙末年までには鎮海寺は朝廷に重視されるようになったと推定される。この「金輪」は現存する額に書かれた仏法を指す「金光輪藏」を略したものである^{注10)}。

また、同石碑の裏側には「敕封清修禪師提督五臺山番漢割薩大喇嘛鼎增堅錯監造、住持彭錯垂旦」とあり、当時朝廷は五台山番漢事務(チベット仏教・中国仏教の教務)を支配する権力

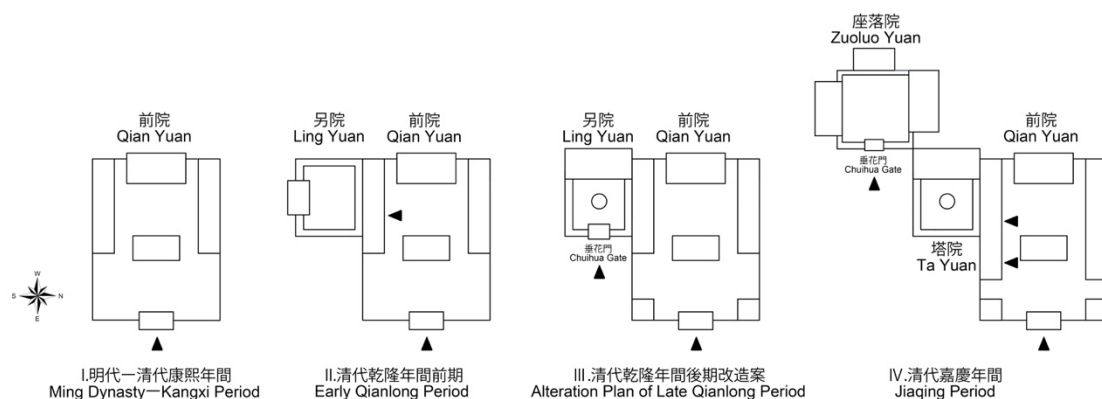


図 4-2-1 鎮海寺伽藍変容模式図

を「大喇嘛」(チベット仏教僧)の「鼎増堅錯」という人物に与えていたことがわかる。石碑の樹立はこの鼎増堅錯が監督したものであった。なお、鎮海寺の住持職はチベット仏教僧の「彭錯垂旦」が担っていたこともわかる。

康熙末年には、五台山全体でチベット仏教と中国仏教との融合が進んでいたとみられる。上述の通り康熙 50 年までに寺の住持は中国仏教僧からチベット仏教僧に代わり、チベット仏教の寺院に変容していたと考えられる。史料の限界により、伽藍配置や建築様式は未だ明らかではないが、後述する後世の鎮海寺の伽藍配置を前提とすると、開基の明代から康熙年間までの鎮海寺は傍に「另院」(中心軸の横に寺院の中心部と分かれて設ける院子)がなく、山門から主な寺院建築が順番に配置される中国式の伽藍であったと推定される(図 4-2-1 I)。

第三節 乾隆年間の鎮海寺

(1) 乾隆年間前期

第三章でも述べた通り。乾隆 11 年 9 月(1746)高宗は初めて西巡幸を行ない^{注11)}、同行した和碩和親王の弘晝は五台山の寺々を遊歴した。同年のうちに親王は『清涼山小志』(乾隆 11 年・1746)を編成した。同書には鎮海寺につき以下の内容が記述されている^{注12)}。

鎮海寺在萬緣庵東去半里間。殿宇隨山構成。層次疊落。大有可觀。住持喇嘛約十餘眾。正殿供菩薩三尊。上懸聖祖皇帝御書匾曰金光輪藏。皇上今錫匾曰金輪不住。(後略)

乾隆初年の鎮海寺の建築は山の地形に応じてひな壇のように配置され、この伽藍を観る価値が大きい(「大有可觀」という。当時 10 人余の「喇嘛」(チベット仏教僧)は寺内で暮らしていたようだが、この僧侶の人数からみる限り鎮海寺は中小規模の寺院であったと考えられる^{注13)}。聖祖が「金光輪藏」の額を鎮海寺へ下賜したのについて、高宗も「金輪不住」の額を下賜した。「金輪」は仏法を指し、「不住」は停止しないという意味で、「金輪不住」は仏法の流布が永遠に続くことを意味する^{注14)}。鎮海寺の法脈が絶えずに継承されて欲しいと

いう希望を、高宗が篤く持っていたと考えられる。

この時期の鎮海寺を描いたものとして、「畫鎮海寺雪景」(張若靄、乾隆11年・1746)と「畫鎮海寺雪景」(張若澄、乾隆15年・1750)の2枚の絵画が残されている。両図は高宗に同行した大臣によって描かれたものである^{注15)}。「畫鎮海寺雪景」(張若靄)には、山門から、楼閣、前殿、後殿が順番に配置され、前・後殿の脇、向かって左側に配殿が設けられていたように見える(図4-3-1)。「畫鎮海寺雪景」(張若澄)では、寺院の中心軸が表現されておらず、山門、楼閣、前殿、後殿が散在するように配置されている(図4-3-2)。

乾隆15年巡幸の際に高宗は「命張若澄圖鎮海寺雪景因而有作」(乾隆15年・1750)という詩文を書いた^{注16)}。詩文中の「謂是宜圖取、若靄屬車隨、粉本為指授、幀端題以詩、逮今成舊蹟、寶笈藏石渠」との記述から、乾隆11年に同行した張若靄が「畫鎮海寺雪景」を描いたときに参考にした粉本は、高宗自らが授けたものであったことがわかる。そのため、2枚の「畫鎮海寺雪景」はおそらく高宗の意思にしたがって作成されたものであったと推定される。

両図で表現された伽藍配置はかなり異なるように見え、それは乾隆11年と15年の間に、寺院の建築の多くが建て替えられた可能性もあることを示唆するが、史料の限界により明らかではない。ただし、乾隆初年の鎮海寺が山林の中に位置し、数棟の赤塗りの建物から構成されていたことは両図に共通するので確かであろう。両図には組物は表現されていない



図4-3-1 「畫鎮海寺雪景」部分(張若靄、乾隆11年・1746)

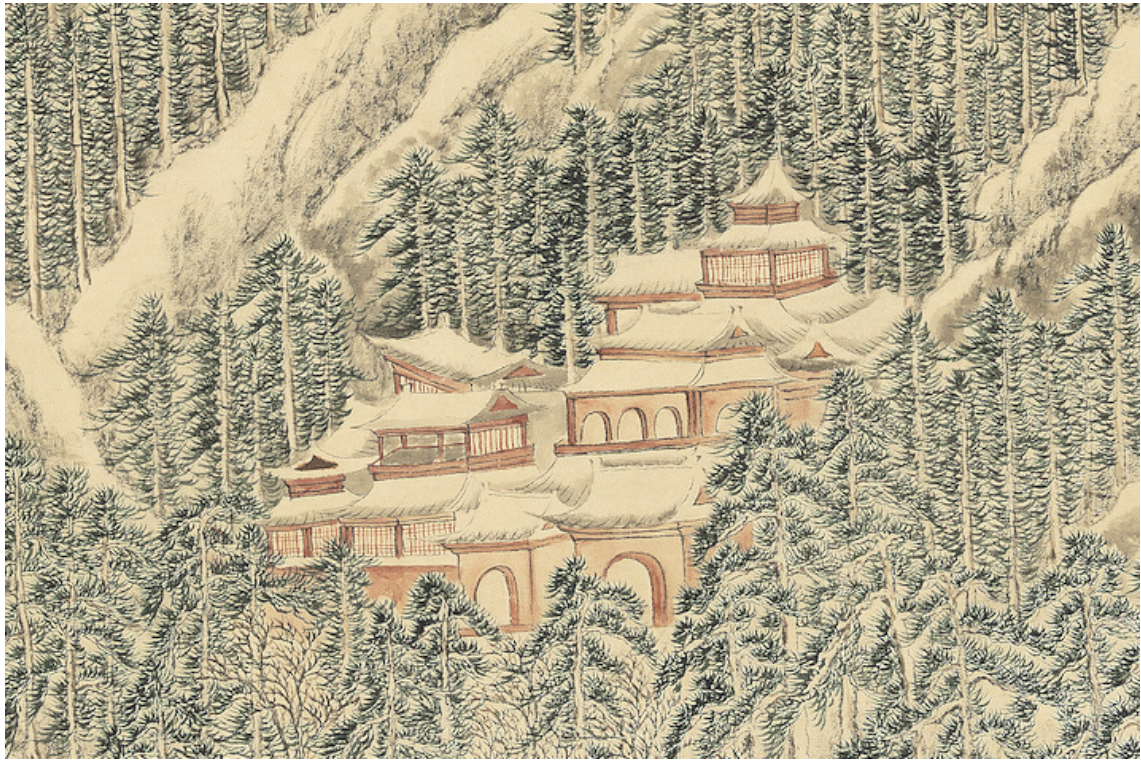


図 4-3-2 「畫鎮海寺雪景」部分（張若澄、乾隆 15 年・1750）

が、建具から見ると、「畫鎮海寺雪景」（張若靄）に描かれている窓は連子窓（直櫺窓）である。

「畫鎮海寺雪景」（張若澄）に描かれている窓は連子窓、方眼模様の窓の 2 種類があるように見える。表現されている建築にはアーチが施され、門・窓となっている。チベット式の建築には一般にアーチが使用されず、中国式の建築にアーチが広く用いられるのは明代半ば以降の時期とされているので、これは中国建築の伝統によるものと考えられる^{注17)}。

なお、同詩文には「翠柏紅牆間、寒剽送響遲」とあり、これにより鎮海寺建築の「牆」（壁・垣）が赤色であったことがわかり、両図の表現の蓋然性が高いことを傍証する。また、同じ詩文の「数間精舎中、月戸親憑窺」により、鎮海寺には「精舎」という建物があり、それは「数間」の規模で、中に「月戸」という円形の門があったとされている。一般的に、精舎は寺院、学校、書斎などの意味があるとされるが^{注18)}、後述のようにこれは皇帝の休憩した建物「御座房」だったと推定される。明代から康熙年間までは鎮海寺を訪問した皇帝がいなかったため、精舎は乾隆年間に高宗を迎えるために創建されたものであろう。精舎を有する院子（另院）は乾隆年間前期に創建された可能性が高い（図 4-2-1 II）。

(2) 乾隆年間後期

乾隆 11・15 年の訪問以降、高宗は同 26 年 2 月、46 年 3 月、51 年 3 月、57 年 3 月にも西巡を行ない、鎮海寺を計 4 回訪問した^{注19)}。乾隆 46 年の巡幸の際にも、高宗は「題鎮海寺」

(乾隆 46 年・1781) という詩文を書いた。詩文の中には「寺旁精舎本無多、憑牖雲山四面羅」とあるので、精舎が存続していたことがわかる^{注20)}。また、『欽定清涼山志』(乾隆 50 年・1785) には鎮海寺が記録されている^{注21)}。

鎮海寺。在交口西南嶺下。山門三楹。鐘鼓樓各一。亭一。前殿三楹。大殿五楹。後山殿三楹。前後配廡二十四楹。僧舎六楹。寺旁精舎三楹。本朝康熙中。聖祖御題額曰金光輪藏。乾隆十一年。御書額曰金輪不住。

鎮海寺には鐘樓、鼓樓、亭および 3 間の後山殿(現後院)の存在が確認されると共に、3 間の山門、3 間の前殿、5 間の大殿、24 間の配廡、6 間の僧舎により寺院が構成されていたことがわかる^{注22)}。これらは清代の中国仏教寺院の伽藍配置に必須の要素であった。なお、寺院の傍に 3 間の精舎があるとの記述により、乾隆 50 年にも精舎(後の御座房)は依然として存在していたと推定される。

(3) 霊塔の建立

北京で政務・教務に多忙な生活を暮らしていたチャンキヤ・ホトクト 3 世は、乾隆 32 年(1767)に初めて五台山を訪問し、この後毎年 4～8 月の夏季に五台山に滞在し、仏法修行することを慣例とした。乾隆 51 年 2 月 18 日高宗は生涯の中で 5 回目の西巡のため北京を出発した。高宗を迎えるためにチャンキヤ・ホトクトは慣例の 4 月より早めに五台山へ赴いた^{注23)}。同年 2 月 30 日^{注24)}に高宗が五台山に到達したあと、チャンキヤ・ホトクトは五台山で開催された祈願誦経法会に参加したが、身体の不具合を感じ、忽ち病で倒れ、同年 4 月 2 日午後に他界した。先立つ 3 月 9 日^{注24)}に高宗は五台山を出発して北京へ帰っていたが、チャンキヤ・ホトクトの病が急に悪化したことが、高宗にも報告されたという^{注25)}。このチベット仏教僧は康熙 56 年(1717)、涼州(現甘肅省武威市)のトゥ族(土族)の家庭で生まれ、康熙 59 年(1720)にチャンキヤ・ホトクト活仏の第 3 世として朝廷に認定された。雍正 12 年(1734)には世宗(第 5 代皇帝、愛新覺羅胤禛)により「灌頂普善廣慈大国師」の称号が与えられ、高貴な地位を有することになった^{注26)}。

チャンキヤ・ホトクト 3 世は、「我已通過巴忠上奏皇上、你等不要提出完整保存我的遺體和建立金銀靈塔的要求、骨骸火化後、把骨灰及身像裝在一個不大的銅塔裏、安放在此地的鎮海寺中」との遺言を残したという記述がある^{注27)}。茶毘した自分の「骨灰」(舍利)を銅塔に納めて鎮海寺に置いてもらいたいという願いを持っていたことがわかる。この願いは、理藩院^{注28)}大臣の巴忠を通じて高宗に報告された^{注29)}。高宗はチャンキヤ・ホトクト霊塔を鎮海寺に設置したいという願いは許可したが、その遺体を茶毘に付し、銅塔に納めることは許可

しなかった。靈塔の建立はパンチェン・エルデニ^{注30)}の例に従い、チャンキャ・ホトクトの「法体」(肉身)を収める金塔を鑄造し、それを格納する石塔を鎮海寺に建設せよという指示が、高宗から出された^{注31)}。特に靈塔は室内に設置するのではなく、建設経費の増大を案ずることなく室外に建設することが強調された^{注32)}。

同時に、高宗は理藩院右侍郎の巴忠、山西省巡撫(省の長官)の依桑阿、そして舒文(官職不明)を五台山に派遣し、寺院の現状を調査させた^{注33)}。チャンキャ・ホトクト3世が他界してまもなくの乾隆51年4月11日に3人は調査結果と建設案を「理藩院右侍郎巴忠等為酌議鎮海寺建立章嘉呼圖克圖石塔事奏折」として作成して高宗に報告した^{注34)}。以下に引用する。

奴才巴忠、舒文、依桑阿謹奏、為酌議具奏事。

竊奴才等遵旨前赴鎮海寺勘度建立章嘉呼圖克圖石塔之處、悉心籌酌。緣鎮海寺廟宇自山門以至前殿後殿共計三進、均系坐西朝東、層巒環繞兩旁、並無平坦隙地。至寺內殿後山頂、地勢雖覺稍平、但現有釋迦佛殿三間、且樹木叢雜、實無餘地。其寺內北邊配殿後即系僧房、又逼近山岩、勢難展拓。惟寺之南配殿三間、中系川堂、迤南另院內現有朝北御座房三間、皆系遊廊、量得此處地面、由西至東共長九丈五尺、南北共寬六丈。奴才等詳細籌劃、擬將此處房座拆卸、即於靠西改建樓房五間、與寺內後殿一律整齊、三面仍建遊廊、向東居中添建垂花門一座、門內地址東西尚長六丈四尺、南北寬五丈二尺、局面不致逼仄、應於適中之處建立石塔、庶為妥善。其東南二面地勢略有參差不齊之處、俟將來動土時酌量鑲墊、以期堅固。至新建樓房五間、擬於樓上供佛、樓下陳設御座。所有拆卸一切磚瓦木料等項、均可通融抵用、亦不致于廢棄。(後略)。

下線を引いた部分を訳すると、

鎮海寺の伽藍は山門から前殿・後殿まで合わせて3進の院子があり、全ての建物は西を背にして東に面する。寺院の両傍は重なり連なる山々により囲み巡らされ、平らな建設用地がない。寺内殿堂から後山の頂上に至り、頂上の地形はやや平らで、3間の釋迦佛殿がある。寺内の北側にある配殿の後ろは僧房であり、山岩と近いので、用地を開拓することが難しい。ただ寺院の南には3間の配殿があり、配殿の中は川堂である。以南の另院の中に、3間で北に面する御座房があり、另院のほかの三面は遊廊である。この処の地面を測ると、西から東に至る長さは9丈5尺、南北の幅は6丈である。この処にある房座を取り壊し、西に5間の樓房を改築し、寺内の後殿を一律に揃える。他の三面は依然として遊廊(回廊)を建て、東向きの遊廊の中央に垂花門1棟を建て添えるように計画する。垂花門の内側の地面の東西長さは6丈4尺、南北幅は5丈2尺である。中央に石塔を建立するべきである。新築される樓房は5間で、2階に仏像をそなえ、1階に御座を設ける。

となる。

この史料によると、寺院は平地が少ない山々で挟まれた場所に位置する。中心軸に沿って山門、前殿、後殿が配置されていた（図 4-2-1 II）。寺院の後ろの山頂に 3 間の釋迦佛殿が存在し、ほかに余った空間はなかったという。この釋迦佛殿は前述の後山殿であったと推定される。中心軸の北側に配殿が設けられ、配殿の後ろの山岩と近い位置には僧房が建てられていた。中心軸の南側にはもう 1 棟の配殿が設けられた。鼓・鐘楼があったことは記録されていないが、乾隆 50 年に鼓・鐘楼の存在が確認され、後世にも確認されるので、乾隆 51 年にも存在した可能性が高いと推測される。

南側の配殿の中には川（穿）堂が配置され、川堂を通じて另院に入る。另院は独立の合院であり、北向き 3 間の御座房があったほか、東、西、北の 3 方が回廊で囲まれていた。中庭は東西幅 9 丈 5 尺、南北幅 6 丈を有したという。同年に高宗の書いた詩文「鎮海寺」（乾隆 51 年・1786）には「佛殿邊旁別一區、三間精舍坐斯須」とある^{注 35}。これにより、仏殿の傍の一画（另院）に 3 間の「精舍」があり、この精舍は前述の御座房の異名であると推定される^{注 36}。

3 人が現状を把握したところ、中心軸の空間が狭く、石塔を建立する空間はないという調査結果が提出された。そのため、另院に石塔を建設する案が提案された。それは另院南側の御座房を取り壊して回廊に改築すると共に、元西側の回廊をなくして 5 間の 2 階建ての楼房を新築し、2 階に仏像をそなえ、1 階に御座を設けるというのであった。1 階は皇帝の休憩の場として計画されたと考えられる。元東側の回廊の半ばには垂花門の増築も計画されていた。こうして、中庭の面積は縮小され、東西幅 6 丈 4 尺、南北幅 5 丈 2 尺に変わった。改造された中庭には石塔が建設されることになった（図 4-2-1 III）。

建設案から見ると、元來鎮海寺に付属していた另院は、独立した出入り口（垂花門）を備えるチベット仏教活仏の墓所のような機能を持つ塔院としてよみがえる計画であった。チベット式の空間がはじめて鎮海寺に導入され、另院は墓所と皇帝の休憩の場の二重の性格を有することになった。この案が忠実に実現されたかを次にみてみたい。

第四節 嘉慶年間の鎮海寺

嘉慶 16 年 3 月に仁宗は西巡を行ない、鎮海寺を訪問した^{注 37}。この際に鎮海寺には 12 名の「小喇嘛」（チベット仏教僧）がいたという^{注 38}。図像史料としては、「五台山行宮座落地盤図」（嘉慶 15 年・1810）の中の一枚に「鎮海寺地盤図」（以下「地盤図」）がある（図 4-4-1）^{注 39}。一方、『西巡盛典』（嘉慶 17 年・1812）には嘉慶 16 年の仁宗の西巡が記録されている。『西巡盛典』の巻 15 には 1 枚の「鎮海寺図」（以下「盛典図」）が収録されている（図 4-4-2）^{注 40}。

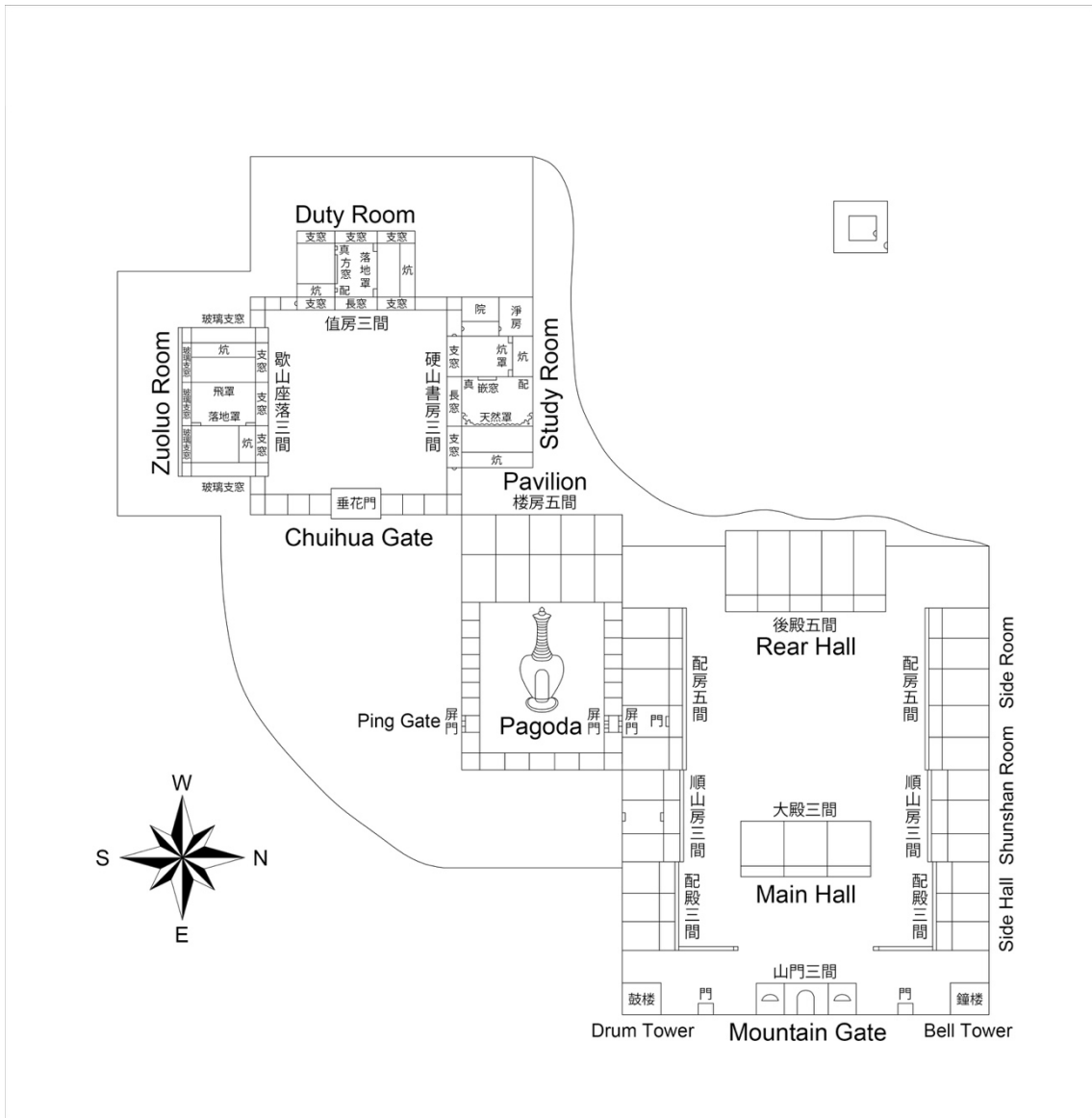


図 4-4-1 鎮海寺地盤図（嘉慶 15 年・1810、筆者写）

2 枚の図に表現されている伽藍配置は基本的に一致している。しかし、寺院建築の屋根形や建具などの細部で 2 枚の絵図には相違がある。

両図によると、鎮海寺には歇山 3 間の山門の両脇に同じく歇山 2 階建ての鼓・鐘樓が設けられていた。山門から入ると、硬山 3 間の大殿、硬山 5 間の後殿が中心軸上に配置されていた。中心軸の南北両側に、計 6 間の配殿、計 6 間の順山房、計 10 間の配房が左右対称に配置され、これらの建物も硬山であった（表 4-4-1）。この一画が中国式の伽藍配置であった。

上述の伽藍の南には塔の据えられた中庭があり、その中には歇山 5 間 2 階建ての樓房とチベット式のチャンキャ・ホトクト靈塔がみられる。しかし、東側には乾隆 51 年の建築案

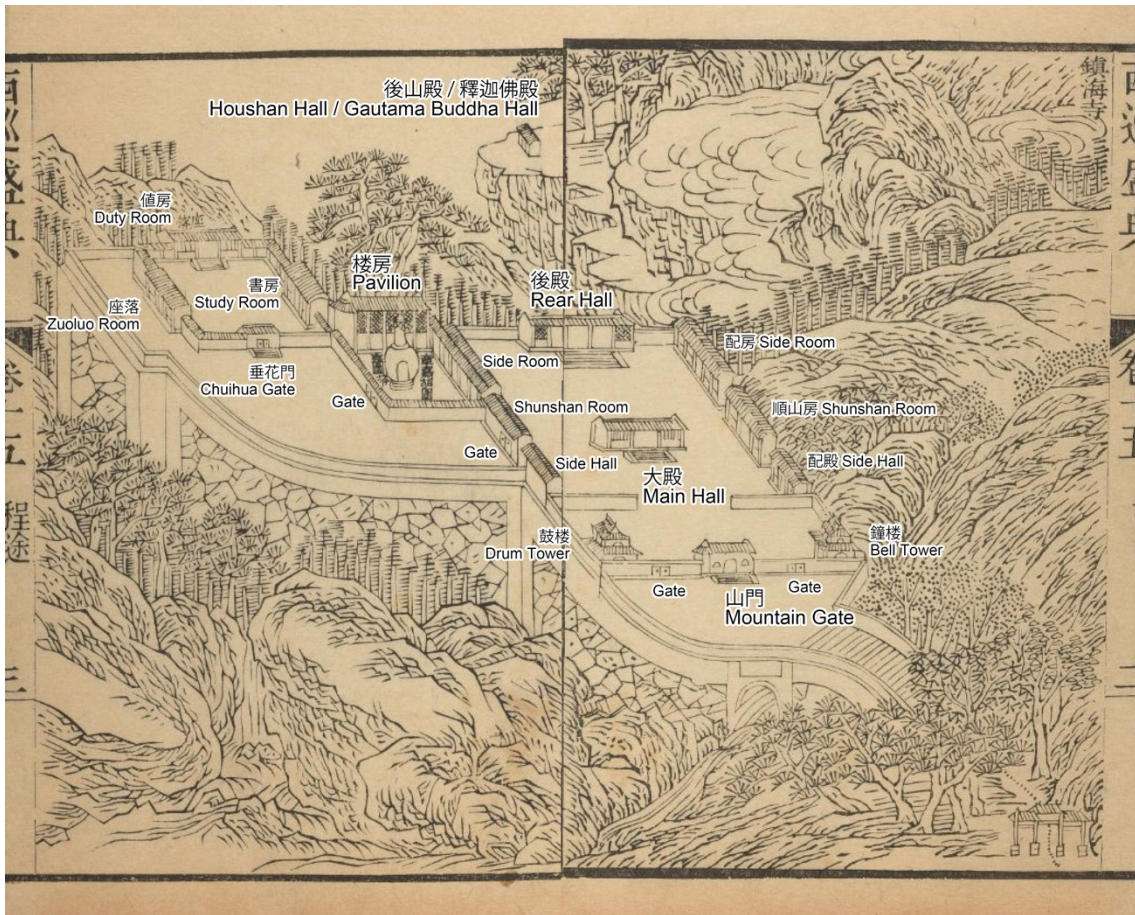


図 4-4-2 鎮海寺図（嘉慶 17 年・1812）

にあった垂花門は見えない。これは計画がその後変更され、建設されなかったとみておきたい^{注 41)}。垂花門がなかったのであれば、中国式伽藍の中心軸南側の配房を通じて塔院（現永楽院）に入るしかない。塔院は寺院に付属した閉鎖的な空間としての性格が強かったと言えるだろう。

そして、塔院の南西にはもう一つの院子が配置されていた。盛典図にはこの院子の上に「座落」と書いてあるので、座落院と名づけて良いだろう（現南西院）。座落院は、東向き 3 間の值房、南向き 3 間の書房、北向き 3 間の座落、東側にある垂花門によって構成されていた。座落院は乾隆 51 年と嘉慶 15 年の間に建設されたと推測される。座落院は仁宗を迎えるために整備された施設であった^{注 42)}。このため、座落は皇帝の休憩室、書房は皇帝の書斎、值房は守衛あるいは使用人の控室であったと考えられる。地盤図には書房は硬山、座落は歇山であると記されており、歇山の屋根形で座落がより格式の高い空間であったことを示している。しかし、盛典図によると、值房、書房、座落は何れも硬山であるように見える。現状では、值房・書房・座落は残されていないので、屋根形状については判然としない（表 5-4-1）。

宮殿、陵墓、寺廟、民家、ないし都市を含めての中国伝統的建築には、重要な建物が南北の中心軸上におかれ、それが南にある垂花門に対面する方位に建てられるという配置のルールがある。しかし、鎮海寺の場合は異なり、塔院、座落院を含めて寺院が東西に向けて配置され、皇帝の休憩室である座落は座落院の南側に、垂花門と隣接するところに建設された。まず、鎮海寺の東西向きの配置については、史料が限られその原因はいまだ明らかではない。平地が少ない東西向きの地形を沿って最初に寺院が建立されたため、のちに寺院の東西の中心軸と平行する中心軸に従い、南に院子がむりやりに増築されたと推定される。さらに、清代計 12 回の西巡のうち、康熙 22 年と乾隆 11 年の巡幸は 9 月に行われたが、他の 10 回の巡幸は寒い冬季の 2 月または 3 月に行われた。したがって、政治の中心地とはるかに離れた五台山の寺院に建設された座落は、伝統的な配置ルールを厳格に順ずるよりも、暖かい室内環境を確保することが優先され、日当たりが良い院子の南側に建設されたと考えたい。同じ原因で、書房は座落院の北側に配置されたのであろう。日当たりがよくない院子の西側に守衛あるいは使用人の控室である值房が建てられた。

この座落院へ行くには、寺の山門を入り、中心軸南側の順山房を通って行くことになる。したがって、座落院は鎮海寺の一部であったことは明らかである。また、一般に垂花門は建築の表門として建設されるのではなく、建築の内部に設けられ、内部空間をさらに内・外に区分する役割を持つ^{注 43)}。このため、垂花門の内は皇帝のための私的な空間、垂花門の外は寺院の公的な空間であったとも考えられる。とはいえ、塔院に比べると、座落院は垂花門という独自の門が設けられていた分だけ、一定度の独立性を有していたとも言えるであろう。なお、盛典図によると、寺院の後ろの山には 3 間の硬山の建物が存在したようにみられる。この建物は前に述べた後山殿・釋迦佛殿であろう。

両図の建築には組物が描かれていない。しかし、建築の建具からみると、盛典図の山門、鐘楼、鼓楼には、アーチが施された門、窓となっている。大殿には連子窓が施され、後殿と楼房に菱形模様の窓が施され、寺内に設けられていた門は両開きの板扉であったように見える。盛典図に表現されている連子窓、菱形模様の窓、板扉などの建具は古来の中国式であると判断される^{注 44)}。一方、地盤図には座落院に位置する 3 棟の建物に施されていた建具と室礼の様式が詳しく記述されている。同図により、3 棟の建物には中国式の支摘窓（現図には「支窓」）、榻扇（原図には「長窓」）が設けられ、特に皇帝の休憩室である座落の東、南、西の 3 方にある支摘窓にはガラス（現図には「玻璃」）が施されていたこともわかる。建具にガラスを使用したのは西洋の影響を受けたもの、日当たりのよい室内環境をつくるために備えられたと判断される。

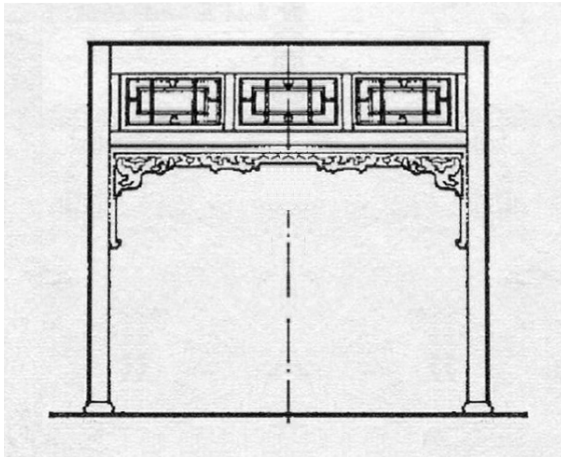


図 4-4-3 飛罩

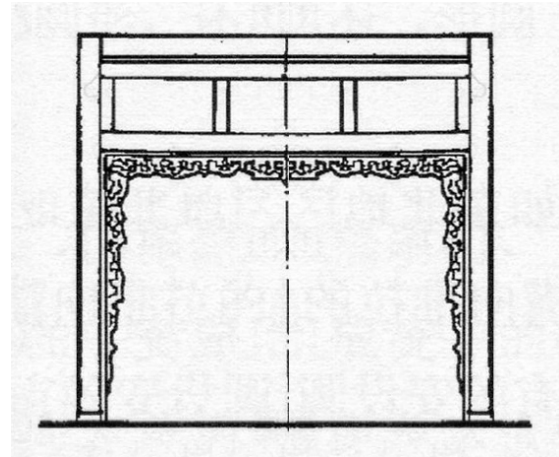


図 4-4-4 天然罩

地盤図に描かれた座落には入り口の榻扇がないので、明間に書いてある「支窓」は正しくなく、「長窓」にするべきだろう。座落の西次間と東次間には炕が設けられ、二つの部屋と明間の間に落地罩と飛罩が飾られていたとみられる。飛罩は室内の地面と繋がらない罩という間仕切りの一つである（図 4-4-3）。同じく、書房の西次間と東次間にも炕が設けられていた。明間と東次間の間に天然罩があり、嵌窓で明間と西次間が分隔された。天然罩は天然式落地罩の省略、自然的な紋様で飾られている落地罩であったという（図 4-4-4）^{注45)}。一方、嵌窓の設置から、その奥側の西次間は私的な空間であったと考えられる。嵌窓の両側に「真（門）」「配（門）」が描かれている。配門の裏側に炕が置かれたため、配門は通らない飾りとしての門であったことがわかる。書房の外側には独立の門（原図には半円に描く）を持つ淨房が附属されていた。値房の二つの次間には炕が備えられ、明間に落地罩、方形、真門、配門が施されていた。一方、塔院の回廊には4～6枚の板で構成される屏門（板扉）が設けられた。屏門、支摘窓、榻扇は北京の伝統的民居によく用いられているほか、中国南方の民家にも見られるものである^{注46)}。つまり、座落院は臨時的なものではなく、皇帝の滞在を前提として様々な工夫が施された施設であったと考えたい。

嘉慶年間の鎮海寺は前代より規模が拡大し、中国式伽藍配置の前院、チベット式の塔院、皇帝のための座落院の三部分で構成された。三部分は独立した建築空間ではなく、三部分を合わせて1寺院を構成していた。一つの寺院に中国仏教とチベット仏教の聖的要素、皇帝の俗的権威を合わせて三重の性格を具有したことは、嘉慶年間の鎮海寺伽藍配置の特徴であったと言える。一方、鎮海寺の建築には、基壇が設けられ、中国式の屋根が造られ、建築の建具・室礼も中国式だったことがわかる。これに対し、チベット式の組物、装飾などが鎮海寺建築に導入されたかどうかは明らかではなく、チベット式が確実に認められるのはチャンキヤ・ホトクト霊塔だけであった。

表 4-4-1 鎮海寺の屋根形と建築の規模

建物	嘉慶 15 年・1810	嘉慶 17 年・1812 年	2018 年 8 月
	鎮海寺地盤図	「鎮海寺図」	鎮海寺配置図
山門	3 間	歇山、3 間	硬山、3 間 (13.4×7.7M)
大殿	3 間	硬山、3 間	歇山、3 間 (15.6×11.6M)
後殿	5 間	硬山、5 間	硬山、5 間 (19.2×10.8M)
鐘楼	?	歇山、2 階建	歇山、2 階建
鼓楼	?	歇山、2 階建	歇山、2 階建
配殿 (南側)	3 間	硬山、3 間	硬山、2 階建、3 間
順山房 (南側)	3 間	硬山、3 間	硬山、3 間
配房 (南側)	5 間	硬山、5 間	硬山、4 間
配殿 (南側)	3 間	硬山、3 間	硬山、2 階建、3 間
順山房 (南側)	3 間	硬山、3 間	硬山、3 間
配房 (北側)	5 間	硬山、5 間	硬山、4 間
霊塔	チベット式	チベット式	チベット式
楼房	5 間	歇山、2 階建	硬山、2 階建、5 間
垂花門	?	硬山、	-
座落	歇山、3 間	硬山、3 間	-
值房	3 間	硬山、3 間	-
書房	硬山、3 間	硬山、3 間	-

注) 「？」は建物が存在したが、屋根形と建築の規模は不明。「-」は建物がない。

第五節 小結

明代の鎮海寺は、中国式の伽藍配置を持つ禅宗の寺院であった。乾隆年間、皇帝の訪問を介して皇帝権力の空間が寺院に導入された。嘉慶年間になると、鎮海寺は中国式伽藍の前院、チベット式の塔院、皇帝のための座落院の三つの空間が並ぶような構成を有するに至った。

中国式伽藍を持っていた鎮海寺は、清代に入って外来の空間である皇帝権力とチベット仏教の空間の導入を受容した。皇帝権力の空間は四合院形式を採用し、チベット仏教の空間はチベット式の霊塔を中心として周りに回廊が巡らされる塔院であった。歴代ダライ・ラマの霊塔がポタラ宮の霊塔殿の中に建てられ、歴代パンチェン・ラマの霊塔がタシルンポ寺の

霊塔殿の中に建てられたことに対して、高い地位を有したチャンキヤ・ホトクト3世の霊塔が室外に建立され、塔院を形成したことは特徴的である。塔院は活仏を右繞して礼拝する儀式の空間であったと言ってよい。

皇帝権力の空間とチベット式の塔院は寺院中心軸の南側に配列されていた。これらの空間へは、山門から在来の中国仏教の空間を通ることにより、はじめて到達することができる。このため、二空間は強い中心軸を持つ中国仏教の空間に従属する形で付加されたともみることが出来る。したがって、性格が異なる空間が導入されたとはいえ、寺院全体としてみると基本的に中国の伝統的合院式の伽藍配置が崩されることはなかったと考えられる。

ただし、皇帝権力の空間は私的な空間として寺院の中で高い位置を与えられたことも指摘しておくべきであろう。皇帝権力の空間の前に建てられた垂花門は結界として機能し、その外の公的な性格を持つ空間に対し、内は格式が高い皇帝のための空間であった。伝統的合院式の伽藍配置を崩さぬまま、重要な位置に皇帝権力の空間が入り込んだと言うこともできるだろう。

他方で、高宗の詩文には文学性が高い「精舎」、大臣が皇帝に提出する報告には寺院の現状に相応しい「御座房」という用語が用いられている。ここでも用語の使い方などは統一されていない。史料の限界により、清代に「精舎」または「御座房」は面積、様式などいかなる変容を成し遂げたのかは明らかではない。

注

注 1) 崔正森、王志超、『五臺山碑文選注』、北岳出版社、1995 年、頁 207-208。また、崔正森、「鎮海寺簡史」、『五台山研究』、2003 年 04 期、頁 5-14 を参照。

注 2) 秦永章、『章嘉国師与乾隆皇帝』、青海人民出版社、2008 年、頁 1、7、49 によると、チャンキヤ・ホトクトは清代チベット仏教ゲルク派の四大活仏の一人、清代唯一の朝廷から国師の称号を受けた僧侶であった。四大活仏はダライ・ラマ、パンチェン・ラマ、ジェプツンダンバ・ホトクトとチャンキヤ・ホトクトである。

なお、釋妙舟、『蒙藏仏教史』、廣陵書社、2009 年、頁 187 によると、青海、甘肅、内蒙古、北京、五台山などのチベット以東のいわゆる「由藏東向」の広大な地域でチベット仏教の教務を掌管する権力が聖祖からチャンキヤ・ホトクトに与えられたという。

注 3) 崔正森、『五臺山遊記選注』、山西人民出版社、1989 年、頁 48-62。

注 4) 崔正森、『五台山仏教史（下）』、山西人民出版社、2000 年、頁 752。趙改萍、『山西佛教史 五台山卷』、中国社会科学出版社、2014 年、頁 158 によると、チャンキヤ・ホトクトが管轄した 6 寺院は鎮海寺、普樂院、善財洞、広化寺、文殊寺、金剛窟である。なお、董誥など、『西巡盛典』、全 24 卷、嘉慶 17 年（1812）、卷 15 には「鎮海寺図」、「普樂院図」、「金剛窟図」が収録されている。これらによると、嘉慶年間に鎮海寺は 3 寺院の中で唯一のチベット式の塔が建てられていた寺院である。

注 5) 崔正森、『五台山一百零八寺』、山西省科学技術出版社、2013 年、頁 72。

注 6) 崔正森、『五台山一百零八寺』、山西省科学技術出版社、2013、頁 72 によると、鎮海寺天王殿の正脊（大棟）の下に、「大清康熙四十九年歲次庚寅孟夏吉日旦、敕封清修禪師乃提督五台山番漢大喇嘛鼎增監錯奉旨重建、住持彭錯垂且謹志」の墨書がある。

注 7) 鄒愛蓮（主編）、『清代起居注・康熙朝』、中国第一歴史档案館蔵、北京所蔵、中華書局、2009 年、第 14 冊、頁 B006566-B006572。第 15 冊、頁 B007275-B007302。庫勒納など、『清代起居注・康熙朝, 国立故宮博物院珍藏』、臺北所蔵、聯經出版事業公司、2009 年、第 11 冊、頁 T06235-T06244。第 17 冊、頁 T09205-T09222。おな、林士鉉、「中華衛藏：清仁宗西巡五臺山研究」、『故宮學術季刊』、第二十八卷第二期、民國九十九年冬季（2010）、頁 147-212 を参照。

注 8) 老藏丹巴、『清涼山新志』、全 10 卷、清代康熙 40 年（1701）、卷 2。

注 9) 趙林恩、『五臺山碑文（下）』、山西人民出版社、2016 年、頁 514-515。

注 10) 崔玉卿、「鎮海寺楹聯牌匾」、『五台山研究』、2003 年 04 期、頁 45-46。

注 11) 中国第一歴史档案館編、『乾隆帝起居注』、広西師範大学出版社、2002 年、第 5 冊、

頁 278-282。

注 12) 愛新覺羅弘晝 (和碩和親王)、『清涼山小志』、全 1 卷、乾隆 11 年 (1746)、序頁 1-2、頁 27、33。

注 13) 愛新覺羅弘晝 (和碩和親王)、『清涼山小志』、全 1 卷、乾隆 11 年 (1746) によると、僧侶の人数が一番多かった寺院は菩薩頂であり、100 人余のチベット仏教僧が、玉花池にも 20 人余のチベット仏教僧が、白雲寺には 20 人余の中国仏教僧がいたという。

注 14) 崔玉卿、「鎮海寺楹聯牌匾」、『五台山研究』、2003 年 04 期、頁 46。

注 15) 張若靄、「畫鎮海寺雪景」、乾隆 11 年 (1746)。張若澄、「畫鎮海寺雪景」、乾隆 15 年 (1750)。なお、中国第一歴史档案馆編、『乾隆帝起居注』、広西師範大学出版社、2002 年、第 5 冊、頁 278-282。中国第一歴史档案馆編、『乾隆帝起居注』、広西師範大学出版社、2002 年、第 9 冊、頁 34-38 を参照。

注 16) 『景印 文淵閣四庫全書』、台湾商務印書館、1983 年、集部二四二、別集類、第一三〇三冊、頁 1, 303-386-1, 303-387。なお、『欽定清涼山志』、全 22 卷、清代乾隆 50 年 (1785)、卷 10 を参照。

注 17) 梁思成、『中国建築史』、三聯書店、2018 年、頁 265、267。なお、劉敦楨、『中国古代建築史 (第二版)』、中国建筑工業出版社、1984 年、頁 407-408 を参照。

注 18) 彰国社編、『建築大辞典 (第 2 版)』、彰国社、1993 年、頁 791、780 によると、精舎は①仏寺の異名。②古代中国に講義をする施設。書齋または道士が起居する。③唐代書籍の刊行や収蔵する機関またはその建物。

注 19) 中国第一歴史档案馆編、『乾隆帝起居注』、広西師範大学出版社、2002 年、第 9 冊、頁 34-38。第 20 冊、頁 54-71。第 31 冊、頁 100-105。第 39 冊、頁 86-95。なお、林士鉉、「中華衛藏：清仁宗西巡五臺山研究，故宮學術季刊」、第二十八卷第二期、民國九十九年冬季 (2010)、頁 147-212 を参照。

注 20) 『景印 文淵閣四庫全書』、台湾商務印書館、1983 年、集部二四七、別集類、第一三〇八冊、頁 1, 308-588-1, 308-589。

注 21) 『欽定清涼山志』、全 22 卷、清代乾隆 50 年 (1785)、卷 10。

注 22) 張家驥、『簡明中国建築論』、江蘇人民出版社、2012 年、頁 420 により、「楹」は「間」である。

注 23) 余思奇、藤川昌樹、「清代五台山漢藏混合様式寺院の成立--以鎮海寺為例」、『華中建築』、2019 年 10 期、頁 107-110。

注 24) 『大清高宗純 (乾隆) 皇帝實錄 (二五)』、華聯出版社、1964、頁 18, 297、18, 305。

注 25) 土觀・洛桑卻吉瑪 (著)、陳慶英、馬連龍 (譯)、『章嘉国師若必多吉傳』、民族出版社、1988 年、頁 365-367。なお、中国第一歴史档案館、「三世章嘉呼圖克圖圓寂前後史料選譯 (上)」、『歴史档案』、1995 年 04 期、頁 37 を参照。

注 26) 土觀・洛桑卻吉瑪 (著)、陳慶英、馬連龍 (譯)、『章嘉国師若必多吉傳』、民族出版社、1988 年、頁 38-39、48、98-99。

注 27) 土觀・洛桑卻吉瑪 (著)、陳慶英、馬連龍 (譯)、『章嘉国師若必多吉傳』、民族出版社、1988 年、頁 370-371。

注 28) 会典館編、趙雲田 (点校)、『欽定大清會典事例 理藩院』、中国藏学出版社、2006 年、頁 2 によると、理藩院は最初に「蒙古衙門」と称し、崇徳 3 年 (1638) に「理藩院」と改称し、内・外モンゴル、チベット、新疆、青海などの少数民族地域を管轄していた清朝の中央官庁の一つ。

注 29) 土觀・洛桑卻吉瑪 (著)、陳慶英、馬連龍 (譯)、『章嘉国師若必多吉傳』、民族出版社、1988 年、頁 370-371。なお、中国第一歴史档案館、「三世章嘉呼圖克圖圓寂前後史料選譯 (下)」、『歴史档案』、1996 年 01 期、頁 38、「拉果呼圖克圖等為呈請代為轉奏章嘉呼圖克圖遺言事致欽差大臣呈文 (乾隆 51 年 4 月 5 日)」を参照。

注 30) 『日本大百科全書』、第 19 冊、小学館、1994 年、頁 320 によると、パンチェン・エルデニまたはパンチェン・ラマといい、阿弥陀仏の化身と信じられ、世々この世に転生を重ねて法灯を伝える活仏の系譜として、観音菩薩の転生活仏とされるダライ・ラマの系譜に匹敵する信仰をチベット民衆の間で集めてきた。

注 31) 中国第一歴史档案館、「三世章嘉呼圖克圖圓寂前後史料選譯 (下)」、『歴史档案』、1996 年 01 期。原文は以下の通り、

頁 38、

拉果呼圖克圖等為呈請代為轉奏章嘉呼圖克圖遺言事致欽差大臣呈文

乾隆五十一年四月初五日

(前略)。照班禪額爾德尼之例修建靈塔、一應物品亦照班禪額爾德尼例供給 欽此。(後略)。

頁 38、

理藩院侍郎巴忠為奉旨赴普樂院辦理章嘉呼圖克圖善後事宜奏折

乾隆五十一年四月初六日

(前略)。呼圖克圖既寓意以五台山鎮海寺為好、則著照所請、供設靈塔。唯呼圖克圖業已圓寂、遄往于佛道亦為常事、若照呼圖克圖所言、僅供奉其舍利則斷然不可、故照班禪額爾德尼例、將其法體坐于靈塔、供奉于鎮海寺。設若一兩年內朕臨幸五台山、亦可拜謁呼圖克

圖之靈塔。(後略)。

頁 41-42、

駐藏大臣留保住等為奉旨按章嘉呼圖克圖遺令諾門汗進京掌管喇嘛印務事奏折

乾隆五十一年五月二十六日

(前略)。據章嘉呼圖克圖遺言、圓寂之後供設于鎮海寺等語、即照呼圖克圖夙願、在此建造金塔、將呼圖克圖法體坐入金塔內、于鎮海寺擇地供設、且于塔外再造石塔、以永久保留之。(中略)。章嘉呼圖克圖仰副文殊師利東土大聖主闡揚黃教、安撫眾生之至仁聖意、多年來潛心經典、故經文殊師利東土大聖主明鑑、為章嘉呼圖克圖製造金塔、全身坐入、外修石塔、永久供設、且賞曼荼羅等物。(後略)。

「文殊師利東土大聖主」は高宗(乾隆帝)を指す。

なお、土觀・洛桑卻吉瑪(著)、陳慶英、馬連龍(譯)、『章嘉國師若必多吉傳』、民族出版社、1988年、頁371を参照。

注32) 中国第一歴史檔案館、「三世章嘉呼圖克圖圓寂前後史料選譯(下)」、『歴史檔案』1996年01期、頁38。原文は以下の通り。

理蕃院侍郎巴忠為安放章嘉呼圖克圖靈塔擬擴建鎮海寺事片

乾隆五十一年四月

(前略)。乾隆五十一年四月初八日奉朱批、著爾仍返回与舒文會同制定靈塔樣式。再、若于屋內供奉靈塔、則必窄小、仍修明塔為好、經費無甚大礙。爾等製作大致式樣送來。欽此。

「明塔」は塔の樣式ではなく、暗い室内に対し室外に建設する靈塔を指す。

注33) 中国第一歴史檔案館、「三世章嘉呼圖克圖圓寂前後史料選譯(下)」、『歴史檔案』1996年01期、頁38-43。

注34) 中国第一歴史檔案館、「乾嘉年間五台山寺廟行宮修繕工程史料(上)」、『歴史檔案』、2001年03期、頁37。

注35) 『景印 文淵閣四庫全書』、台灣商務印書館、1983年、集部二四八、別集類、第一三〇九冊、頁1,309-610。

注36) 一凡、「歷代名人吟詠鎮海寺」、『五台山研究』、2003年04期、頁42-43を参考。

注37) 『大清仁宗睿(嘉慶)皇帝實錄(六)』、華聯出版社、1964年、頁3,550-3,556。中国第一歴史檔案館編、『嘉慶帝起居注(一六)』、広西師範大学出版社、2006年、頁132-147。

注38) 董誥など、『西巡盛典』、全24卷、嘉慶17年(1812)、卷9。

注39) 余思奇、趙詩迪、「五台山行宮座落地盤圖」研究—繪制内容、年代および繪制背景考』、『華中建築』、2019年09期、頁110-113。

注 40) 董誥など、『西巡盛典』、全 24 卷、嘉慶 17 年 (1812)、巻首。

注 41) なお、現状では永楽院の東側に垂花門と伽藍殿が設けられ、一方で、前院からの通行はできなくなっている。これらの改造が何時行われたかについては後考をまちたい。

注 42) 董誥など、『西巡盛典』、全 24 卷、嘉慶 17 年 (1812)、巻 15。原文は以下の通り。

鎮海寺。在交口西南嶺下。聖祖仁皇帝賜額曰金光輪藏。乾隆十六年高宗純皇帝賜額曰金輪不住。寺東恭備座落。北為萬緣庵。(後略)

「寺東」は正しくなく、寺南とすべきであろう。

注 43) 馬炳堅、『北京四合院建築』、天津大学出版社、2004 年、頁 70-71。

注 44) 李誠 (撰)、王海燕 (注譯) : 營造法式譯解, 華中科技大学出版社、2014 年、巻 6-7、巻 29。なお、梁思成、『中国建築史』、三聯書店、2018 年、頁 314-315 を参照。

注 45) 劉暢、『從圓明園內檐裝修研究到北京公館室內設計』、清華大学出版社、2004 年、頁 49-52。

注 46) 孫大章、『中国古代建築史 第五卷 清代建築 (第二版)』、中国建築工業出版社、2016 年、頁 465。馬炳堅、『北京四合院建築』、天津大学出版社、2004 年、頁 75、103-104。

図表出典

第一節

図 4-1-1 鎮海寺の位置。出典 : Ernst Boerschman、『Lageplane Des Wutai Shan Und Verzeichnisse Seiner Bauanlagen in Der Provinz Shanxi』、Harrassowitz Verlag、2012 年により、筆者作成。

図 4-1-2 鎮海寺配置図 (2018 年 8 月)。出典 : 2018 年 8 月の実地調査により、楊玉潭、周新玉ほか、『五台山寺庙大觀』、山西人民出版社、1985 年、頁 138 を参考に、筆者作成。

図 4-1-3 大雄宝殿。出典 : 筆者撮影。

図 4-1-4 垂花門。出典 : 筆者撮影。

図 4-1-5 チャンキャ・ホトクト霊塔。出典 : 筆者撮影。

図 4-1-6 南西院の正面。出典 : 筆者撮影。

図 4-1-7 南西院の内部。出典 : 筆者撮影。

第二節

図 4-2-1 鎮海寺伽藍変容模式図。出典 : 筆者作成。

第三節

図 4-3-1 「畫鎮海寺雪景」部分（張若靄、乾隆 11 年・1746）。

出典：127.6×62.8 センチ。国立故宮博物院（台北）所蔵。

原図は http://painting.npm.gov.tw/Painting_Page.aspx?dep=P&PaintingId=6237 に掲載されている。

図 4-3-2 「畫鎮海寺雪景」部分（張若澄、乾隆 15 年・1750）。

出典：103.4×56.9 センチ。国立故宮博物院（台北）所蔵。

原図は http://painting.npm.gov.tw/Painting_Page.aspx?dep=P&PaintingId=6329 に掲載されている。

第四節

図 4-4-1 鎮海寺地盤図（嘉慶 15 年・1810）。出典：39×38.2 センチ、中国国家図書館蔵。英語を追記した。

図 4-4-2 鎮海寺図（嘉慶 17 年・1812）。出典：「鎮海寺地盤図」、中国国家図書館蔵。『欽定清涼山志』、清代乾隆 50 年（1785）、巻 10。中国第一歴史档案館、「乾嘉年間五台山寺廟行宮修繕工程史料（上）」、『歴史档案』、2001 年 03 期、頁 37 を参考に、董誥など、『西巡盛典』、嘉慶 17 年（1812）、巻 15、「鎮海寺図」に建物の名称を加筆した。

表 4-4-1 鎮海寺の屋根形と建築の規模。出典：筆者作成。

図 4-4-3 飛罩。出典：孫大章、『中国古代建築史 第五卷 清代建築（第二版）』、中国建築工業出版社、2016 年、頁 470。

図 4-4-4 天然罩。出典：孫大章、『中国古代建築史 第五卷 清代建築（第二版）』、中国建築工業出版社、2016 年、頁 470。

第五章 塔院寺の空間構成とその変容

第一節 塔院寺の現状

五台山の中心地区である台懷に、塔院寺と称される寺院がある。寺院は靈鷲峰の南麓、清水河の西側に位置する（図 5-1-1）。歴史上では、塔院寺は大寶塔院寺、大寶塔寺、寶塔寺などとも呼称されていた。後述のように、現状でこの塔院寺は東院・西院の二つの部分で構

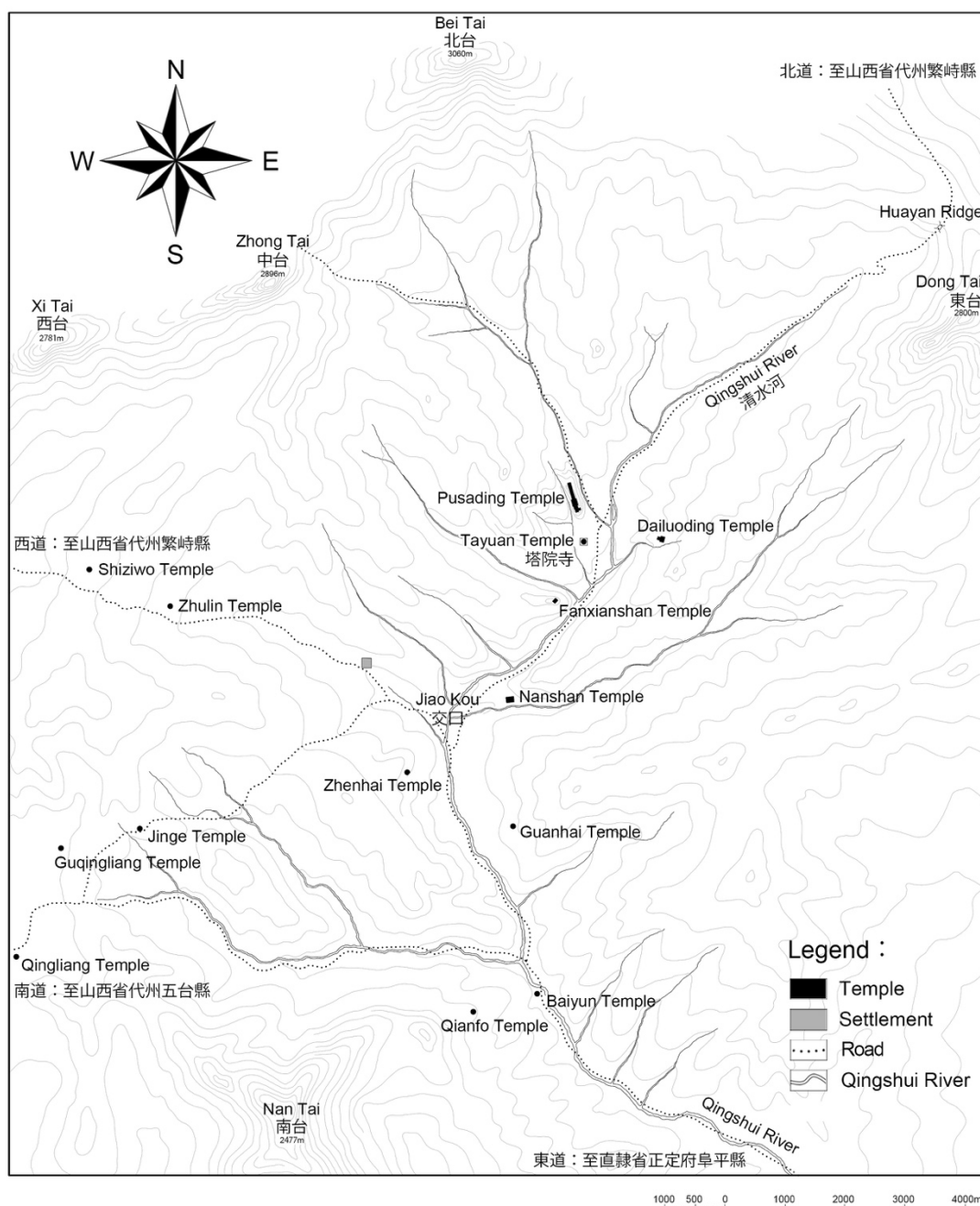


図 5-1-1 塔院寺の位置

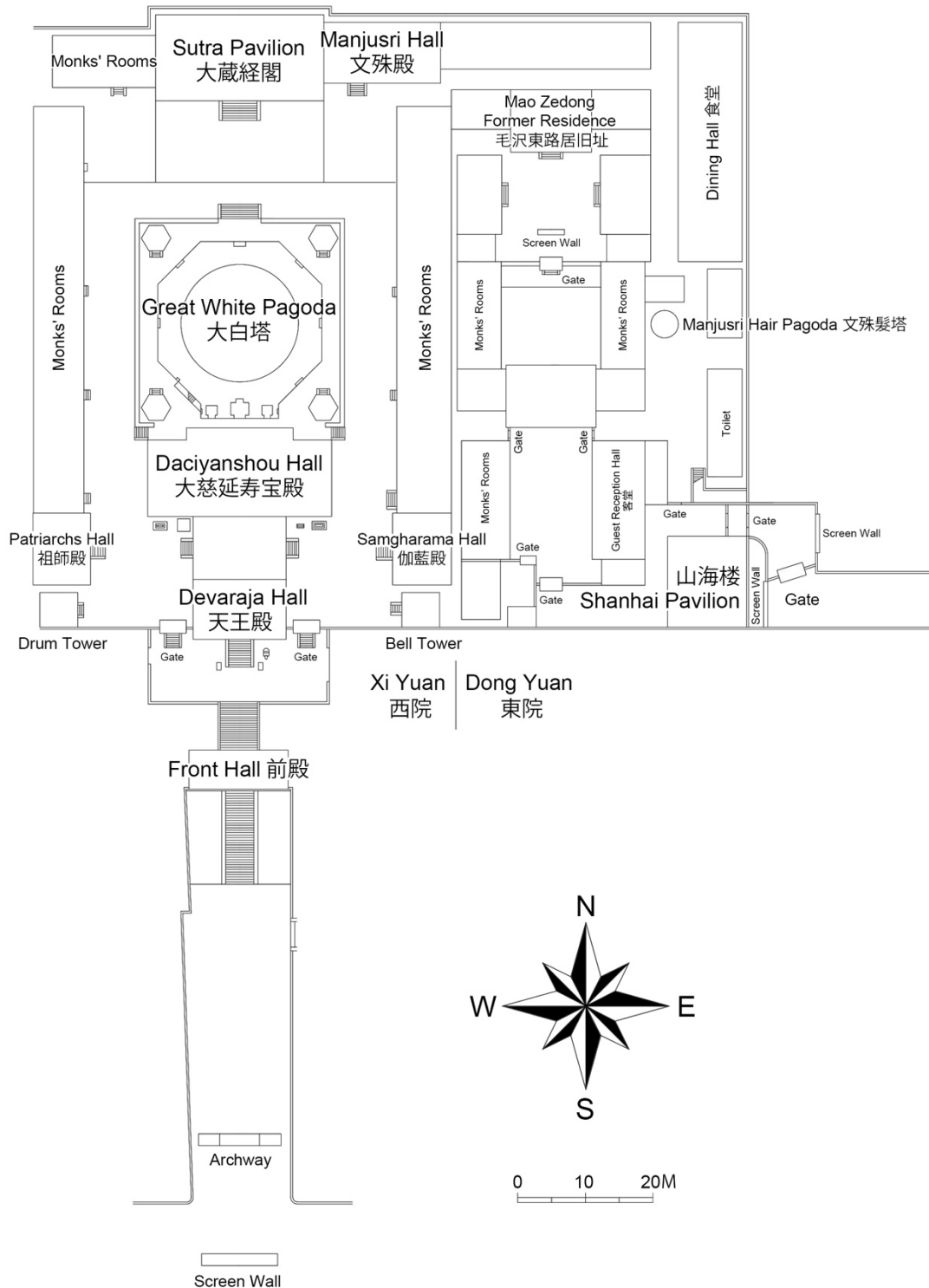


図 5-1-2 塔院寺配置図 (2018 年 8 月の調査により、筆者作成)

成されている。そのうち西院については、明代に遡ることが明らかである。

現在塔院寺は東西に連なる二つの部分で構成され、15,625 平方メートルの寺域を有する



図 5-1-3 大慈延壽宝殿
(2018年8月、筆者撮影)

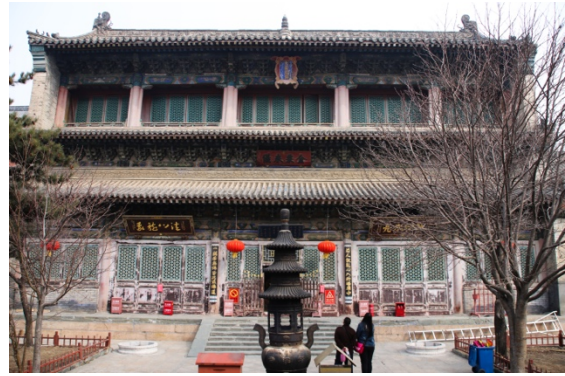


図 5-1-4 大藏経閣
(2016年3月、筆者撮影)



図 5-1-5 大白塔
(2018年8月、筆者撮影)



図 5-1-6 大白塔を右繞する人
(2018年8月、筆者撮影)

という(図 5-1-2)^{注1)}。塔院寺の西部分を見ると、門前には硬山の影壁、歇山3間の牌楼が設けられている。寺内に入ると、硬山3間の前殿、歇山3間の天王殿、歇山5間の大慈延壽宝殿、チベット式の大白塔、硬山2階建ての5間の大藏経閣が中心軸上に配列されている(図 5-1-3)(図 5-1-4)。歇山2階建ての鼓・鐘楼、硬山計32間の僧房は中心軸に左右対称に配置されている。大藏経閣の西側に硬山2階建ての4間の僧房があり、東側に位置するのは硬山2階建ての5間の文殊殿である。塔院寺の東西両部分の間に明確な区切りがあるので、この西部分は西院と言って良いだろう。西院は前後2進の院子に区分することができる。天王殿、大慈延壽宝殿、祖師殿、伽藍殿は第1進の院子を構成し、大慈延壽宝殿、大藏経閣、および左右にある長屋式の僧房は第2進の院子を囲むと見られる。

五台山の数多くの寺院の中で、塔院寺の名前は寺内に建設された巨大なチベット式の大白塔により、明代以降広く知られるようになった。現在大白塔は基壇、塔座、塔身、相輪の4部分で構成され、54.105メートル^{注2)}の高さを有する(図 5-1-5)。基壇の上、塔座の周り



図 5-1-7 毛沢東路居旧址
(2018年8月、筆者撮影)



図 5-1-8 室内の毛沢東半身像を礼拝する僧侶
(2018年8月、筆者撮影)

に回廊が設けられ、チベット仏教僧、信者、観光客などが塔を右繞し礼拝する様子が見られる(図 5-1-6)。この仏塔は西院の第 2 進院子の中央に位置するので、この院子は大白塔と中国式の伽藍配置が融合するチベット式の塔院であると見なすことができる。ただし、塔院寺は中国仏教寺院として法脈が継承されている。

西院の東側にある長屋式の僧房には通路があり、通路をぬけると、寺院の東部分に入ることができる。西院に対して、この東部分を東院と呼ぶ。東院には主に三つの院子があり、3 院子は南北の中心軸上に配置されている。南から第一進の院子に僧房、客堂が左右対称に設けられている。客堂は僧侶の出勤、持戒などを監督し、各殿堂の寺務を司るほか、外から来た信者、居士(在家の修行者)、僧侶などの者との接客を担当する施設である。第二進の院子を通過して第三進の院子へ入ることができる。第三進の院子の南に門と影壁が設けられている。影壁とは高貴な建物の入り口の門前または門内に建て、見通しを遮断する厚い壁である^{注3)}。このため、この院子が一定の独立性と高貴性を有することがわかる。1948年4月9日毛沢東、周恩来なども五台山を通った際に、この院子で一晩を過ごしたという^{注4)}。現在ここは「毛沢東路居旧址」という記念館として運営されている(図 5-1-7)(図 5-1-8)。

これらの院子の東に歇山の山海楼、チベット式の文珠髮塔、食堂が存在する。2018年8月の階段では山海楼から食堂に至る細長い一画で改築工事が行われていた。山海楼は 2 階建ての楼閣で、下層の部分はレンガ造り、上層の部分は歇山 3 間の木造建物である。山海楼の東に一棟の門があり、塔院寺全体の東入口として使われている。大白塔と比較すると、東院にある文珠髮塔の規模は非常に小さい。北宋嘉祐 5 年(1060)五台山大華嚴寺壇長の延一(妙濟大師)は『廣清涼傳』を編纂したが、その中には「菩薩化身爲貧女」という一文が収録されている^{注5)}。この一文により、北宋雍熙 2 年(985)に文殊髮塔が修復されたことがわかる。このため、塔は雍熙 2 年以前の創建であったことが確認できる。

以上の塔院寺の現状は如何なる経緯で生まれたのだろうか。特に西院に着目して清代か

ら順を追って述べることにしたい。

第二節 明代の塔院寺

(1) 大白塔の成立

唐代（平安時代初期）に遣唐使として日本から入唐した円仁の書いた『入唐求法巡禮行記』（唐代開成元年・836～大中元年・847）によると、当時大白塔は唐代五台山大花嚴寺 15 子院の一つ、「閣院」という子院に付属した構造物であったことがわかる。また、同書には「閣前有塔、二層八角、莊校珠麗、底下安置阿育王塔、埋藏地下、不許人見」とあり、これによるとこの時の大白塔は 2 階建ての八角形の平面を持つ中国式の仏塔であったと考えられる。大白塔の下には阿育王塔が埋藏されていたという^{注6)}。この後の史料には、大白塔修復工事が絶えず行われたことが記述される。

元代漢民族の大臣であった程文海（または程鉅夫）の編纂した『雪樓集』に「涼国敏慧公神道碑」が収録されている。これによると、塔院寺大白塔は元代大徳 5 年（1301）阿尼哥（アニゴ、涼国敏慧公に封ぜられた）により建設されたという。阿尼哥はネパール出身の匠であり、建設された塔はチベット式であったと考えられる^{注7)}。明代に入って、「重修釋迦文佛真身舍利寶塔碑」（嘉靖 17 年・1538）が造立され、その碑文に以下の記述がある^{注8)}。

（前略）。洪惟太宗文皇帝繼位之初、典御萬方、賓服四夷、不忘付囑、萬機之暇、留心內教、在所淨坊、無不思創佛寺佛塔者也。聞西域有道上師葛兒麻巴希、即命高僧智光贊勅遠迎。三禩來京、論道禰情、頂現神光、種種異事、以佛之敬而敬之。巡陞大寶法王、誥封大自在佛。不樂京居、欲來清涼、與其大聖談道利生。帝知其意、永樂五年、即敕內官監太監揚昇、楊忠、及諸藩省官員、匠役人夫二萬、預來五臺、建大吉祥顯通寺、以待法王居之。法王至此、見靈鷲山前阿育王塔、其形微隘、由是請旨修復、其禰帝心。仍命前項官員、匠役人夫於此營造、凡有所費、皆出自內帑。埴磚百萬、基石千塊、灰數千石、其餘不目。經之營之、不日而成。高二百尺、闊十二丈、圓腹方基、煥然一新、視先有加。慶讚事訖、法王西歸。（後略）。

この史料によると、明代永樂 4 年（1408）12 月^{注9)}「葛兒麻巴希」（テシン・シェクパ）というチベット仏教の活仏が「西域」（チベット）から京師（明代初期の南京、現江蘇省南京市）を訪問した。葛兒麻巴希はチベット仏教カギユ派（噶舉派）の 5 代目教主で、カルマパ 5 世（第 5 世噶瑪巴）と呼称されている。太宗（明代第 3 代皇帝、朱棣）は葛兒麻巴希を「大寶法王」に昇進させ、「大自在佛」に封じた。このように、葛兒麻巴希は高貴な地位を有することになった。その後、葛兒麻巴希は京を離れ「清涼（山）」（五台山）へ行きたいという願いを出し、太宗に許可された。そして、永樂 5 年（1407）太宗は内官監（宦官衙門の一つ）太監（去勢を施された官

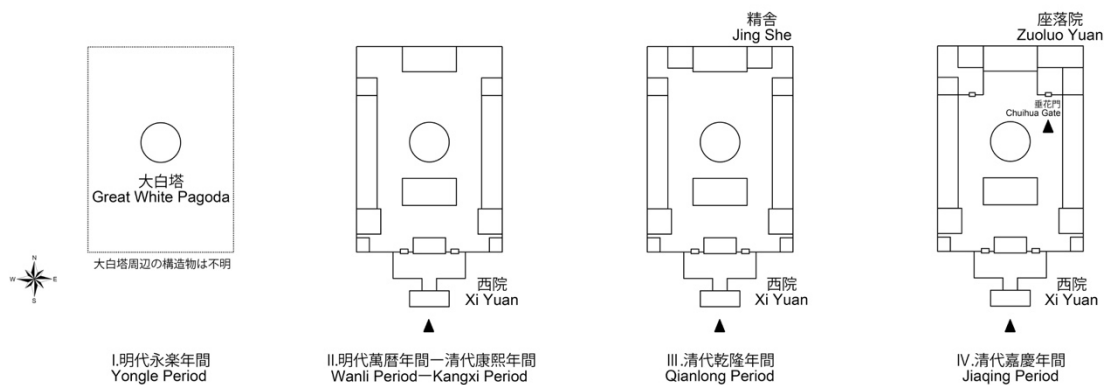


図 5-2-1 塔院寺伽藍変容模式図

吏)の揚昇・揚忠、諸藩省の「官員」(役人)、および「匠役」(大工)、「人夫」(労働者)、合わせて2万人を五台山へ派遣し、葛兒麻巴希の住居として「大吉祥顯通寺」(顯通寺)を建立したという。翌永樂6年、葛兒麻巴希はチベットへ帰った^{注10)}。

五台山に入った葛兒麻巴希は、台懷地区の靈鷲山前に位置する阿育王塔が「微隘」(小さくて狭い)であることに気づき、この塔を修復したいとの願いを太宗に提出した。太宗は修復工事を許可し、顯通寺の建設に携わっていた「官員」「匠役」「人夫」などに阿育王塔を修復せよと命じた。建設経費は「内帑」(皇室の所有する財貨)から支出された。修復工事には大量の「延磚」(レンガ)、「基石」(石材)、「灰」(漆喰)などが使用され、修復された塔は高さ200尺(約60メートル)、幅12丈の規模に達したという(図5-2-1 I)。

「煥然一新、視先有加」という記述から、修復された塔は新たな外観を獲得し、ボリュームも増加したことがわかる。2万人もの人々が携わった工事を通じて塔は面目を一新したのであろう。また、修復された塔の中央部分は八角形の平面から円形に、基壇は方形に変わり、現在のチベット式の大白塔の形状になったと推定される。つまり、現存大白塔は永樂5年の修復によって成立したものと考えられる^{注11)}。チベット仏教の伝来とともに、唐代の2階建て八角形の中国式仏塔は円形のチベット式仏塔に変わったのである。

(2) 塔院寺の建立

明代前期の史料に塔院寺は見出されないが、永樂年間(1403~1424)以降、大白塔の修復工事は度々行われていたことがわかる^{注12)}。明代後期を迎えた頃、内閣首輔(宰相、皇帝の政務を補佐した最高位の官吏)の張居正は「敕建大塔院寺碑記」(萬曆10年・1582)という碑文を書いた。この碑文を刻んだ石碑は現在の延壽殿前に残り、塔院寺建立の経緯を語っている^{注13)}。

(前略)。昔阿育王獲佛舍利三十(千)餘顆、各建塔藏之、散布華夷、今五臺靈鷲山塔是其一也。我聖母慈聖宣文皇太后、前欲創寺於此、為穆考薦福、今上祈儲、以道遠中止、遂于都城西建慈壽寺以當之、

臣居正業已奉敕為之記。顧我聖母至性精度、不忘始願、復遣尚衣監太監范江、李友輩、捐供奉餘貲、往事莊嚴、敕建大塔院寺。前為山門、天王殿、內大慈延壽寶殿、大慈延壽護國佑民釋迦文佛舍利寶塔、大藏經閣、旁為鐘鼓樓、祖師、伽藍殿、外為十方院、延壽堂、諸圍廊、齋舍、庖湏罔不悉備、復賜園地以供常住之需。工始七年九月十五日、成于十年七月二十七日、計費金錢、出自內帑。聖母復命臣記之。(後略)。

これによると、慈聖宣文皇太后（孝定太后とも呼称。李彩鳳、生没年 1546～1614 年。明代第 13 代皇帝穆宗・朱載堉の妃嬪、第 14 代皇帝神宗・朱翊鈞の生母）が「為穆考薦福、今上祈儲」（夫の穆宗の冥福を弔い、息子の神宗の後継ぎの誕生を祈る）のために、尚衣監（宦官衙門の一つ）太監の範江、李友輩を五台山へ派遣し、塔院寺を創建したことがわかる。塔院寺の建設には萬曆 7 年(1579) 9 月 15 日から同 10 年 (1582) 7 月 27 日にかけておおよそ 3 年間で費やされた。そして、建設経費は皇室から支出されたという。

建設された塔院寺は山門、天王殿、大慈延壽寶殿、大慈延壽護國佑民釋迦文佛舍利寶塔（大白塔）、大藏經閣の主な建物が配列され、配列の順番から判断して寺院には 2 進の院子があり、天王殿と大慈延壽寶殿は第 1 進の院子を構成し、大慈延壽寶殿と大藏經閣は第 2 進の院子を囲む。大白塔は第 2 進の院子の中心に位置したと推定される（図 5-2-1 II）。大白塔が所在する第 2 進の院子は中国式の伽藍配置とチベット式の塔が融合した塔院であったと見なすことができる。また、この寺院が「塔院」と名乗ることからも、大白塔は塔院寺を構成する最重要の構成要素であったことがわかる。碑文では、大白塔は阿育王（古代インドのマウリヤ朝第 3 代の王、アショーカ王）の獲得した仏舎利をおさめる諸塔の一つだったことも示している。

建設当初から、鐘樓、鼓樓、祖師殿、伽藍殿も配置され、寺院の外には十方院、延壽堂、圍廊（回廊）、齋舍、庖（厨房）、湏（浴室）が備えられ、皇室から下賜された園地も存在したことがわかる。このため、塔院寺は建設当初から現在の状態に近い中国式の伽藍配置であったと判断される。チベット式の仏塔と中国式の伽藍とが融合した寺院は、慈聖宣文皇太后の祈願により誕生した。

ちなみに、大白塔頂に掛けられている「大塔頂銅碑」（萬曆 10 年・1582）という銅碑の碑陰（裏側）には「開山第一代住持善世圓廣」とあり^{注14}、塔院寺の初代住持は圓廣で、その名前から中国仏教僧であり、寺院も中国仏教の寺院であったことが明らかである。塔院寺はたしかに萬曆 10 年に完成したとみて良いだろう。

塔院寺はチベット式の塔が先に存在し、塔が中心になるよう、その後伽藍が計画されたという特徴を持つ。明代チベット仏教活仏の権威と、皇帝または皇室の権力が塔院寺堂塔の建

立を促進した。活仏の権威によって修復されたチベット式の塔を媒介として、チベット仏教が中国仏教寺院への浸透を果たした例と言えよう。

第三節 順治・康熙年間の塔院寺

清代になると、皇室はチベット仏教を強く信仰し、皇室の尊崇によって五台山のチベット仏教はさらに発展し、山内の建築の多くが整備された。聖祖は康熙 22 年 2 月、同 22 年 9 月、同 37 年 2 月、同 41 年 2 月、同 49 年 2 月の計 5 回西巡をおこなったが、塔院寺には訪問しなかった^{注 15)}。チベット仏教僧の老藏丹巴によって書かれた『清涼山新志』(康熙 40 年・1701) の中にも、「大寶塔院寺、顯通寺之南、五峰之中、有育王所置佛舍利塔及文殊髮塔、因以爲名」という簡略な記述があるのみである^{注 16)}。康熙年間の塔院寺は皇帝にあまり重視されていなかったとみられる。

この時期塔院寺については、「重修五臺山佛舍利塔碑記」(康熙 3 年・1664) と「重修佛舍利碑」(康熙 28 年・1689) との、2 基の石碑に刻まれた碑文が残されている。これによると、康熙年間に塔院寺の大白塔は 3 回修復工事が行われたことが確認される。「重修五臺山佛舍利塔碑記」は現在大白塔下の南洞にあり、当時福建省布政司左布政(省の地方官)であった何中魁の手に成る。碑文によると、何中魁の「母舅」(母親の兄弟)である徐守命(居士)は五台山へ参拝した際に、壊れた大白塔頂を目のあたりにし、塔の修復を願い出たという。この願いが何中魁に伝えられたのちに、何中魁と友人の山西省総督(省の長官)の黃正己は各省、府、州、縣の役人の同僚を動員し、「錢糧」(金銭と糧食)を集めて大白塔を修復したことがわかる。この時の塔院寺旧住持は寂茂、新住持は性運であったという^{注 17)}。

つぎに、大慈延壽寶殿前に建てられている「重修佛舍利碑」には以下の記述がある^{注 18)}。

夫敕建大寶塔院者、乃臺山之勝蹟、波師之祖庭也。師明甲戌之變、携杖南游、路過連鎮而法教大行、緇素咸歸。(中略)。于順治十四年三月十五日、諸山各刹及闔藍法乳、恭請入山主持院事。由是仰視殿貌將危、金容改色、即出褫資數百兩、欲為一新、聯盡報本之誠。未幾而安逝焉、遺囑其徒雲光、昱光督工營修。三年而告成大慈延壽寶殿、牌樓、榜棚、風水樓、翻瓦天王殿、伽藍殿、祖師殿、鐘鼓二樓等、輝輝煌煌、巍巍堂堂、較諸往者、殊稱改觀。昱光道兄又慨發弘願、惟冀其師悟無生忍、入不退地、更祈自身康泰、福壽彌增、竭出己囊三百兩、作重修轉輪藏閣之費。茲欲立碑以記其事、乞余一言、永垂不朽。(後略)。

これによると、「波師」(中国仏教僧、雲光、昱光の師)は順治 14 年(1658) 3 月「祖庭」(出身の寺院)の塔院寺に戻った後、塔院寺の「殿貌將危」(殿堂の面貌が危ない)の状況を見て、「褫資數百兩(銀)」の私費で殿堂を修復したい意欲を持っていた。しかし、間も無く波師は他

界した。弟子の雲光、昱光は波師の遺志を継ぎ、3年をかけて大慈延壽寶殿、牌楼、榜棚、風水樓（現山海楼）を修復し、天王殿、伽藍殿、祖師殿、鐘・鼓楼などの建物の瓦を葺き替えたことがわかる。この後、石碑が樹立された康熙28年に昱光は「竭出己囊三百兩（銀）」の私費で「轉輪藏閣」（藏經閣、閣の中に輪藏が設けられる）を修復したという。以上、師弟二代にわたる修復工事に言及した碑文に記された建物の名から、順治年間の終わりから康熙年間にかけての塔院寺の西院は、明代中国式の伽藍配置を維持していたと推定される（図5-2-1 II）。

順治年間に世祖は西巡を行わず、康熙年間の聖祖も塔院寺には訪問しなかった。順治・康熙年間に塔院寺は皇帝に重視されていない。朝廷の代わりに、寺院建築の修復は地方の役人と僧侶が担うことになる。そして、康熙年間の歴代住持の名から塔院寺の住持は中国仏教僧であり、寺院も中国仏教の寺院として維持されていたことがわかる。

第四節 乾隆年間の塔院寺

高宗は乾隆11年9月、同15年2月、同26年2月、46年3月、51年3月、57年3月の計6回西巡を行ない、塔院寺を訪問した^{注19}。『清涼山小志』（乾隆11年・1746）には塔院寺について、次の内容が記述されている^{注20}。

塔院寺去顯通寺南半里。僧人住持。此寺以塔興。塔創自漢時。唐宋以來。修飾不替。神宗復建。上轟雲霄。我朝重修。更加美麗。前殿上懸聖祖皇帝御書匾曰景標清漢。皇上御書匾曰攬妙鬘雲。後殿上懸聖祖聖祖皇帝御書匾曰金粟來儀。（中略）。後殿又有轉輪藏。塔上刊藏經一部。推一轉。如讀藏經一部。（後略）。

この時塔院寺の住持は「僧人」（中国仏教僧）であり、「塔」（大白塔）の存在で寺が興ったとされている。寺内の後殿に「轉輪藏」（輪藏）が設けられ、大藏經一部が所蔵されていたという。この後殿が前述の藏經閣である。また、康熙年間聖祖が「景標清漢」「金粟來儀」の額を塔院寺へ下賜したのについて、高宗も「攬妙鬘雲」の額を下賜したとあり、これらの額は前殿、後殿に掛けられていた。「攬妙鬘雲」の中、「攬妙」は仏法の不思議な奥義を手中に収める意味で、「鬘雲」は天空の高さを比喩するのだろう。高宗は巨大な大白塔を通じて仏法の奥義を究めることができるといった考えを持っていたと言って良いだろう。

また、『欽定清涼山志』（乾隆50年・1785）は前代の山志と比べると、塔院寺の伽藍配置をやや詳しく記録している^{注21}。

大寶塔寺。在靈鷲峰下。（中略）、亦曰塔院寺。內有佛舍利塔、左有文殊髮塔、佛足碑。後殿有轉輪藏。內外山門六楹、鐘鼓樓各一、延壽殿五楹、配廡六楹、藏經樓五楹、禪房、僧舍三十四楹。山門外千佛

閣三楹、文殊殿三楹、龍王祠三楹、僧房七十楹。寺旁精舍三楹。本朝康熙中、聖祖御書額曰景標清漢、後殿曰金粟來儀。乾隆十五年、御書額曰攬妙鬢雲。寺前有橋曰西巡橋。

寺内には「佛舍利塔」(大白塔)、寺院の左(東側)に「文殊髮塔」があったという。外側と内側の山門を合わせて6間の規模を持つ。山門を入ると、1棟の鐘樓、1棟の鼓樓、5間の延壽殿、6間の配廡、5間の藏經樓、34間の僧舎、および禪房が寺院を構成していた^{注22)}。山門の外側には、3間の千佛閣、3間の文殊殿、3間の龍王祠、70間の僧房が存在したことがわかる。山志に記された建物の名と間の数から、乾隆年間の塔院寺全体の規模は前代よりやや拡大されたが、西院は2進の院子で構成され、大白塔は第2進院子に位置する伽藍配置を維持していたと推定される。

一方、寺院の傍に3間の「精舎」という施設が設けられ、寺前に「西巡橋」という橋梁が有したという。同時期の五台山では、菩薩頂、鎮海寺などの寺院にも精舎が備えられており、精舎は五台山を訪問した高宗を迎えるために、寺院に建てられた休憩のための建造物であったことは明らかである。「寺旁精舎」という記述から、後述の嘉慶年間の座落院の位置を考慮すると、この精舎は西院の中心軸の東側に位置したと考えられる(図5-2-1 III)。

高宗は計6回五台山を訪問し、塔院寺に関して自ら「登塔院寺塔」(乾隆15年・1750)「戲題寶塔院」(同26年・1750)「寶塔院」(同46年・1781)「寶塔院」(同51年・1786)「寶塔院」(同57年・1792)の5篇の詩文を書いた。これらの詩文には、大白塔と文殊髮塔の描写が繰り返されている。高宗が2基の塔を好んでいたことがわかる^{注23)}。特に「寶塔院」(同57年・1792)の「兩塔今惟一尚存、既成必壞有名言寶塔寺在靈鷲峯下、云有阿育王所置佛舍利塔、左有文殊髮塔、見一統志、今祇存其二、物之成壞、固各自有其時、然亦未識、今所存者為何塔也、如尋舍利及絲髮、未識文殊與世尊」によると、乾隆末年には大白塔と文殊髮塔のうち、1基のみ残り、もう1基は崩壊していたことがわかる^{注24)}。大白塔の巨大な規模を持つため、もし壊れていたとすれば、その崩壊の様子や再建の記録が残るはずである。しかし、その記録は見当たらないので、壊れた方は文殊髮塔であったと推定される。

乾隆年間、高宗は大白塔を慕い、度々塔院寺を訪問した。塔院寺は皇帝に重視されるようになったのである。この時期の塔院寺の伽藍の大きな変化は、高宗の訪問によって皇帝の空間である精舎が増築されたことである。精舎という施設を介して皇帝権力が塔院寺の空間に導入された。こうして、乾隆年間の塔院寺は中国式伽藍配置、大白塔が所在するチベット式の塔院、皇帝の休憩場である精舎の三つの性格が異なる空間を有することになった。

第五節 嘉慶年間の塔院寺

嘉慶16年3月に仁宗は西巡を行い、塔院寺を訪問した^{注25)}。この際、塔院寺には20名の

中国仏教僧がいたという^{注26)}。巡幸の前に五台山では行宮、尖營、寺院が修繕された。嘉慶15年(1810)に作成された「五台山行宮座落地盤図」の中の一枚に「塔院寺地盤図」(以下「地盤図」)があり、塔院寺西院の配置(影壁、牌楼を除き)が描かれている(図5-5-1)^{注27)}。一方、嘉慶17年に編成された『西巡盛典』の巻15には1枚の「塔院寺図」(以下「盛典図」)が収録されている^{注28)}。この絵図は塔院寺を立体的に描写する版画であり、西院と東院を合わせて寺院の全体を描いている(図5-5-2)。2枚の図に表現されている伽藍配置や、建物の規模、屋根形、および建具などの細部には相違がある。

まず、両図によると、塔院寺西院の配置が明らかになる。門前に影壁、牌楼が存在し、3間の穿堂を潜ると山門が現れる。地盤図によると、山門は3間の規模であったことがわか

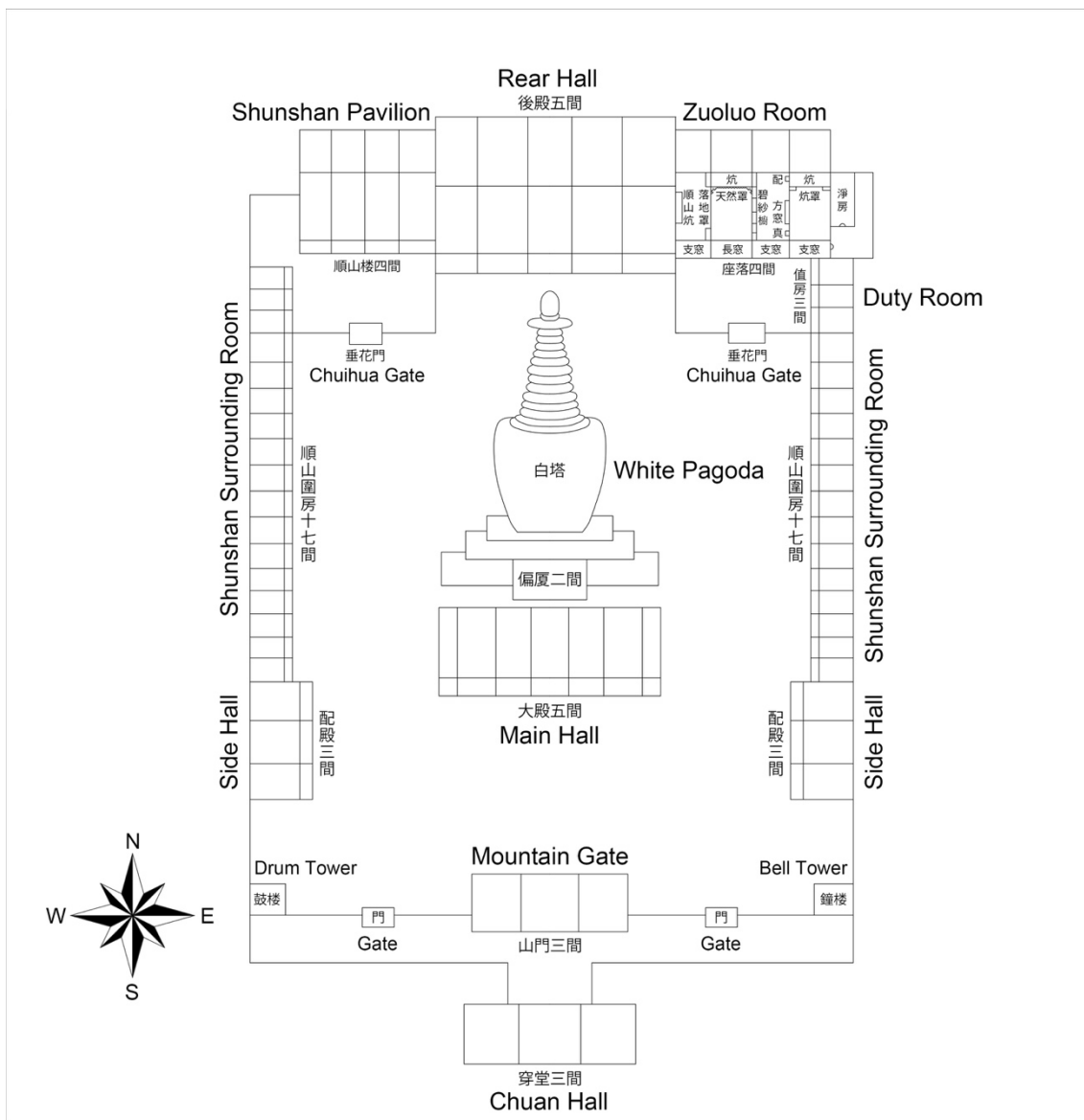


図5-5-1 塔院寺地盤図(嘉慶15年・1810、筆者写)

る。山門の左右には2棟の門が設けられていた。山門から大殿、白塔（地盤図では白塔の南側に2間の偏厦が付属）、後殿が中心軸上に配列されている。鐘楼、鼓楼、計6間の配殿、計28間の順山圍房が左右対称に中心軸の両脇に配置されていた。山門、大殿、および左右にある配殿は第1進の院子を構成し、大殿、後殿、および左右にある順山圍房は第2進の院子を囲む。チベット式の白塔は第2進院子の中央に位置していた。盛典図から、鐘・鼓楼は廡殿2階建てで、穿堂・山門・大殿・後殿・配殿・順山圍房は硬山であったことがわかる（表5-5-1）。

後殿の左右には二つの院子があった。西側の院子は壁、垂花門、順山楼、順山圍房によって構成されていた。一方、東側の院子の上には「座落」とあるので、それを座落院と名づけて良いだろう。地盤図により、座落院は南向きの淨房（トイレ）が付属した4間の座落、西向き3間の值房、垂花門で構成されていたことがわかる。左右対称の伽藍配置から、座落院は後殿西側の院子のような建物を改築したと推定される。

座落院は仁宗の巡幸のために、寺内に備えられた施設であった。塔院寺のほか、仁宗が訪問した鎮海寺、殊像寺、菩薩頂、大螺頂、金剛窟、普樂院、羅睺寺、顯通寺、壽寧寺、玉花

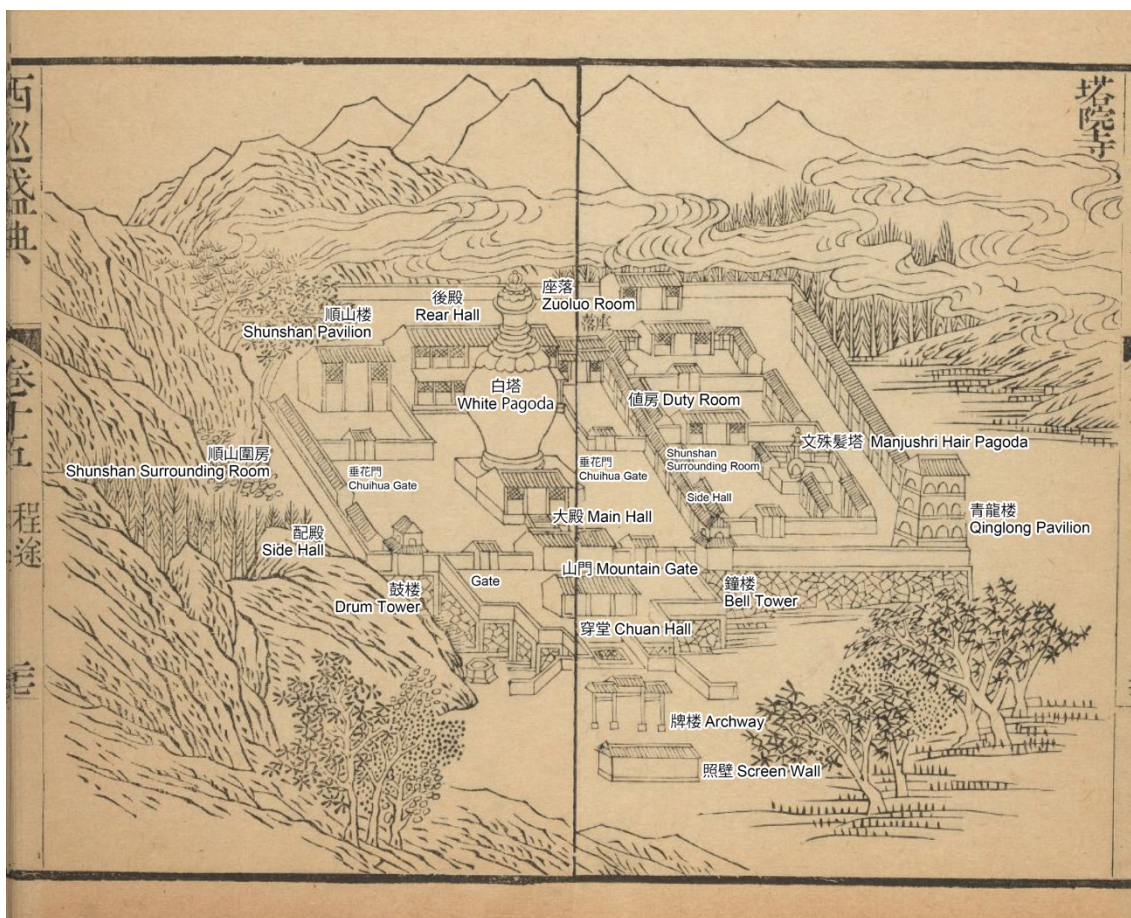


図 5-5-2 塔院寺図（嘉慶 17 年・1812）

池にも座落院があったと見られる^{注29)}。座落院の中で、座落は皇帝の休憩室、值房は守衛あるいは使用人の控室であったと考えられる。盛典図から、座落は鋳屋根、值房は歇山であったとみられる。この座落院は乾隆年間の精舎から発展したものであろう。なお、座落院の南にある垂花門は寺院全体の表門ではなく、寺域の内部に設けられ、内部空間を内・外に区分する意匠である^{注30)}。このため、垂花門の内は皇帝のための私的な空間、垂花門の外は寺院の公的な空間と考えられ、独自の門を持つ座落院は一定の独立性を有したとも言える。

両図には建築の組物が描かれていない。しかし、盛典図に描かれた鐘楼、鼓楼などの建物の門、窓には、アーチが施されている。アーチの使用は明代以来の中国式の伝統によるものと考えられる^{注31)}。大殿、後殿などの建物には菱形模様の窓が施され、各院子の出入り口としている門は両開きの板扉であったように見える。盛典図に描かれた菱形模様の窓、板扉などの建具は、古来の中国式であると判断される^{注32)}。一方、地盤図には座落の室内・外に施されていた建具と室礼が詳しく記述されている。これにより、座落には支摘窓（原図には「支窓」）、櫺扇（現図には「長窓」）の建具が設けられていたこともわかる。珍しい偶数4間の座落の入り口は、櫺扇を用いた一間である。支摘窓と櫺扇は清代民家と宮殿に多用された建具と判断できる^{注33)}。

座落の室内空間は、まず入り口の間が明間になっている。明間の中には、櫺扇の反対側である北側に炕があり、炕の前に天然罩が設けられていた。落地罩を潜ると西次間に入るようになっていた。西次間にも妻壁（山牆）に接して1基の炕が置かれていたと見られる。明間の東側に設けられていた碧紗櫺を開くと、東次間に入る。碧紗櫺は室内に設けられる櫺扇で、6枚から10枚以上の扉で構成されるが、中央の2枚しか開かず、空間を完全に分隔する間仕切りである（図5-5-3）。このため、東次間から先の部分は私的な空間であったと推定される。そして、東次間と東梢間（側端の一間）の間に配門、真門、方窓が施され、東梢間には炕と炕罩が設けられていた。東次間から東梢間に行くには、真門を通らなければならない。このため、東次間と東梢間の二部屋を合わせて皇帝の私的な寝室であったと考えられる。なお、座落の外側に附属された淨房には独立の門（原図に半円に描く）が設けられていた。つまり、座落院は皇帝のために色々工夫された施設であった。

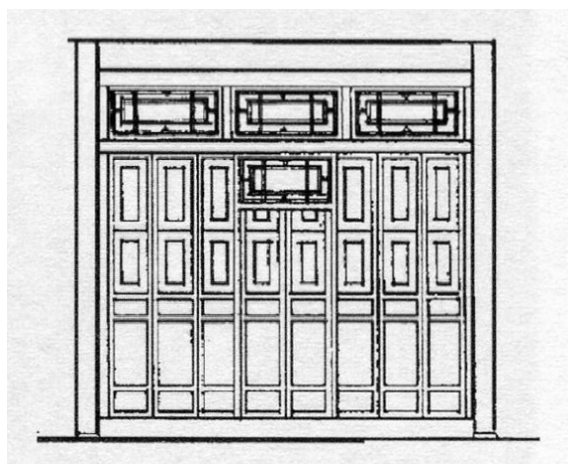


図5-5-3 碧紗櫺

嘉慶年間の塔院寺も前代に続き、中国式の伽藍配置、チベット式の塔院、皇帝のための座落院の三要素で構成された。一方、塔院寺の建築では、中国式の屋根が掛けられ、建築の建具・室礼や、寺院全体の配置も中国式だったことがわかる。チベット式の組物、装飾が塔院寺建築に導入されたかどうかは明らかではないが、チベット式が確認されるのは西院にある白塔であった。

表 5-5-1 塔院寺の屋根形と建築の規模

建物	嘉慶 15 年・1810	嘉慶 17 年・1812 年	2018 年 8 月
	塔院寺地盤図	「塔院寺図」	塔院寺配置図
影壁	-	歇山	硬山
牌楼	-	硬山、3 間	歇山、3 間
穿堂	3 間	硬山、3 間	硬山、3 間
山門	3 間	硬山	歇山、3 間
大殿	5 間	硬山、3 間	歇山、5 間
白塔	チベット式	チベット式	チベット式
後殿	5 間	硬山、2 階建	硬山、5 間
鐘楼	?	廡殿、2 階建	歇山、2 階建
鼓楼	?	廡殿、2 階建	歇山、2 階建
配殿（東側）	3 間	硬山	硬山、3 間
順山圍房（東側）	14 間	硬山	硬山、13 間
配殿（西側）	3 間	硬山	硬山、3 間
順山圍房（西側）	14 間	硬山	硬山、13 間
垂花門	?	硬山	-
座落	4 間	鋸屋根、3 間	硬山、2 階建、5 間
值房	3 間	硬山、3 間	硬山、3 間
垂花門	?	硬山	-
順山楼	4 間	硬山、2 階建、3 間	硬山、2 階建、4 間
順山圍房	3 間	硬山	硬山、3 間

注) 「？」は建物が存在したが、屋根形と建築の規模は不明なもの。「-」は建物がないもの。

第六節 小結

明代に皇帝は五台山を訪問しなかった。塔院寺には皇帝権力の空間がなかった。しかし、

巨大なチベット式の仏塔と中国式の伽藍配置の融合は皇室によって果たされた。この後、乾隆年間に皇帝の訪問に介して皇帝権力の空間が寺院に導入された。嘉慶年間になると、塔院寺は中国式伽藍の中にチベット式の塔院、皇帝のための座落院の二つの空間を包摂するような構成を有するに至った。三つの空間はそれぞれ中国仏教、チベット仏教、皇帝権力と対応するが、まずチベット式の塔が先にチベット仏教カギュ派の活仏のカルマパ5世の願い、および皇帝の援助によって成立し、のちに中国式の伽藍が建立され、最後に皇帝権力の空間が設けられた。

一般の俗人に開放されない、霊塔殿に設けられたチベット仏教高僧の霊塔に比して、経典、宝物などをおさめる大白塔は一定の開放性を有し、この塔が所在する塔院は信者、俗人なども利用できる儀式的空間であったと考えられる。ただし、塔院寺は建立されてからずっと中国仏教寺院であり、塔院寺の形式は南北朝時代に流行っていた、塔が伽藍の中央または中心軸に配置される配置ルールを想起させるものである。

一方、外来の空間として寺院に導入された皇帝権力の空間は四合院形式を採用し、西院の北東の一角に配置されていた。寺院の規模を拡大する場合、南北または東西の軸に沿って複数の院子が増築されるという伝統的な増殖に対して、従来の院子の中に、もう一つの性格が異なる院子を増築したことが塔院寺の特徴である。

チベット仏教と皇帝権力の空間へは、山門から中国仏教の空間を通ることにより、はじめて到達することができる。このため、二要素の空間は中国仏教の空間に従属する形で組みこまれたと言える。異質な空間ではあるが、寺院全体としてみると、基本的に中国の伝統的合院式の伽藍配置が崩されることはなかった。なお、皇帝権力の空間の前に建てられた垂花門は結界として機能し、その外の公的な性格を持つ空間に対し、内の皇帝のための私的な空間を画したのは鎮海寺と同様である。そして、皇帝権力の空間が高貴なスペースとして伝統的合院式の伽藍配置を崩さぬままに皇帝権力の空間が入り込んだとの解釈が成り立つのも同様である。

注

- 注 1) 崔正森、『五台山一百零八寺』、山西省科学技術出版社、2013 年、頁 12。
- 注 2) 王貴祥、賀從容など、『中国古建築測繪十年 2000-2010』、清華大学出版社、2011 年、頁 270。
- 注 3) 『建築大辞典』、彰国社、1993 年、頁 797。王效青、吳銳など、『中国古建築術語辞典』、山西人民出版社、1996 年、頁 447。
- 注 4) 閻献晨、「毛主席、周副主席路居五台山」、『五台山研究』、1986 年 04 期、頁 28、48。
- 注 5) 延一、『廣清涼傳』、北宋嘉祐 5 年 (1060)、卷中。
- 注 6) 円仁、『入唐求法巡禮行記』、広西師範大学出版社、2007 年、頁 90-95。関野貞、常盤大定、『支那文化史蹟 解説第一卷』、法蔵館、1939 年、頁 72-75。
- 注 7) 程文海、「凉国敏慧公神道碑」、『雪楼集』、元代至正 14 年 (1354)、卷 7。また、趙改萍、『山西佛教史 五台山卷』、中国社会科学出版社、2014 年、頁 58。王貴祥、『中国漢伝仏教建築史』、清華大学出版社、2016 年、頁 1,759--1,7760。孫大章、『中国仏教建築』、中国建筑工業出版社、2017 年、頁 274 を参照。
- 注 8) 趙林恩 (収録點校)、『五台山碑文 (上)』、山西人民出版社、2016 年、頁 44-46。
- 注 9) 崔正森、『五台山仏教史(下)』、山西人民出版社、2000 年、頁 621。王森、『西藏佛教發展史略』、中国藏学出版社、2002 年、頁 117。
- 注 10) 王森、『西藏佛教發展史略』、中国藏学出版社、2002 年、頁 117, 259。
- 注 11) 楊玉潭、周新玉など、『五台山寺庙大観』、山西省人民出版社、1985 年、頁 45 を参照。
- 注 12) 趙林恩 (収録點校)、『五台山碑文 (上)』、山西人民出版社、2016 年、頁 45-52。
- 注 13) 趙林恩 (収録點校)、『五台山碑文 (上)』山西人民出版社、2016 年、頁 52-56。
- 注 14) 趙林恩 (収録點校)、『五台山碑文 (上)』山西人民出版社、2016 年、頁 52。
- 注 15) 鄒愛蓮 (主編)、『清代起居注・康熙朝』、中国第一歴史档案館蔵、第 14・15 冊、北京所蔵、中華書局、2009、第 14 冊、頁 B006566-B006572。第 15 冊、頁 B007275-B007302。(清) 庫勒納など、『清代起居注・康熙朝』、国立故宮博物院珍藏、臺北所蔵、聯經出版事業公司、2009 年、第 11 冊、頁 T06235-T06244。第 17 冊、頁 T09205-T09222。おな、林士鉉、「中華衛蔵：清仁宗西巡五臺山研究」、『故宮學術季刊』、第二十八卷第二期、民國九十九年冬季 (2010)、頁 147-212、2010、頁 147-212 を参照。
- 注 16) 老藏丹巴、『清涼山新志』、全 10 卷、清代康熙 40 年 (1707)、卷 2。
- 注 17) 趙林恩 (収録點校)、『五台山碑文 (上)』、山西人民出版社、2016 年、頁 64-67。

- 注 18) 趙林恩 (収録點校)、『五台山碑文 (上)』、山西人民出版社、2016 年、頁 69-70。
- 注 19) 中国第一歴史档案馆編、『乾隆帝起居注』、広西師範大学出版社、2002 年、第 5 冊、頁 278-282。第 9 冊、頁 34-38。第 20 冊、頁 54-71。第 31 冊、頁 100-105。第 39 冊、頁 86-95。なお、林士鉉、「中華衛藏：清仁宗西巡五臺山研究」、『故宮學術季刊』、第二十八卷第二期、民國九十九年冬季 (2010)、頁 147-212 を参照。
- 注 20) 愛新覺羅弘晝 (和碩和親王)、『清涼山小志』、全 1 卷、乾隆 11 年 (1746)、序頁 1-2、頁 23-24、33。
- 注 21) 『欽定清涼山志』、全 22 卷、清代乾隆 50 年 (1785 年)、卷 10。
- 注 22) 張家驥、『簡明中国建築論』、江蘇人民出版社、2012 年、頁 420 により、「楹」は「間」である。
- 注 23) 『景印 文淵閣四庫全書』、台灣商務印書館、1983 年、集部二四二、別集類、第一三〇三冊、頁 1, 303-388。集部二四四、別集類、第一三〇五冊、頁 1, 305-442。集部二四七、別集類、第一三〇八冊、頁 1, 308-592。集部二四八、別集類、第一三〇九冊、頁 1, 309-614。集部二五〇、別集類、第一三一〇冊、頁 1, 311-58。
- 注 24) 『景印 文淵閣四庫全書』、集部二五〇、別集類、第一三一〇冊、台灣商務印書館、1983 年、頁 1, 311-58。詩文にある小文字部分は高宗自らの注釈である。
- 注 25) 『大清仁宗睿 (嘉慶) 皇帝實錄 (六)』、華聯出版社、1964 年、頁 3, 550-3, 556。中国第一歴史档案馆編、『嘉慶帝起居注 (一六)』、広西師範大学出版社、2006 年、頁 132-147。
- 注 26) 董誥など、『西巡盛典』、全 24 卷、嘉慶 17 年 (1812)、卷 10。
- 注 27) 余思奇、趙詩迪、「「五台山行宮座落地盤圖」研究—繪製内容、年代および繪製背景考」、『華中建築』、2019 年 09 期、頁 110-113。
- 注 28) 董誥など、『西巡盛典』、嘉慶 17 年 (1812)、ハーバード大学図書館蔵、巻首。
- 注 29) 董誥など、『西巡盛典』、嘉慶 17 年 (1812)、ハーバード大学図書館蔵、巻 15。
- 注 30) 馬炳堅、『北京四合院建築』、天津大学出版社、2004 年、頁 70-71。
- 注 31) 梁思成、『中国建築史』、三聯書店、2018 年、頁 265、267。なお、劉敦楨、『中国古代建築史 (第二版)』、中国建筑工業出版社、1984 年、頁 407-408 を参照。
- 注 32) 李誠 (撰)、王海燕 (注譯)、『營造法式譯解』、華中科技大学出版社、2014、巻 6、巻 7、巻 29。なお、梁思成、『中国建築史』、三聯書店、2018 年、頁 314-315 を参照。
- 注 33) 孫大章、『中国古代建築史 第五卷 清代建築 (第二版)』、中国建筑工業出版社、2016 年、頁 465。馬炳堅、『北京四合院建築』、天津大学出版社、2004 年、頁 104。

図表出典

第一節

図 5-1-1 塔院寺の位置。出典：Ernst Boerschman、『Lageplane Des Wutai Shan Und Verzeichnisse Seiner Bauanlagen in Der Provinz Shanxi』、Harrassowitz Verlag、2012 年により、筆者作成。

図 5-1-2 塔院寺配置図（2018 年 8 月）。出典：2018 年 8 月の現地調査により、「塔院寺配置図」、『五台山寺庙大観』、山西人民出版社、1985 年、頁 44 と「塔院寺平面図」、『中国古建筑测绘十年 2000-2010（上）』、清华大学出版社、2011 年、頁 270 を参考に、筆者作成。

図 5-1-3 大慈延壽宝殿。出典：筆者撮影。

図 5-1-4 大蔵経閣。出典：筆者撮影。

図 5-1-5 大白塔。出典：筆者撮影。

図 5-1-6 大白塔を右繞する人。出典：筆者撮影。

図 5-1-7 毛沢東路居旧址。出典：筆者撮影。

図 5-1-8 室内の毛沢東半身像を礼拝する僧侶。出典：筆者撮影。

第二節

図 5-2-1 塔院寺伽藍変容模式図。出典：筆者作成。

第五節

図 5-5-1 塔院寺地盤図（嘉慶 15 年・1810）。出典：39×38.2 センチ、中国国家図書館蔵。英語を追記した。

図 5-5-2 塔院寺図（嘉慶 17 年・1812）。出典：「塔院寺地盤図」、中国国家図書館蔵と重修青龍樓記、『五台山碑文（上）』、山西人民出版社、2016 年、頁 73 を参考に、董誥など、『西巡盛典』、嘉慶 17 年（1812）、巻 15、「塔院寺図」に建物の名称を加筆した。

表 5-5-1 塔院寺の屋根形と建築の規模。出典：筆者作成。

図 5-5-3 碧紗櫺。出典：孫大章、『中国古代建築史 第五卷 清代建築（第二版）』、中国建筑工業出版社、2016 年、頁 470。

第六章 結論

第一節 2 空間の受容

五台山は従前より中国仏教の聖地で、夥しい数の中国仏教寺院が五台山五台、台外、台懐の三つの部分に広く分布していた。そこに、元代以降、チベット仏教の伝来に伴い、チベット仏教の空間も五台山の寺院に定着した。さらに清代には皇帝の西巡とともに、皇帝権力の空間が五台山の寺院に定着した。

中心軸があり、建築が左右対称に配置される合院式の配置ルールが 2000 年にわたって変わらぬ中国仏教寺院に対して、チベット仏教・皇帝権力の二つの空間は後に持ち込まれたものである。中国仏教寺院はこの二つの空間を受容していた。受容の過程では、チベット式の仏塔は中国式の伽藍配置と融合し、塔院という形式で寺院に現れた。皇帝権力の空間は建築様式としては四合院形式を採用し、院子の形式で寺院の外と寺院の中の二つのパターンで増築されていた。

しかし、塔院寺の場合では、まずチベット式の塔が先に修復され、のちに中国式の伽藍が建立された。この場合中国仏教の空間がチベット仏教の空間を受容したと言えないが、伽藍が形成する過程は、塔院寺は第一章に触れた北京にある妙応寺（元代大都万安寺）と似る。チベット式の塔が先に成立し、のちに中国式の伽藍配置と融合するのは、チベット仏教の空間が中国内地に導入された過程におけるひとつのパターンであったと指摘すべきであろう。

第二節 3 空間の特質

(1) 中国仏教の空間の主体性

清代の五台山には、チベット仏教寺院に比して中国仏教寺院の数は圧倒的に多かった。チベット仏教の空間のみが存在する寺院 (T)、チベット仏教・皇帝権力の空間が併存する寺院 (T・E)、中国仏教・チベット仏教の空間が併存する寺院 (C・T) の三つのタイプの寺院も存在しないことを勘案すれば、中国仏教の空間は五台山寺院の主たる空間原理であったと言える。その上で、中国仏教の寺院配置ルールは崩されず、チベット仏教・皇帝権力の空間を包摂し、性格が異なる三つの空間の間に激しい対立が生じぬままに融合を果たしていた。中国仏教の空間が異質な空間に対して一定の主体性を保ちつつ、包容性をも示したとすることができよう。

(2) チベット仏教の空間の単一性

清代五台山では純粋なチベット式を持つ寺院は新築されていない。いずれの寺院も、建物

の屋根、室外の建具、室内の室礼や、寺院全体の配置も中国式であった。チベット式の組物、装飾が寺院建築に導入されたかどうかは明らかではないが、唯一チベット式の仏塔のみが伝統的なチベット仏教の要素として取り込まれている。チベット式の仏塔と中国式の伽藍配置で構成された塔院だけが五台山におけるチベット仏教の空間である。

(3) 皇帝権力の空間の高貴性

五台山の寺院では、垂花門を用いて空間を画することによってその内にある皇帝権力の空間の高貴性が示されていた。また、古代中国では黄色は皇帝の色彩で、原則として宮殿建築にしか使用できない。一部の五台山寺院が寺院全体の瓦を黄色琉璃瓦に葺き替えたことは皇帝権力が寺院に作用した結果の一つである。黄色琉璃瓦は皇帝権力の高貴性を表現している。

第三節 3 空間の相互関係

(1) 中国仏教・チベット仏教の空間

異なる系統の仏教には高低、貴賤の差別がない。しかし、五台山において、建築の面積、建物の数量では、中国仏教の空間はチベット仏教の空間に比して特徴的に大きい。自立性、独立性という意味でもチベット仏教の空間に比して中国仏教の空間は優位に立つと言える。

(2) 中国仏教・皇帝権力の空間

清代は中央集権制の国家で、全ての社会的要素は皇帝権力の下におかれ、中国仏教は例外なく、皇帝権力によって支配されていた。とはいえ、五台山の寺院空間においては中国仏教の空間は皇帝権力の空間を包摂しており、中国仏教の空間は皇帝権力の空間に比して優位にあったと言える。一方、寺院内部の建築の意匠では、垂花門の設立や、歇山の屋根、黄色琉璃瓦の葺き替えなどにより、皇帝権力の空間が上位にあることが反映されていた。

(3) 皇帝権力・チベット仏教の空間

清代満州族の皇帝はチベット仏教を重視しその発展を支持した。同時に、五台山が中国仏教聖地の首席を維持するために、中国仏教寺院は破壊されず、純粋なチベット式の寺院も新築されず、チベット式の仏塔だけが五台山に導入されたと考える。建築の面積、建物の数量では、チベット仏教の空間は皇帝権力の空間を超えておらず、皇帝権力の空間は上位位置づけられていたと言えよう。

第四節 熱河との比較を通じてみた五台山の特徴

(1) 熱河の離宮と 12 寺院

第一章第一節で簡単に触れたように、「避暑山庄」という離宮が所在する熱河は中国内地三大チベット仏教中心の一つである。この離宮は熱河行宮とも呼称され、康熙 41 年 (1702) から乾隆 57 年 (1792) までの約 90 年間をかけて造営され、北京に次ぐ清代第二の政治的中心で、陪都のイメージが強かった^{注 1)}。

熱河行宮は 5.64 平方キロの規模を有し、「宮殿区」「湖洲区」「平原区」「山岳区」の四つの部分で構成されている。その周りに厚さの 2 メートル、長さの 9,676 メートルの城壁 (宮



図 6-4-1 熱河のマスタープラン

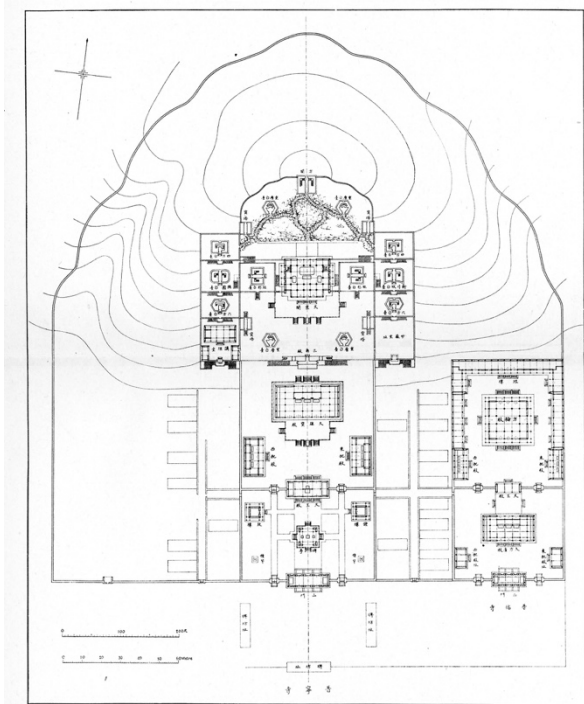


图 6-4-2 普寧寺·普佑寺平面圖
(1933 年、竹島卓一作成)

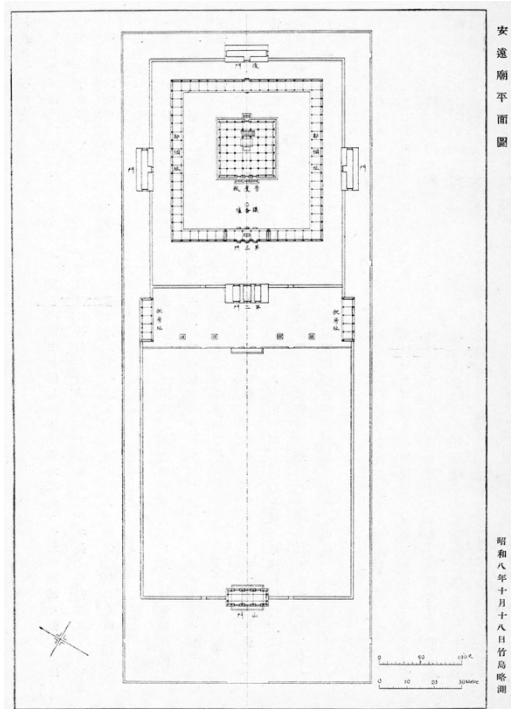


图 6-4-3 安遠廟平面圖
(1933 年、竹島卓一作成)

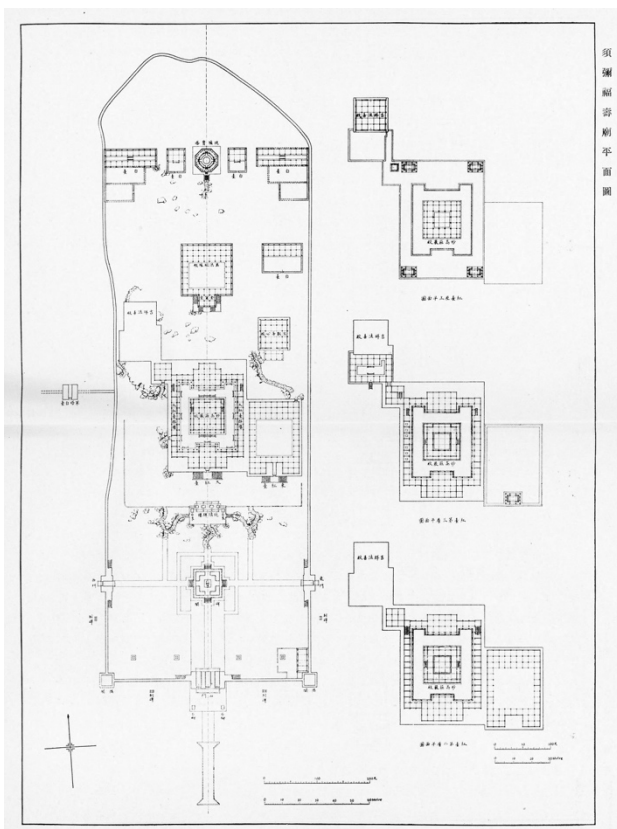


图 6-4-4 須彌福壽之廟平面圖
(1933 年、竹島卓一作成)

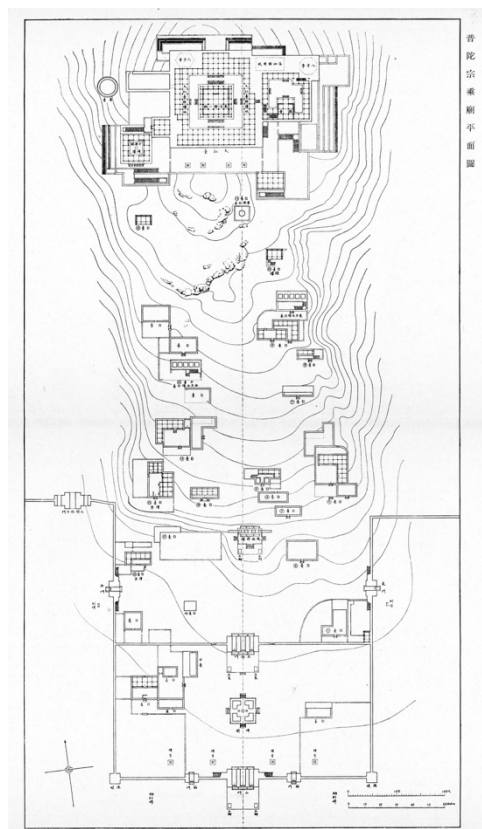


图 6-4-5 普陀宗乘之廟平面圖
(1933 年、竹島卓一作成)

牆) が建てられ、主な 9 カ所の宮門と 3 カ所の脇門(便門) が開かれた(図 6-4-1) 注2)。皇帝の權威が大規模の離宮に表現されていた。

熱河行宮の東と北には、康熙・乾隆年間に羅漢堂、広安寺、殊像寺、広縁寺、溥善寺、溥仁寺、普佑寺、安遠廟、普樂寺、普陀宗乘之廟、須彌福壽之廟、普寧寺の 12 寺院が新築され、これらの寺院は全てチベット仏教寺院であった(図 6-4-1)。12 の寺は異なる八つの機関によって管理されていたため、「外八廟」とも称されていた。これらの寺院には祝事(慶功)、祝宴(宴賞)のため、ダライ・ラマとパンチェン・ラマが滞在したため、中央アジアから熱河に移住したモンゴル族のために建設された色々な縁起があったという(表 6-4-1) 注3)。

熱河の 12 寺の伽藍の構成を、中国仏教・チベット仏教・皇帝権力の三つの空間が存在したかどうかによって、分類すると、12 の寺は中国仏教の空間のみが存在する寺院(C)、中国仏教の空間とチベット仏教の空間が併存する寺院(C・E)、チベット仏教の空間と皇帝権力の空間が併存する寺院(T・E) および中国仏教・チベット仏教・皇帝権力の三つの空間が共存する寺院(C・T・E) の 4 タイプに分類できる(図 6-4-2~6) 注4)。

寺院にある皇帝権力の空間は碑文をおさめる碑院の形式で現れた。チベット仏教の空間

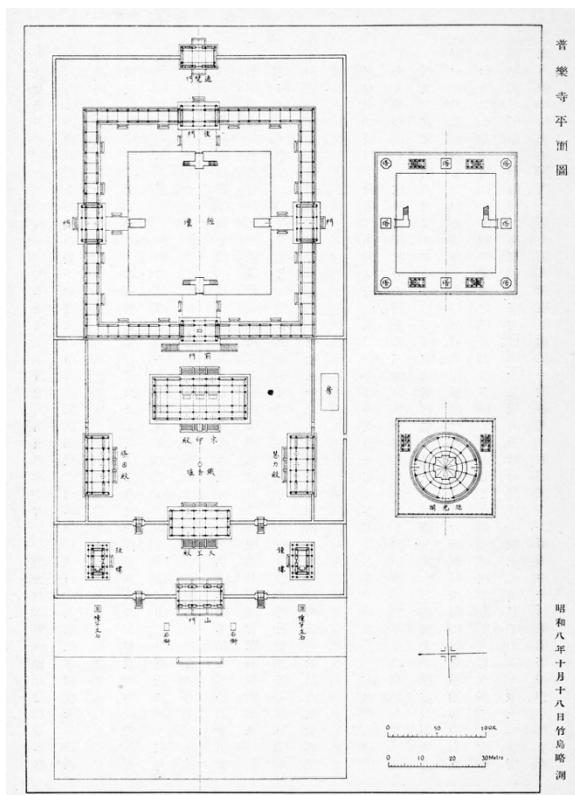


図 6-4-6 普樂寺平面図
(1933 年、竹島卓一作成)



図 6-4-7 普陀宗乘之廟
(1940 年、土浦亀城・岸田日出刀撮影)

はチベット式の自由的な配置、および曼荼羅のような配置（同心円の形式、「十」字型の中心軸がある）の二つのタイプで表現された。曼荼羅のような伽藍配置は西暦8世紀チベット最初の寺院であるサムイェー寺（桑耶寺）に遡るといえる。加えて、建築の様式、意匠などでは、建築の構造、開口部、屋根形、彩色や、仏塔などの伝統的なチベット仏教の要素が多用されたことが熱河寺院の特徴である（図 6-4-7）。一方、三つの空間の相互関係においては、性格が異なる空間は山門からの中心軸を沿って一列に配置され、それぞれの間には明確な境界があったとみられる。

表 6-4-1 熱河の 12 寺院

番号	寺院	建設年代	西暦	性質	分類	説明
1	羅漢堂	乾隆 39 年	1774	チベット 仏教寺院	C	浙江省海寧にある安国寺羅漢堂を模倣して建築された。
2	広安寺	乾隆 37 年	1772	チベット 仏教寺院	C	皇太后の誕生日を祝うために建築された。寺内に戒壇があった。
3	殊像寺	乾隆 39 年	1774	チベット 仏教寺院	C	皇太后の誕生日を祝うために建築された。五台山にある殊像寺を模倣した。
4	広縁寺	乾隆 45 年	1780	チベット 仏教寺院	C	-
5	溥善寺	康熙 52 年	1713	チベット 仏教寺院	C	聖祖の 60 歳の誕生日のために建築された。
6	溥仁寺	康熙 52 年	1713	チベット 仏教寺院	C	聖祖の 60 歳の誕生日のために建築された。
7	普佑寺	乾隆 25 年	1760	チベット 仏教寺院	C・T	普寧寺に附属された寺院（輔寺）。皇帝によって建築された。
8	安遠廟	乾隆 29 年	1764	チベット 仏教寺院	C・T	中央アジアから熱河に移動してきたジュンガルの達什達瓦部の信仰のために、ジュンガル・ハン帝国時（17～18 世紀）の新疆地区にある固爾札廟（チベット仏教寺院）を模倣して建築された。
9	普樂寺	乾隆 31 年	1766	チベット 仏教寺院	C・T	カザフ人（ハ薩克族）、キルギス人（布魯特族）の首領は中央アジアから熱河に朝覲し

						た際に、皇帝によって曼荼羅の形に従って建築された。
10	普陀宗乘之廟	乾隆 32～36 年	1767～1771	チベット 仏教寺院	T・E	高宗の 60 歳と太后の 80 歳の誕生日を祝い、同時にヴォルガ川下流の沿岸で生活していたトルグート（土爾扈特部）は清朝に帰還し、ルグートの首領は熱河に朝覲してきた。このために、皇帝によってチベットのポタラ宮を模倣して建築された。
11	須彌福壽之廟	乾隆 45 年	1780	チベット 仏教寺院	T・E	高宗の 70 歳の誕生日の際に、パンチェン・ラマ 6 世は熱河に拝賀した。皇帝はこのために建築した。パンチェン・ラマが法主を務めるタシルンポ寺を模倣して新築された。
12	普寧寺	乾隆 20～23 年	1755～1758	チベット 仏教寺院	C・T・E	モンゴルのジュンガル（準噶爾部）の乱の平定を記念するため、承德でモンゴルのオイラト（衛拉特部）連合の四つの部族（厄魯特部、土爾扈特部、和碩特部、杜爾布特部）を宴会に招いた。寺院はチベットのサムイェー寺を模倣して建築された。
注) 「-」は史料なし。						

(2) 五台山の特徴

最後に、この熱河と比較することで、以下の 5 点を五台山の特徴として位置づけたい。① 在来の中国仏教聖地。皇帝の権力によって白紙から建設された熱河と比較すると、チベット仏教が伝来する前に、既に五台山では中国仏教の聖地として仏教が盛んで、多くの中国仏教寺院が建立されていた。② 中国仏教・チベット仏教が共存した聖地。チベット仏教が定着した後、五台山には中国仏教とチベット仏教が共存した。熱河離宮の周りには寺院が全てチベット仏教寺院であったのに対して、中国仏教・チベット仏教寺院の両方が存したことも五台山の特徴である。③ チベット仏教を表現する手段は五台山では乏しかった。熱河の寺院建築には豊富な伝統的なチベット仏教の要素が取り込み、チベット仏教の空間がチベット式の自由な配置、および曼荼羅のような配置で表現されたが、五台山寺院にあるチベット仏教

の建築的表現手段はチベット式の仏塔だけであり、寺院にあるチベット仏教の空間はチベット式の仏塔と中国式の伽藍の中に用意された塔院だけである。④皇帝権力の影響は大きかった。五台山では、皇帝権力の空間は碑院だけではなく、精舎・座落院の形式で寺院に取り込んだ。寺内のチベット式の仏塔も皇帝権力によって建立された。⑤中国仏教・チベット仏教・皇帝権力の三つの空間の配置。熱河の場合、三つの空間の間に明確な境界があり、中心軸に沿って配置されたことに対して、五台山ではチベット仏教・皇帝権力の空間が中国仏教の空間の横と隅に設けられ、全体として空間の一体性が保たれていた。

注

- 注 1) 王淑雲、『清代北巡御道和塞外行宮』、中国環境科学出版社、1989 年、頁 44-53。祁美琴、安子昂、「試論藏傳佛教的王朝化与国家認同—以清朝敕建藏傳佛教為中心的考察」、《清史研究》、2019 年 01 期、頁 1-16。孫大章、『承德普寧寺』、中国建築工業出版社、2008 年、頁 2-16。
- 注 2) 天津大学建築系、承德文物局、『熱河古建築』、中国建築工業出版社、1982 年、頁 114-125。
- 注 3) 孫大章、『承德普寧寺』、中国建築工業出版社、2008 年、頁 2-16。孫大章、『中国古代建築史 第五卷 清代建築 (第二版)』、中国建築工業出版社、2016 年、頁 281-283。
- 注 4) 関野貞、竹島卓一、『熱河』、座右寶刊行會、1937 年。岸田日出刀、土浦亀城、『熱河遺跡』、相模書房、1940 年。天津大学建築系、承德文物局、『熱河古建築』、中国建築工業出版社、1982 年を参考。

図表出典

第四節

- 図 6-4-1 熱河のマスタープラン。出典：天津大学建築系、承德文物局、『熱河古建築』、中国建築工業出版社、1982 年、頁 16-17 により、筆者加筆。
- 図 6-4-2 普寧寺・普佑寺平面図。出典：関野貞、竹島卓一、『熱河』、座右寶刊行會、1937 年、頁 142-143。
- 図 6-4-3 安遠廟平面図。出典：関野貞、竹島卓一、『熱河』、座右寶刊行會、1937 年、頁、157。
- 図 6-4-4 須彌福壽之廟平面図。出典：関野貞、竹島卓一、『熱河』、座右寶刊行會、1937 年、頁 214-215。
- 図 6-4-5 普陀宗乘之廟平面図。出典：関野貞、竹島卓一、『熱河』、座右寶刊行會、1937 年、頁 178-179。
- 図 6-4-6 普樂寺平面図。出典：関野貞、竹島卓一、『熱河』、座右寶刊行會、1937 年、頁、165。
- 図 6-4-7 普陀宗乘之廟。出典：岸田日出刀、土浦亀城、『熱河遺跡』、相模書房、1940 年、頁 71、78。
- 表 6-4-1 熱河の 12 寺院。出典：孫大章、『承德普寧寺』、中国建築工業出版社、2008 年、頁 2-4。孫大章、『中国古代建築史 第五卷 清代建築 (第二版)』、中国建築工業出版社、2016 年、頁 281-283。関野貞、竹島卓一、『熱河』、座右寶刊行會、1937 年。岸田日出刀、土浦

亀城、『熱河遺跡』、相模書房、1940年により、筆者作成。

主な参考文献

史料

- 1) 楊銜之、『洛陽伽藍記』、全5巻、臺灣中華書局、民国58年(1969)。
- 2) 円仁、『入唐求法巡礼行記』、広西師範大学出版社、2007年。
- 3) 延一、『廣清涼傳』、全3巻、北宋嘉祐5年(1060)。
- 4) 李誠(撰)、王海燕(注譯)、『營造法式譯解』、華中科技大学出版社、2014年
- 5) 程文海、『雪樓集』、全30巻、元代至正14年(1354)。
- 6) 鎮澄、『清涼山志』、全10巻、明代萬曆24年(1596)。
- 7) 老藏丹巴、『清涼山新志』、全10巻、清代康熙40年(1701)。
- 8) 愛新覺羅弘晝、『清涼山小志』、全1巻、清代乾隆11年(1746)。
- 9) 『欽定清涼山志』、全22巻、清代乾隆50年(1785年)。
- 10) 董誥など、『西巡盛典』、全24巻、清代嘉慶17年(1812)。
- 11) 鄒愛蓮(主編)、『清代起居注・康熙朝』、中国第一歴史档案館蔵、北京所蔵、中華書局、2009年。
- 12) 庫勒納など、『清代起居注・康熙朝』、国立故宮博物院珍藏、臺北所蔵、聯經出版事業公司、2009年。
- 13) 中国第一歴史档案館編、『乾隆帝起居注』、広西師範大学出版社、2002年。
- 14) 『大清高宗純(乾隆)皇帝實録』、華聯出版社、1964年。
- 15) 中国第一歴史档案館編、『嘉慶帝起居注』、広西師範大学出版社、2006年。
- 16) 『大清仁宗睿(嘉慶)皇帝實録』、華聯出版社、1964年。
- 17) 中国第一歴史档案館、「乾嘉年間五台山寺廟行宮修繕工程史料(上)」、『歴史档案』、2001年03期。
- 18) 中国第一歴史档案館、「乾嘉年間五台山寺廟行宮修繕工程史料(下)」、『歴史档案』、2001年04期。
- 19) 土觀・洛桑卻吉瑪(著)、陳慶英、馬連龍(譯)、『章嘉国師若必多吉傳』、民族出版社、1988年。
- 20) 中国第一歴史档案館、「三世章嘉呼圖克圖圓寂前後史料選譯(上)」、『歴史档案』、1995年04期。
- 21) 中国第一歴史档案館、「三世章嘉呼圖克圖圓寂前後史料選譯(下)」、『歴史档案』、1996年01期。
- 22) 『景印 文淵閣四庫全書』、台湾商務印書館、集部二四二、別集類、第一三〇三冊、1983

- 年。
- 23) 『景印 文淵閣四庫全書』、台灣商務印書館、集部二四四、別集類、第一三〇五冊、1983年。
 - 24) 『景印 文淵閣四庫全書』、台灣商務印書館、集部二四七、別集類、第一三〇八冊、1983年。
 - 25) 『景印 文淵閣四庫全書』、台灣商務印書館、集部二四八、別集類、第一三〇九冊、1983年。
 - 26) 『景印 文淵閣四庫全書』、台灣商務印書館、集部二五〇、別集類、第一三一冊、1983年。
 - 27) 會典館編、趙雲田（点校）、『欽定大清會典事例 理藩院』、中国藏学出版社、2006年。
 - 28) 趙林恩（收録点校）、『五臺山碑文』、山西人民出版社、2016年。
 - 29) 崔正森、王志超、『五臺山碑文選注』、北岳出版社、1995年。
 - 30) 崔正森、『五臺山遊記選注』、山西人民出版社、1989年。
 - 31) 張若靄、「畫鎮海寺雪景」、乾隆11年（1746）、国立故宮博物館（台北）。
 - 32) 張若澄、「畫鎮海寺雪景」、乾隆15年（1750）、国立故宮博物館（台北）。
 - 33) 「五台山行宮座落地盤圖」、嘉慶15年（1810）、中国国家図書館蔵。
 - 34) 文化庁編、『宗教年鑑（平成30年版）』、2018年。
 - 35) 矢野恒太記念会、『日本のすがた 2019-表をグラフでみる社会科資料集』、2019年。

文書

- 1) International Council on Monuments and Sites（国際記念物遺跡会議）、『EVALUATIONS OF CULTURAL PROPERTIES』、2009年。
- 2) State Administration of Cultural Heritage（国家文物局）、「Complementary Information on Nomination of Mount Wutai for Inscription on the World Heritage List-Reply to Suggestions and Questions of ICOMOS」、2009年。
- 3) State Administration of Cultural Heritage（国家文物局）、『The Nomination Report for Inscription on the World Heritage List』、2009年。

著作

- 1) 太田博太郎、藤井恵介ほか、『日本建築様式史』、美術出版社、2010年。
- 2) 太田博太郎、『南都七大寺の歴史と年表』、岩波書房、1979年。

- 3) 景山春樹、『比叡山と高野山』、教育社、1991年。
- 4) 渡辺守順、『比叡山延暦寺 世界文化遺産』、吉川弘文館、1998年。
- 5) 藤川昌樹、『高野山と密教文化』、小学館スクウェア、2006年。
- 6) 松長有慶、『高野山』、岩波新書、2014年。
- 7) 鈴木亘、『中世鎌倉五山の建築』、中央公論美術出版、2016年
- 8) 川上貢、『禅院の建築—禅僧のすまいと祭享』、中央公論美術出版、2005年。
- 9) 梁思成、『中国建築史』、三聯書店、2018年。
- 10) 劉敦楨、『中国古代建築史（第二版）』、中国建築工業出版社、1984年。
- 11) 黄寶瑜、『中国建築史』、國立編譯館、民国62年（1973）。
- 12) 潘谷西、『中国建築史（第六版）』、中国建築工業出版社、2003年。
- 13) 孫大章、『中国古代建築史 第五卷 清代建築（第二版）』、中国建築工業出版社、2016年。
- 14) 孫大章、『中国仏教建築』、中国建築工業出版社、2017年。
- 15) 孫大章、『承德普寧寺』、中国建築工業出版社、2008年。
- 16) 天津大学建築系、承德文物局、『熱河古建築』、中国建築工業出版社、1982年
- 17) 王貴祥、『中国漢伝仏教建築史』、清華大学出版社、2016年。
- 18) 王貴祥、賀従容など、『中国古建築測繪十年 2000-2010』、清華大学出版社、2011年
- 19) 『北魏洛陽永寧寺 中国社会科学院考古研究所発掘報告』、奈良文化財研究所、1998年。
- 20) 蕭默、『敦煌建築研究』、機械工業出版社、2003年。
- 21) 北京市古代建築研究所（編）、『寺觀』、北京出版集团公司、2014年
- 22) 劉暢、『從圓明園内檐裝修研究到北京公館室内設計』、清華大学出版社、2004年、
- 23) 張家驥、『簡明中国建築論』、江蘇人民出版社、2012年。
- 24) 馬炳堅、『北京四合院建築』、天津大学出版社、2004年。
- 25) 竹島卓一、『中国の建築』、中央公論美術出版社、1970年。
- 26) 田中淡、『中国建築の特質』、中央公論美術出版社、2018年。
- 27) 近藤豊、『古建築の細部意匠』、大河出版社、2013年。
- 28) 宿白、『藏伝仏教寺院考古』、文物出版社、1996年。
- 29) 陳耀東、『中国藏族建築』、中国建筑工業出版社、2007年。
- 30) 包慕萍、『モンゴルにおける都市建築史研究』、東方書店、2005年。
- 31) 龍珠多傑、『藏伝仏教寺院建築文化研究』、社会科学文献出版社、2016年。
- 32) 大岩昭之、『チベット寺院・建築巡礼』、東京堂出版社、2005年。

- 33) 友田正彦、『チベット/天界の建築』、INAX 出版社、1995 年。
- 34) 王淑雲、『清代北巡御道 and 塞外行宮』、中国環境科学出版社、1989 年。
- 35) 李文君、『康乾南巡區額楹聯通解』、故宮出版社、2017 年。
- 36) 向斯、『乾隆南巡的故事』、故宮出版社、2016 年。
- 37) 趙雲田、『大清帝国的得与失 乾隆出巡記』、江西人民出版社、2017 年。
- 38) 杜家驥、李然、『嘉慶事典』、紫禁城出版社、2010 年。
- 39) 崔正森、『五台山仏教史』、山西人民出版社、2000 年。
- 40) 崔正森、『五台山一百零八寺』、山西科学技術出版社、2013 年。
- 41) 趙改萍、『山西仏教史 五台山卷』、中国社会科学出版社、2014 年。
- 42) 王森、『西藏佛教發展史略』、中国藏学出版社、2002 年。
- 43) 釋妙舟、『蒙藏仏教史』、廣陵書社、2009 年。
- 44) 秦永章、『章嘉国師与乾隆皇帝』、青海人民出版社、2008 年。
- 45) 張羽新、『清代四大活仏』、中国人民大学出版社、1989 年。
- 46) 楊玉潭、周新玉ほか、『五台山寺廟大觀』、山西人民出版社、1985 年。
- 47) 日比野丈夫、小野勝年、『五台山』、平凡社、2009 年。
- 48) 関野貞、常盤大定、『支那佛教史蹟評解 (五)』、佛教史蹟研究會、1928 年。
- 49) 関野貞、常盤大定、『支那文化史蹟 解説第一卷』、法蔵館、1939 年。
- 50) 関野貞、竹島卓一、『熱河』、座右寶刊行會、1937 年。
- 51) 岸田日出刀、土浦亀城、『熱河遺跡』、相模書房、1940 年。
- 52) Ernst Boerschman、『Lageplane Des Wutai Shan Und Verzeichnisse Seiner Bauanlagen in Der Provinz Shanxi』、Wiesbaden : Harrassowitz Verlag、2012 年。
- 53) Eduard Kogel、『The grand documentation. Ernst Boerschman and Chinese religious Architecture(1906-1931)』、DE GRUYTER、2015 年。

論文

- 1) 陳遲、「明清四大仏教名山的形成及寺院歴史変遷」、清華大学博士学位論文、2017 年。
- 2) 李桂紅、「四大名山仏教文化及其現代意義」、四川大学博士学位論文、2003 年。
- 3) 楊小琳、「元大都大聖壽万安寺与白塔建築布局形制初探」、中央民族大学修士学位論文、2012 年。
- 4) 宿白、「敦煌莫高窟中の「五台山図」』、『文物』、1951 年 05 期。
- 5) 柴澤俊、劉憲武、「南禅寺』、『文物』、1980 年 11 期

- 6) 祁英濤、柴澤俊、「南禪寺大殿復」、『文物』、1980年11期。
- 7) 高天、「南禪寺大殿修繕與新中國初期文物建築保護理念的發展」、『古建園林技術』、2011年02期。
- 8) 段智鈞、「南禪寺大殿大木結構用尺與用材新探」、『中國建築史論匯刊』、2008年00期
- 9) 梁思成、「記五台山佛光寺的建築—薈萃在一寺的魏、齊、唐、宋的四個孤例；薈萃在一殿的唐代四種藝術」、『文物參考資料』、1953年21期。
- 10) 羅哲文、「山西五台山佛光寺大殿發現唐、五代的題記和唐代壁畫」、『文物』、1965年04期。
- 11) 張榮、「佛光寺東大殿文物建築勘察研究」、『古建園林技術』、2010年03期。
- 12) 張榮、劉暢、臧春雨、「佛光寺東大殿實測數據解讀」、『故宮博物院院刊』、2007年02期、
- 13) 溫靜、「「殿堂」—解讀佛光寺東大殿的斗拱設計」、『建築學報』、2017年06期。
- 14) 任思捷、「唐初五台山佛光寺的政治空間與宗教構建」、『建築學報』、2017年06期。
- 15) 杜季月、「20個中國漢傳佛寺的平面布局研究」、西安建築科技大學碩士學位論文、2013年。
- 16) 武哲、「五台山寺廟園林建築與自然景觀融合研究」、西安建築科技大學碩士學位論文、2017年。
- 17) 謝岩磊、「山地漢傳佛教寺院規劃布局與空間組織研究」、重慶大學碩士學位論文、2012年。
- 18) 朱明燁、「近期五台山寺廟建築保護途徑案例分析」、太原理工大學碩士學位論文、2013年。
- 19) 張靜、「五台山菩薩頂環境藝術與保護研究」、太原理工大學碩士學位論文、2014年。
- 20) 祁美琴、安子昂、「試論藏傳佛教的王朝化與國家認同—以清朝敕建藏傳佛教為中心的考察」、『清史研究』、2019年01期。
- 21) 林士鉉、「中華衛藏：清仁宗西巡五臺山研究」、『故宮學術季刊』、第二十八卷第二期、民國九十九年冬季（2010）。
- 22) 王敬雅、「康熙西巡五台山若干問題探析」、『故宮博物院院刊』、2014年01期。
- 23) 余思奇、趙詩迪、「「五台山行宮座落地盤圖」研究—繪制內容、年代および繪制背景考」、『華中建築』、2019年09期。
- 24) 余思奇、藤川昌樹、「清代五台山漢藏混合樣式寺院的成立—以鎮海寺為例」、『華中建築』、2019年10期。
- 25) 王茵、「樣式雷筆下的五台山行宮」、『人民日報（海外版）』、2007年09期。
- 26) 明和、還玉、「菩薩頂的建築與塑像特點」、『五台山研究』、1996年01期。
- 27) 余昀、「五台山寺廟建築的空間組織及佛教文化意義」、『忻州師範學院學報』、2008年02

期。

- 28) 侯雪、「五台山塔院寺伽藍殿閼帝壁画芸術探析」、『忻州師範学院学報』、2018年、第34卷、第6期。
- 29) 崔正森、「鎮海寺簡史」、『五台山研究』、2003年04期。
- 30) 崔玉卿、「鎮海寺楹聯牌匾」、『五台山研究』、2003年04期。
- 31) 一凡、「歷代名人吟詠鎮海寺」、『五台山研究』、2003年04期。
- 32) 閻献晨、「毛主席、周副主席路居五台山」、『五台山研究』、1986年04期。

工具書

- 1) 『広辞苑（第四版）』、岩波書店、1996年。
- 2) 『日本大百科全書』、小学館、1988年。
- 3) 総合仏教大辞典編集委員会、『総合仏教大辞典』、法蔵館、2005年。
- 4) 彰国社編、『建築大辞典（第2版）』、彰国社、1993年。
- 5) 王效青、吳銳など、『中国古建築術語辞典』、山西人民出版社、1996年。

清代皇帝系譜

清代（1644～1912年） 皇室は満州族の愛新覚羅氏（アイシンギョロシ）					
世数	廟号	名前	年号	在位期間	首都
1代	太祖	愛新覚羅ヌルハチ（努爾哈赤）	天命	1616～1626	瀋陽
2代	太宗	愛新覚羅ホнтаイジ（皇太極）	天聰	1627～1636	瀋陽
			崇徳	1636～1643	
3代	世祖	愛新覚羅福臨	順治	1644～1661	北京
4代	聖祖	愛新覚羅玄燁	康熙	1662～1722	北京
5代	世宗	愛新覚羅胤禛	雍正	1723～1735	北京
6代	高宗	愛新覚羅弘曆	乾隆	1736～1795	北京
7代	仁宗	愛新覚羅顥琰	嘉慶	1796～1820	北京
8代	宣宗	愛新覚羅旻寧	道光	1821～1850	北京
9代	文宗	愛新覚羅奕訢	咸豊	1851～1861	北京
10代	穆宗	愛新覚羅載淳	同治	1862～1874	北京
11代	徳宗	愛新覚羅載湉	光緒	1875～1908	北京
12代	なし	愛新覚羅溥儀	宣統	1908～1912	北京

チャンキャ・ホトクト系活仏系譜

世数	名前	生没年	説明
1 世	チャンクランサイラ	1607～1641	青海省章嘉村に生まれた。
2 世	ガワン・ロプサンチ ユーデン	1642～1714	青海省湟中県に生まれ、パンチェン・ラマ 4 世によって選定された。
3 世	ロルペー・ドルジェ	1717～1786	甘肅省涼州に生まれ、パンチェン・ラマ 5 世に選定され、聖祖によって認定された。世宗から「灌頂普善廣慈大国師」の称号が与えられた。高宗から「振興黄教大慈大国師」の称号が与えられた。
4 世	イエーシェー・タン パギヤルツェン	1787～1846	甘肅省の噶達托布達寺の付近に生まれた。高宗によって認定された。仁宗から「管理京師喇嘛班第札薩克喇嘛掌印喇嘛」の称号が与えられた。宣宗は「大国師印」を下賜した。
5 世	イエーシェー・タン ペーニマ	1849～1875	青海省西寧のチベット族の家庭に生まれた。穆宗により「大国師」の称号が与えられた。
6 世	ロプサン・ダンセン ギャムツォ	1878～1888	青海省西寧の付近に生まれた。北京雍和宮で「金瓶掣籤」という選定法によって選定された。
7 世	リーイン・イエーシ ェードルジェ	1891～1957	青海省に生まれた。徳宗は「灌頂普善廣慈大国師印」を下賜した。国民政府によって「灌頂普善廣慈宏濟光明昭應闡化綜持黄教大国師」「大總統府高等顧問」「管理京城、内蒙、察哈爾、五台山、熱河、多倫等處各寺廟掌印」に冊封された。1949 年台湾に赴き、1957 年台湾で逝去し、法脈は絶えた。

成稿一覧

査読付論文	1	余思奇、藤川昌樹、「清代五台山鎮海寺の建築の構成とその変容—中国仏教、チベット仏教と皇帝権力の関係に着目して」、『日本建築学会計画系論文集』、2019年12月、第84巻、第766号。
	2	余思奇、藤川昌樹、「清代五台山漢藏混合様式寺院の成立—以鎮海寺為例」、『華中建築』、2019年10期。
	3	余思奇、趙詩迪、「五台山行宮座落地盤圖」研究—繪制内容、年代および繪制背景考」、『華中建築』、2019年09期。
口頭発表	1	余思奇、藤川昌樹、「五臺山碑文」からみた明代塔院寺の堂塔」、『日本学術講演梗概集』、2019年9月。
	2	余思奇、藤川昌樹、「乾隆51年五台山鎮海寺章嘉呼圖克圖靈塔の建立」、『日本学術講演梗概集』、2018年9月。
	3	Siqi YU, Masaki Fujikawa, The spatial composition of Wutai Mountain in the Late Qing Dynasty (1840–1912AD), International Conference on East Asian Architectural Culture, October 2017.
	4	余思奇、藤川昌樹、「西巡盛典」から見る嘉慶16年の五台山」、『日本学術講演梗概集』、2017年8月。
	5	余思奇、藤川昌樹、「清代「五臺山聖境全圖」に描かれた五台、台灣及び周辺地区の状況」、『日本学術講演梗概集』、2016年8月。

謝 辞

平成 27 年 4 月に藤川研究室に入って中国建築史の研究を始め、ついに令和 2 年 3 月に博士學位論文を書き出しました。5 年間には、藤川昌樹先生から丁寧な指導を賜り、厚く感謝を申し上げます。本論文が形成する過程においては、藤井恵介、有田智一、山田協太、雨宮護などの諸先生から多大な助言を賜り、感謝の意を表します。特に、藤川滯子先生は本論文の日本語や、仏教歴史・文化の部分を度々チェックしていただき、厚く御礼を申し上げます。なお、同済大学巨凱夫先輩からは研究に必要な参考資料の提供があります。感謝する次第です。最後に、いつも支持してくれる両親に本論文を捧げます。

令和二年春月

ヨ シキ